

人及び藝術家としての正岡子規



(4) 日本本文豪評傳叢書

PL  
811  
A83Z828

Nishinomiya, Tōchō  
Masaoka Shiki

East

PL  
811  
A83Z828

'R' CARD

EAS

1

.....  
.....  
.....









家人及び藝術  
としての

正岡子規

西宮藤朝著

PL

811

A83 Z 828





## 序

私は所謂俳人でないといふ點に於いては、全くの門外漢である。けれども俳人必ずしも俳句を解するものでなく、門外漢必ずしも俳句を解しないといふ理由はない。要するに俳句を解するか何うかといふことは、藝術を解するか何うかといふ點に依據しなければならぬ。門外漢たる私が俳人子規の評傳を敢へてしたのは、此の點から勇氣づけられたからである。子規居士其の人も既に當時の所謂俳句の門外漢ではなかつたか。

本書は今日の所謂俳句の門内漢から見たならば、多少不滿の點があるかも知れない。その人達の見方に抵觸するやうな箇所もあるかも知れない。けれども門内漢の見方が必ずしも妥當である理由はない。今日の俳壇にあつては、門内漢が却つて正しき見解から遠ざかつてゐる傾向があると言はれてゐる。今日一部の俳壇に再び子規の事業を

回顧しようとするものが出て来たのは、それを證明してゐるものではなからうか。それはまことによい傾向である。けれども藝術の正しき見解から遠ざかつてゐるところの彼等自身の眼で子規の事業を見るよりも、此の際寧ろ門外漢たるものゝ眼から見た子規を見る必要がないであらうか。若し斯うした意味に於いて、多少なりとも本書から得るところがあつたならば、私の希望は達するのである。

大正七年四月二日

久世山下にて 西宮 藤朝識

目次

第一章	子規とその時代	二
第二章	子規の事業	二
第三章	子規とは如何なる人ぞ	六
一、松山時代		六
二、東京遊學時代		三五
三、新聞記者時代		六六
四、病床時代		四六
第四章	子規とその周圍	六〇
第五章	改革者としての子規の性格及び其態度	七一
第六章	子規の俳論	八九
一、美と俳句		九〇

二、俳句と他の文學……………	九七
三、俳句の種類と季題……………	一〇一
四、俳句と連想、印象、其他……………	一〇八
五、芭蕉論と燕村論……………	一一五
六、月並俳句と新作句……………	一二三
第七章 俳人としての子規……………	一四〇
第八章 歌人としての子規……………	一七〇
第九章 子規の寫生文論……………	一八五
(附) 子規年譜……………	一九六

人及び藝術  
家としてのの

正岡子規

西宮藤朝著

## 第一章 子規とその時代

明治前半期の文藝界に於いては、何れの方面でも其の主要なる活動は、舊文藝破壊の運動であり、又それと同時に新文藝樹立の努力であつた。小説方面でも、和歌方面でも、俳句方面でも、凡てさうした活動を基調として進んで來たのである。それらは一種の運動であるとは言ひながら、尙其の運動の指導者といふか、支配者といふか、兎に角その中心となる人物がなければならぬ。さうした人物を、若し小説界に求めるならば、『小説神髓』を著した坪内逍遙氏がある。若し和歌の方面に求めるならば、淺香社を組織して新進歌人を養成した落合直文氏がある。然し之を俳句界に求めるならば、誰を擧ぐることが出來ようか。言ふ迄もなくそれは我が正岡子規其人である。私は子規が如何なる意味で新俳句樹立の中心人物であるか、如何なる機運に依つてそれが爲されたか、といふ問題を述べようと思ふのであるが、それに先き立つて、先

づ當時の一般文明乃至文壇の有様を少し語らなければならぬ。

維新以來、我國は外國文明の輸入に是れ日も足らざる急がしい有様であつたが、初めは先づ實用的方面に關係あるものから輸入が行はれた。例へば國家組織、政治上の諸制度、兵制、教育制度等に關する知識の如きはそれである。これは如何なる國にあつても他の文明を輸入せんとする時に必ず踏むべき順序である。即ち功利的物質的に必要なものから漸次精神的のものに及ぶのである。我國にあつても初は開國以來十年十五年といふものは、殆んど國家及び社會の健全なる基礎の建設に忙しくて、他の純精神的方面を顧みる暇はなかつたのである。福澤諭吉翁などが權威を持つてゐたのは、時勢上當然の事といはねばならない。

さうした有様であるが故に、新しい文學などが興らう道理がない。唯徳川時代の末頃から墮落し初めた文學の餘命が、漸く保たれてゐるといふだけに過ぎなかつた。例へば戯作者的方面では假名垣魯文とか、三世種彦（高島藍泉）とか、二世春水（染崎延

房)とかいふ連中が、『西洋膝栗毛』『安愚樂鍋』『胡瓜圖解』『白縫物語』『八犬傳犬廻草子』『北雪美談時代加賀實』『雜誌雨夜之質庫』などいふものを書いて、文化、文政以後の作者の糟粕を嘗めてゐたのである。

處が斯うした文學で何時迄も満足してゐるわけには行かぬ。一方では政治家が外國の政治小説を讀みて感動し、それを我國に翻譯することが流行し出した。『西洋血潮ニシノウミの荒波』とか『自由の凱歌』とかいふのは、それである。斯くて外國にも戯作のあることを知つた當時の新しい人々は、漸くその讀書の範圍を擴げて、政治小説とか革命小説とかいふもの以外の、純粹の小説に眼を着けるやうになり、リットン、ヂスレリイ、ユーゴー、シエクスピアなどを好んで翻譯し出したのである。

斯うした西洋の純藝術に養はれた新しい人々は、小説とは何ぞや、文學とは何ぞやなどいふ根本の藝術的疑問に突き當つてそれに對する知識を得、漸く我國の文壇に向つて革新の機運を作らんとしたのである。而してそれを最も促進したものは、明治



十八年に出た坪内逍遙氏の『小説神髓』といふ文學論と、同氏の小説『當世書生氣質』といふ作品とである。

一度此の兩書が現はれてからは、新しき文藝家等は皆醜然として覺るところあり、それからといふもの、舊小説の權威は全く地に墮ちて、小説界の新しき大道は坦々として砥の如くなつたのである。

又一方では西洋に長詩ありて我國になきを慨し、外山、山、矢田部尙今、井上巽軒等の諸氏が、西詩に倣つて新體詩といふ新しい詩形を創造した。明治十五年四月に上梓された以上三氏合著の『新體詩抄』は此の詩の最初のものであつた。今日の所謂詩と稱せられるものは、此の當時の新體詩の進化したものに外ならない。

以上に於いて見るも兎に角我國文學の中堅が改革されて、新しい基礎の上に立つやうになつたのは、明治十五年頃から二十年頃に到る迄の間といつてよからう。

然らば俳句は何うであつたかといふに、俳句が眞に純粹の文學的立場から鑑賞され

紙文藝としての地位を明らかに自覺したものは、子規の『芭蕉雜談』が出てからである。此の『芭蕉雜談』は小説界に於ける逍遙氏の『小説神髓』とよく比較されてゐるが、新文藝樹立の意味に於いて、全く二者が同じ立場にあるものといつてよい。けれども『小説神髓』の生れたのは、前にもいつた如く明治十八年であるにも拘らず、『芭蕉雜談』の現れたのは、明治二十六年である。即ち後者が前者に後るゝこと殆んど十年に近い。我國の文壇進展の速度から言つて、十年といへば可也其間に遠い隔りがある。それであるのに俳句は何故一般の文壇から十年も遅れて初めて自覺したか、是れは仲々興味ある問題でなければならぬ。然らば其間を、俳句界は何麼状態にあつたか、私はこれから先づ前きに少し述べようと思ふ。

連歌から出た俳諧は宗鑑貞徳等を経て芭蕉となり、初めて獨立した立派な藝術となつた事は、皆人の知るところである。芭蕉は嘗に俳句といふ一形式の創造者としてのみではなく、廣い意味に於ける純藝術家としても卓越した人で、俳諧史上特筆すべき

である。けれども其後元祿時代去りて、享保時代に至れば、俳壇は漸く墮落しかけて、又純藝術的自覺をもつて句作する者が無くなつた。其後天明に入つて蕪村といふ芭蕉にも劣らざる、否或る意味に於いて芭蕉以上とも言へる天才が出て、藝術としての俳句の中興を企てた。けれども天明以後の俳人は多く、蕪村の眞價を鑑賞することを知らない。芭蕉を唯一の標的として崇拜してゐる。併し芭蕉の眞價を知らないで、芭蕉の最も缺點ある方面を賞し、或は芭蕉を自分等の分る範圍で自分等の都合のいゝやうに曲解してゐるといふ有様である。

明治に入つても此の弊は更らない。天保時代に芭蕉を曲解することに依つて墮落した蒼虬や梅室は極めて非藝術的な例の所謂月並調を天下に廣めたのであるが、其の影響が、明治時代となつて益々甚しくなつたとも言へる。

籃の目をもらぬ許りぞ初茄子 梅 室

名月や草木に劣る人の影 同

などいふ句を作つた俳人の普及せしめた俳句から、

名月や流石に雲も捨てられず

永 機

驚いてそれから鴨と知りにつけり

幹 雄

さゝなきは先づ柅檀の二葉哉

同

の如きシンセリテイの無い技巧的な俳句の生れるのも、必ずしも偶然ではない。此うした傾向の中で、右の外其角堂機一、雪中庵雀志、花の本聴秋、夜雪庵金羅などは牛耳を執つてゐたのである。彼等は俳句が藝術であるかどうか、藝術とは何麼ものか、俳句は何を詠むべきものか、などいふことは少しも知らない。否さうしたものを考へても見たことがあるまい。

それよりも驚く可きことは、彼等の生活である。彼等といつても右に挙げた人々の外に俳諧の指導者乃至教師として所謂宗匠と名のるものは、全國に數百人あり、更にそれらの門に出入して句作するものは、殆んど數萬——これは全く誇張でも何でもな

い——に及ぶといふことであつた。彼等の中の宗匠たるものは、最も卑賤な方法による一種の職業として俳句を弄んでゐた。即ち賭博に近き點取りの方法によつて門下の俳人等を欺いたり、不當の入花なるものを取つたり、或は權門に伺候し富豪に出入し以つて幫間の眞似をしたり、殆んど藝術家としてあるまじき事のみを爲して生活してゐたのである。又それら宗匠の門に出入する俳人は如何なるものぞといへば、『金持の隠居、町内の口きき、卑賤の藝人、無學の百姓、ひまな代言、不用な役人』等の如きは多く、彼等は俳句を作ることを、『床屋の將碁盤、離れ座敷の花骨牌と同種類、』のものと考へてゐたのである。彼等は全く一種の消閑遊樂の具としか見てゐなかつた。斯うした俳人が日本全國到る處に散在してゐた。子規は之に就いて言ふてゐる。

『發句俳諧の類總てこれ文學たるに相違なくんば日本文學の過半は俳諧の爲に占領せられたり。俳人宗匠の類總てこれ文學者たるに相違なくんば、日本人口の千分の一は即ち皆文學者と稱すべきものなり。嗚呼何ぞ俳諧の盛にして俳人の多きや。……』

數萬の人が月に一句づゝを作ると假定すれば一年に數十萬句を生ずべく、十年に數百萬句百年に數千萬句を生ずるに至るべく、其中には千萬の名句の現はれ出づると共に、俳句は早く詠み盡さるべき筈なるに、今日に於て其割合に名句も少く、はた俳句の盡きたりとも覺えぬは、これ其人が文學應用者にして純粹の文學者に非ざればなり。純粹の文學者は三百年間を通計して猶數百人に過ぎねば、平均一年に一人か二人の割合なるべきに、扱も現今の宗匠の夥しさよ。』

斯うした墮落の下に、明治の俳壇なるものは、實に明治の半ば過ぎ、即ち二十四五年頃迄續いてゐたのである。滔々として入り來る歐洲の文化も、思想も、彼等の圈内をば浸潤することがなかつた。

## 第二章 子規の事業

然らばその押寄せ來る歐洲文明思潮も何故、此の俳壇の圈内には及ばなかつたか。前にも言つた如く、小説を中心とする我が國文壇の中堅は、明治十五六年から七八年頃迄には、既に改革者が出で、新しい改革の火の手を擧げて、著々と文學的基礎を固めて行くやうになつたにも拘らず、俳句だけは何故それから十年も墮落したままで救はれずに來たか。

併しよく此の間の事情を観察する時には、そは必ずしも理由の無いことではない。第一我國の新文明の建設は、凡て歐洲のそれから根據を採用して爲されたものである。政治でも教育でも行政でも皆然りである。文藝にあつても彼の『小説神髓』は勿論歐洲の組織的な文藝論を基礎にして出來上つたところの文藝の原理と創作の方法とを論じたものである。

新體詩といふ自由なる詩形の創造も歐洲例へば英語の所謂ポエトリーといふ名に依つて示さるゝ詩形になぞらへたものである。斯く當時の新しき文藝は、凡て西歐のそれを標的として生れたものである。けれども俳句は極めて短詩形であつて、これに類するものは西歐には見當らない。従つて俳句に採つて以つて移すべき彼方の基礎的原理が無い。唯西歐の一般藝術論と我が俳句と接する丈けである。それとても俳句が藝術としての一般原理に迄引き上げられた一點に止まつて、俳句といふ特殊な短詩形に對する特殊な研究といふものが歐洲にはない。

第二には日本の文藝家は先づ文壇の中堅たる小説及び新體詩の改革及び創造に急がしくて俳句といふが如き小詩形に手を觸るゝ暇は無かつたこと、又は俳句の如きは文學として存在すべく餘りに小さいもので、改革すべき價値の無いものとして捨てゝ顧みなかつたことである。一方に於いて舊俳人等は無學無自覺にして藝術としての俳句を理解するものが無かつたのである。



第三は明治二十年頃迄は歐化主義が盛んであつて、日本在來のものといへば如何なるものも排斥し、西洋のものといへば如何なるものも崇拜するといふ風潮に壓倒されて、俳句といふ日本獨特の詩形が新しく社會に打つて出る機會が無かつたことである。やがて國粹保存主義、反歐化主義の思想が生れて初めて和歌と共に、俳句が注目されるやうになつたのである。

以上の外に俳句が永く改革されないで残されて來た原因は未だいくらもあるには相違ないが、大體から見ると先づ右の如きは、其中で最も大きな理由であらうと思ふ。

斯うした事情の中に、明治二十六年、『日本新聞』に正岡子規の『芭蕉雜談』が曉鐘の如く現れた。國粹保存主義の思潮が漸く天下に普からんとする際であつたから、世の人々は一齊に俳句といふもの、而して子規の俳句論に目を注ぎ出したのである。これより子規はいよく俳句革新、即ち舊き俳句を撲滅破壊して新しき俳句の建設に著者と歩を進めて行つたのである。而して子規其人を考へて見るに、彼は此の事業を企

てるには、最も適當な資格を具へてゐたやうに思はれる。即ち彼は第一に文學としての俳句、言ひ換へれば俳句の基礎的方面を研究することを怠らなかつたので、それに対する知識を十分持つてゐたのである。彼は歐洲文藝に明るいほどではなかつた迄も歐洲文藝の原理に關する大體の知識だけは、持つてゐたらしいのである。彼が藝術論は細部の議論になると、不徹底なところも可也あつたけれども、全體の志向は誤らなかつたやうである。これが彼の事業の中で最も原動力となつたところのものである。斯うした見識を持つた人が出なかつたから、俳句はいつ迄も改革されなかつたのである。

それから彼は古俳句及び其の變遷に關する知識を有り餘る程十分に持つてゐたことである。彼が大學時代に俳句分類を企て、俳句に關する研究を積んだのが、後年彼が俳句革新の事業に、何の位ゐる役に立つたか知れない。彼は一方に於いては藝術としての俳句の原理を研究すると共に、それを以て他方にあつて過去の俳句の傳統を照ら

し見るといふ舊俳人等には迎も足許にも寄り附けないことが爲し得たのである。

斯くて彼は舊俳人の生活を全然否定すると共に、彼等の俳句が、純藝術論の光りに照し見て、皆理窟の行列であり、陳腐の化物であることを觀破し、聲を大にしてそれらを排斥したのである。恰度往きに坪内逍遙氏が『小説神髓』に於いて馬琴流の教訓小説を『仁義八行の化物』として排斥し、藝術は専ら寫實に依らざるべからざる事を高調したやうに、彼子規は舊俳句の理窟と陳腐とを排して、俳句は専ら純眞なる寫生に依らざるべからざることを主張したのである。子規が嘗つて坪内氏の『小説神髓』を讀んで、且つ驚き、且つ悟るところがあつたと、自ら『天王寺畔の蝸牛廬』に於いて告白してゐるのは、最も興味ある事である。

彼は舊俳句破壊の運動に極力努力したと共に、一方に於いては、俳句を小詩形として、文學として取るに足らぬ者と賤しめて敢へて願なかつた一般文壇の常識を打破し、以つて文壇的地位を獲得せんことに、何の位奮闘したか知れない。『松蘿玉液』を見

ると是れが隨處に見出されるであらう。「俳句批評は俳句を知らざる文學者連中の筆にも上りぬ。而して多くは俳句攻撃の聲なり。俳句は複雑なる思想を現す能はず、故に吾れ俳句に與せずと言ふは可なり。若し俳句は複雑なる思想を現す能はず、故に下等なる文學なりと言はんと欲せば、先づ複雑なる思想は簡單なる思想よりも高等なりといふことを證明せざる可らず。然れども何人もしか明言し能はざるべし。何となれば短篇時に長篇に勝り、複雑なる小説或は簡單なる小説に劣るは、實際に於て誰も見とめざるを得ざる所なるべければなり。若し又複雑なる者は如何なる場合に於ても簡單なるに勝れりといふ奇人あらば、吾は其人を如何ともする能はざるなり。或る詩人が如何なる小説をも排斥して之を野卑なりと言へるが如きこれと正反對の例に屬す。亦如何ともすべからず。……俳句の趣味は其の簡單なる處にあり、簡單を捨て、複雑に就けよといふ者は、終に其簡單の趣味を解せざるの言のみ。落語家曰く、大は小を兼ねるといへども、杓子は耳搔の代りを爲さずと」の如き言は、其の一例である。斯く

て彼は俳句をして文壇の一角に確固たる地位を占めしむるに至つたのである、而して墮落せる舊俳句を一掃し、俳句を新しき純文學の基礎の上に打据ゑたところの大事業を成し遂げたのである。

此の事業は勿論子規一人の努力に依つて完成したものでない。子規の周圍に集つた彼の俳友乃至門下生の力も加つてゐれば、子規派の外に、紅葉一派の努力も認むべきである。けれどもそれらは子規の活動がなかつたならば、迎も成功することが出来なかつたことは火を賭るよりも明かである。されば明治文壇に於ける子規の地位は、恰度小説を改革した坪内逍遙氏、和歌を改革した落合直文氏等と等しくするものといつても敢へて過褒ではないであらう。

子規の活動は獨り俳句界許りではなく、和歌、新體詩、寫生文等の方面に迄爲されたが、これらは晩年からの活動であつた爲めか、未だ十分成果を擧げ得なかつたのである。従つてそれらのことは、茲には特に論じないで置く。

## 第三章 子規とは如何なる人ぞ

### 一、松山時代

然らば子規とは如何なる人ぞ、如何なる家に生れ、如何なる境遇に育ち、如何なる教育を受け、而して如何なる生活を爲せし人ぞ。私は子規の事業を細かに叙述し、委しく批評する前に、先づ彼の人と爲りを僅か許りの材料を土臺にして簡単に記述し度いと思ふ。

漢文くづし流に書き出せば、冒頭には子規諱は常規、通稱を升と呼び、又の名は處之助、子規は其號、別に獺祭書屋主人、竹の里人ともいふ——とでも書くところであらう。生れたのは慶應三年九月十七日で、場所は伊豫の松山である。柳原極堂氏の記すところに據れば、氏の家は『松山市を貫通する中の川の清冽な流れに沿うて、老櫻が籬越しに幹を川に突き出して居る』……『其西隣が君の爲めには祖父に當る儒者大原

觀山翁の邸であつた……』といふ。子規の父は彼が幼少の折腦充血か何かで歿してしまつたので、母と妹と都合三人で其家に生活してゐた。父といふのは果して何麼人であつたか、それを確かめるにも、想像するにも一寸材料が無い。彼の母は極めて善良な、そして温順な性質であつた。之に就いては子規の親友五百木颯亭氏は斯ういうてゐる。『彼れが勇猛な意氣、剛健な氣魄の、母よりして繼承され若くば養育されたものとは覺えぬのである。然り我輩は彼れの如き偉材の如何にして爾かく發育し來りしかに就いて、今尙一の疑問を抱いてゐる。唯彼の祖父大原觀山翁は、我舊松山藩下に於ける儒者として上下の尊敬を受けて居たので、彼れは幼時多くの感化を此の翁から受けたに違ひない。』

彼は兎に角斯うした母の手一つで育てられ、傍ら觀山とかいふ祖父の感化をうけつつ幼年時代を過して來たのであらう。彼の家は侍の家であつたから、母の手丈けで育てられて來たにしても、嚴格な教育をほどこされたに違ひ無い。又白耳義の公使など

をしたことがある拓川加藤恒忠氏は彼の叔父に當つてゐるが、此人は陸羯南氏などと共に文學的才能の豊かな人であるといはれてゐる。それから現に宗教家となつてゐる三並良氏は氏の從弟に當る。又氏より四五歳若いが、藤野古白といふ從弟も亦俳人であつた。(此人は彼よりも早く亡くなつたのである)。兎に角彼の一族には文學其他の精神的方面に關係した人が可也多いのを以つて見れば、彼も文學的方面に發展して行つたのは決して偶然ではないと思はれる。

さて彼が幼年時代は何ういふ性質で、何麼子供であつたか。之れに關して彼の母が談つてゐる處は、最もよく彼の當時の面影を傳へるものである。されば暫く其の談話筆記を茲に少し借りることにする。『赤ん坊の時は、そりや丸い顔でく、よつぽど見苦しい顔で御座いました。鼻が低いく妙な顔で、ようまア此頃(臨終の頃の事)のやうに高くなつたものぢやと思ひます。十八位からやうく人並の顔になつたので、ほんとうに見苦しう御座いました。大人になつてあれ程顔の變つた者もありますまい。



六つ位からもう鬘を結びました……鬘を結うたなり三並(良氏の事)のと二人で小學校(法龍寺内)へ通ひましたが、たつた二人ざりが鬘を結うて居るので大變いやがりました。上下着の時には(五歳の十一月十五日)金巾の紋附をこしらへて、上下は佐伯の久さんのを譲つて貰うて、大小は大原の元のを貰うてさしましたが、何様脊が低いので、大小につるされてるやうぢやと笑はれました。脊が低かつたのは餘程低かつたと見えて、大原の祖父が、朝暗いうちに門に出で居つて、何か知らん小さなものが向うから來ると思ふと、それが升(子規の事)ぢやつたなどと話をよくして居りました。

小さい時分にはよつほどへぼでく弱虫で御座いました。松山で始めてお能が御座ゐました時に、お能の鼓や太鼓の音におぢてくとうく歸りましたら、大原の祖父に武士の家に生れてお能の拍子位におぢると叱られました。近所の子供と喧嘩をするやうな事はちつとも御座いませんで、組の者などにいぢめられても逃げて戻りますので、妹の方が石を投げたりして兄の敵打をするやうで、それはへボで御座います。

小學校へ行く前に、祖父の處へ素讀に参りますが、朝暗いうちに起しますから、中々起きませんので、毎朝々々蜜柑やお菓子を手持して目をさまさせます。さうせんと起きませんのよ。祖父は大變升を可愛がりまして、升はなんぼたんと教へてやつても覺えるけれ、教へてやるのが樂みぢやというて居ました。

物言ひを覺えるのが、よつほど遅うて、三つの時にも、『ハル』といふ下女を呼ぶのに『アブ〜』というて呼んで居りました。物言ひばかりか、手もよつほど鈍で、紙薦もえゝあげず、獨樂もえゝまはしませんでした。何でもすきなものと言ふと、南瓜と西瓜とが出よつたてい。鬚を切つて後も小さい刀をさして居りましたが、餘戸の祭りで田舎へ行きました時、誰かが抜いて見い〜というたけれども抜けませんのを、陰へ廻つて裏の畑へ出て自分でどうやらかうやら抜きましたら、手を切りましてな、それでうちへは歸れないといふので、シク〜泣いて居つたこともありました。

小學校に影浦先生といふのがありましたが、そこへ本を習ひに三並の従弟と一緒に

行きよりでしたが、夜が遅くなると、私等が迎ひに行きよりました。先生の處では本を讀んでもらひますより、話をしてきかして貰ふのが好きで、それで遅くなるので御座いました。大方八犬傳や何ぞの話で御座いませう。又或時丁度米藤(大きな呉服店)の塀の上から下女が顔を出して居たのを晝見たといふので、歸りにそれを恐はがりました。大街道の軍談(講談)を聞きに行きよりましたが……何でも一錢の木戸錢が少、遅く行くと八厘ですむとかいひますので御座いましたが、後にそれがわかつて大變叱られました。

字は山内傳藏さんといふ人の處へ一年も習ひに行きましたが、判紙へ物を書くことが大好きで、昔から半紙はよく使ひました。松山の立花神社といふ天神様へ……大文字というて大きな字を清書してあげると手があがるといふので、持つて行きよりました。升は唐紙や晝箋紙などへ二三人のよせ書きをして大きなくものをこしらへて、松の木の枝などへ吊るのを樂みにして居りました。七夕の短冊なども妹と紙が多いぢ

やの少いぢやのいうて、好きこのんで書きました。』

以上の談話を見ると、子規の幼年時代が、あり／＼と眼に浮ぶやうな氣がするではないか。意志が弱くて不器用で、而も読み書きが好きな子供の面影がはつきり想像することが出来る。斯くて小學校に通學してゐた彼は明治十二年即ち十三歳の時、それを卒業すると共に、直ちに松山中學校に入學した。中學時代には漸く文學趣味が發達して來た。けれども未だ俳句はやらなかつたらしい。主として漢學や漢詩などに凝つてゐた一方、馬琴物や水滸傳、武王軍談、三國志等を頻りに耽讀したといふことを自ら談つてゐる。又當時學生間に演説が非常に流行して、彼も亦其の仲間入りをした。殊に當時は政黨の勃興時代で一般に政治熱が盛んであつたので、彼等の演説もそれらに感化されて政治問題などを露骨に論じたのである。それがともすると縣廳などにきこえるらしく、校長から厳しい訓戒を受けるといふ有様であつた。彼が如何に理智的な性格の人であつたとはいひ乍ら、活氣横溢した少年時代であつたから、自然華やかな

さうした方面に傾いて行つたのは、當然でなければならぬ。

さて此の中學校は卒業しなかつた。即ち明治十六年彼が十七歳の初夏の頃、中途退學して遂ひに笈を負うて東京に遊學したのである。遊學の事に就いて、彼の母は斯う談つてゐる。『中學校に行きよります中に、東京へ出たがつて／＼やかましくいうて居りましたが、加藤の弟(恒忠氏の事)から、西洋へ行く前に來いというて來ましたので飛上つて喜んで、丁度大原の叔父は留守で御座いましたから、佐伯の叔父の處へ飛で往つて……來いといふ手紙の來た翌々日松山を出立しました。單衣物を一枚こしらへるといふので、夜通し縫うた事などを覺えて居ります。』

## 二、東京遊學時代

初めて東京へ出て來た子規は、果して何の方面に向ふつもりであつたらう。何を學び何麼人となり、何を爲さんとしたであらう。それを叙述する前に、先づ東京へ來た

ての彼の面影をしのぶに適當な故陸羯南氏の文章の一節を引いて來て見よう。『友人加藤拓川が或日子の寓居に來て色々話した中に、「此ごろ國元から甥のヤツが突然やつて來たが、まだホンの小僧で何の目當も無く、何にしに來たのかと聞いたら、學問しに來たと云うてる、僕も近々往くのだし（佛蘭西に）、世話も監督も出來るぢや無し、いづれ同郷の人に頼んで往くのぢやが、君の處へも往けと云つて置いたが、來たらよろしく逢つてくれ玉へ」との話もあつた、二三日たつてやつて來たのは十五六の少年が浴衣一枚に木綿の兵兒帶、いかにも田舎から出たての書生ツコであつたが、何處かに無頓着な様子があつて、加藤の叔父が往けと云ひますから來ましたと云つて外に何にも言はぬ。ハア加藤君から話がありました、是から折々遊びにお出なさい、私の宅にも丁度あなた位の書生が居ますからお引合せいたしませうと云つて予の甥を引合はした、やがて段々話すの様子を見ると、言葉のはしくに餘程大人じみた所がある、對手になつて居る者は同じ位の年齢でも、傍から見ると丸で比較にならぬ。』これを讀む

と、彼が東京へ來たての面影の一端を想像することが出來よう。

東京へ來てから、彼は哲學者にならうと考へて居たらしく、それに就いては彼自身も明らかに談つてゐる。上京した明治十六年には赤坂漢學塾に入つたり、共立學校（今の開成中學）に轉じたりした。此の頃は先づ大學豫備門受験準備時代とでもいうてよいであらう。彼は餘り英語が得意でなかつたらしく、高橋是清氏のパーレーの萬國史や坪内雄藏氏のユニオン讀本などは教はりには教はつたけれども、よくわからなかつたといつてゐる。此の共立學校の第二級の時に、場馴れの爲めに試験（大學豫備門の）を受けようと、同級の友に誘はれて、餘り自信が無いらしかつたけれども、やつて見た。それは明治十七年の九月であつた。處が意外にも、まんまと及第したので、何麼に嬉しかつたであらう。流石試験嫌ひな彼も、此時許りは、『試験は屁の如しだと思つた』と言つてゐる。

大學豫備門に入つてからも、英語の力がなか／＼附かなかつたらしく、同級の山田

美妙齋氏などが、試験の答案などを英文ですら／＼と書いて出すのを見て、自らの語學の力との懸隔に驚いたほどである。それから又彼は數學なども至つて不得手であつた。殊に幾何學がわからなかつたと言つてゐる。その爲めに學校を落第したことさへある位である。一體學校の學課は、何方かといふとナ、マ、ケ、ル、方であつた。平常は殆んど手も碌に附けない。『月に一度位、徹夜して勉強するので、毎日の下讀などは殆んどして往かない。それで學校から歸つて毎日何をして居るかといふと友と雜談するか、春水の人情本でも讀んでゐた。……併し月に一度位の徹夜では、迎も學校で毎日やるだけを追つ附いて行くわけに行かぬ。』

此の豫備門時代は彼にとつては、中々意味の深い時代である。それは何故かといふに、彼が兎にも角にも、ほんとうに俳句といふものをやり出したのは此時代だからである。即ち十八年の入學前後の頃から、句作を初めたのだ。『俳句帖抄』上卷の序文を見ると、自分も何とはなしに十七字を連ねて見たのは、明治十八年の事であつたらう



……それでも十句許り書き並べて居つたのを、或人が見て、是非宗匠に見て貰へとい  
うて自分に紹介して呉れたのは其戌といふ宗匠であつたと言つてゐる。

此の其戌といふ俳人は當時八十許りの老爺さんで、伊豫(?)の三津ヶ濱にゐたので  
ある。而して梅室門下の人なさうで。後年の子規に言はせると、月並の月並の大月並  
であつた。けれども當時の子規は、未だ月並も何もわからなかつたのである。何でも  
十九年の夏歸省した時に、柳原極堂氏と打連れて此人を訪問し、袂から十製句の俳句  
の草稿を取り出して、其の選評を請うた。而も其戌宗匠は其時に彼の句を賞讃したと  
いふことである、此頃から彼は熱心に句作に耽るやうになつた。

明治二十年の事である。松山藩主たる久松家では、同郷の學生の爲めに、本郷眞砂  
町十八番地に常盤會寄宿舎といふものを設けて、學生を收容監督することになつた。

これは藤野古白氏の伯父服部喜陳氏(此人は今の服部嘉香氏の父君であらうと想像す  
る)や内藤鳴雪氏なども監督となつたことがあるといふ。正岡子規は此の寄宿舎が創

立されると共に、此處に入つて數年居つたのである。子規が周圍を感化したのか、周圍が子規と期せずして一緒になつたのか、それはよくわからなかつたけれども、兎に角同宿の學生等と共に盛んに俳句を作つた。此の中には五百木飄亭、竹村黃塔（此人は碧梧桐氏の兄君である）、などの諸氏もゐた。併し乍ら子規は俳句許り作つたのかといふに、さうではない。非風、飄亭などと共に、紅葉會といふものを組織して、俳句の外に、戲文、漢詩、都々逸なども作つたりしたといふことだ。而して毎月『言志集』といふ冊子を出して、一年許り續けた。

此の頃から、彼の健康は少し宛悪くなつて來た。素とく身體が虚弱で、或はコレラにかゝつたり、胃腸病を煩つたりしたことがあつた。だから極堂氏の記すところによると、彼はいつもフランネルのシャツを衣服の下に重ねて着て、炎天の時でも脱がなかつたといふ。二十二年の三月末に腦病にかゝつて、房總地方から水戸にかけて行脚した。次いで同年五月には遂ひに肺病のために咯血したのである。これが彼が肺病

に犯されたそも／＼の初めであつた。腦病も全然快復したのではない。試験などが來るとますます／＼腦を痛めるやうになつた。

此の頃の出來事として一寸記して置き度いことは、彼が雅號の事である。是れ迄は盜化、盜花、花盜人、莞爾生、沐猴冠者、虛無子、放浪子、馬骨生、痴夢情史、蕪翠、丈鬼、うかれだるま、うすむらさき、浮世夢之助、花風病主人、浮世女之助、西子等いろ／＼の多くの雅號や別號や戲名を用ひたが、此の頃から子規と改めたのである。

これに就いては彼の親友大谷是空氏は斯ういうてゐる、『其時號の話が出て、僕は肺病で血を吐くから、常規を改めて常血ツカノミとせうかといふから、寧ろ都子規ツネノミとしては如何と  
いうて笑つた事がある。兎に角其前後から用ゐたやうに覺えてゐる。』

さて明治二十三年、彼が二十四歳の時、高等中學校（此時は大學豫備門が斯う改稱されてゐた）を卒業するや、九月東京文科大学の國文科に入學した。大學に入つてからも、俳句は盛んにやつたけれども、一方に於いて野球などといふ運動も盛んにやり

出すやうになつた。常盤會寄宿舎にベースボール會を拵へて、その幹事にもなつたことがある。然しこれは一時は熱心であつても、果して永續きしたか何うかは不明である。恐らくは健康や其他の事情で數年ならずして止めたらうと想像する。大學時代になつてから、新聞記者時代にかけて、肺病の方はさう急に勢が進んで行く様子はなく小康を保つてゐたらしかつた。けれども腦の方は時々依然としてやられるらしかつた。『墨汁一滴』を見ると彼は斯う書いてゐる。『明治二十四年の春、哲學の試験があるので此時も非常に腦を痛めた。ブツセ先生の哲學總論であつたが、余には其哲學が少しも分らない。一例をいふとサブスタンスのレアリテイは有るか無いかといふことがいきなり書いてある。レアリテイが何の事だか分らぬに有るか無いか分る筈がない。哲學といふものは此處に分らぬ者なら、余は哲學なんかやり度く無いと思つた。』

此の哲學の試験を準備する爲めに、彼は哲學のノートと手帳一冊とを携へたまゝ、飄然と下宿を出て、向島は木母寺の境内の或る茶店の二階を二三日借りて勉強するこ

とにした。けれども哲學などはちつとも勉強しない、否しても『何だか霧がかゝつてたやうで十分に分らぬ。』すると『頭がポーツとしてしまふから、直に一本の鉛筆と一冊の手帳とを持つて散歩に出る。外へ出ると春の末のうらゝかな天氣で、櫻は八重も散つてしまふて、野道にはげん／＼が盛りである。何か俳句にはなるまいかと思ひながら、畦道などをぶらり／＼と歩いて居る——』といった工合である。折角試験の勉強に向島へやつて來たのが、俳句を作るに來たことになつてしまつたのである。

其應工合で此年の試験は全部受けないで歸國してしまつた。九月の追試験を受けるつもりである。やがて九月に上京すると、早速靜かな處で受験の準備をしようと、大宮の公園は萬松樓といふ宿屋に泊つた。併し此處でも向島と同じやうに、勉強どころか、周囲の松林や野逕などが馬鹿に氣に入つたので、散歩したり、俳句を考へたり許りして暮したのである。餘り愉快なものだから、おまけに手紙で、竹村黃塔氏や夏目漱石氏などいふ俳友を呼び寄せて遊び暮した、けれども兎に角此の年は全部残りの試

驗を受けて、及第することが出来た。

右のやうな次第で、學校の事などは遂ひにそつちのけにして、俳句を研究したり、作つたりする事許りやつてゐるといふ有様であつた。彼が後年大いに得るところあつた俳句分類に志したのも此時である。又郷里から黄塔氏の弟、碧梧桐氏が上京したのも此時である。

翌二十五年に入つてからは、益々さうした傾向が發展して來た。五月には、陸羯南氏に勧められて、その經營するところの『日本新聞』に『かけはしの記』といふ俳句入りの紀行文を寄稿したのであるが、これが彼の文壇に足を踏み出した第一歩であつた。六月には『獺祭書屋俳話』と題して、新しき俳論を『日本新聞』に掲載し初めた。漸く油がのりかけて來たと見えて、それに次いで續々と俳文や俳論を該新聞に發表した。『俳諧といふ名稱』『連歌の俳諧』等が其の主なるものであつた。彼が俳句といふものゝ眞諦を知り、秘鍵を握つたのは、實に此頃である。俳壇革新の第一聲は茲に目覺ましく

あげられたのである。これ迄は梅屋門出身の其成流の俳句所謂月並調の俳句を作つて得々としてゐたのであつたけれども、此頃の子規はもう昔の子規ではない。全く新しい藝術的自覺の上に起つた子規である。

さて學校は何うなつたか、もう彼には眼中學校も學課もない。彼は『これ程俳魔に魅入られたら最う助かりやうは無い』といつてゐる程で、殆んど學業は放棄したと同じである。二十五年の學年試験には、兎に角受験したものの、果して落第してしまつたのである。彼は是れを機會に遂ひに大學を退いてしまつた。『これが試験のしどまひの落第のしどまひだ』と彼は言つてゐる。退學するに就いては、いろ／＼な人々から忠告やら反對やらをうけたけれども、彼は頑として耳を藉さなかつた。斯くて彼の永き學生生活は茲に終りを告げた。而して新しき決心を以つて新しき方向に猛然突進すべく起つたのである。墮落せる俳壇を救濟するの使命を自覺して起つたのである。

九月上京し、十月には大磯に保養して大いに銳氣を貯へ、十一月いよく先づ『日

本新聞社』に入社した。陸氏は彼に活動舞臺を提供して十分に其の欲する手腕を發揮させようとしたのである。彼が俳壇の革新者としての活動は此時から漸く初められたと云つてよす。

### 三、新聞記者時代

此の新聞記者時代といふのは、明治二十五年十一月、即ち氏が二十六歳の『日本新聞』に入社した時から、日清戦争に従軍記者として出掛け、病を得て歸つて來た二十八年の秋頃迄を指すのである。此時代は半ば俳人として、半ば新聞記者として活動した時代である。併し俳壇の革新は此時代に於いて初められたのであるから、彼の生涯にとつては實に見遁がすべからざる時期と言はなければならぬ。

十一月に『日本新聞』に入るや、新聞は『俳句欄』を設けて、特に彼の活動を歓迎したのである。従つて彼は新聞記者とは言ひ乍ら、専ら俳句欄を擔任して俳壇の革新を口



標として働いた。彼の『歳晚閑話』といふ俳話を書いたのは十二月、此の外『舊都の秋光』とか『高尾紀行』とかいふ紀行文を書いたのも、矢張り同じ月である。

明けて明治二十六年には、俳話『歳旦閑話』を書き、『俳人の奇行』、『古人調十二體』、『春光秋色』、『菊の園生』等を發表した。又『文界八ツ當り』といふ俳句は勿論の事、和歌、小説、新體詩、院本、新聞雜誌、學校、文章等文壇及びそれに關係ある有ゆる方面に向つて痛烈なる批評を浴びせかけた文章を掲げたのも此の年の三月であつた。それから彼の有名な『芭蕉雜談』を書いたのも此の年の十一月の事である。これは芭蕉の句でさへあれば、何麼句でも神聖なよいものであつて、一指をだも觸るゝことが出來ないもの、批評することさへ勿體ないものと尊崇した舊派の月並宗匠等の迷信迷妄を打破し、芭蕉にはいゝ句もある代り悪い句もあり、玉石混交して居るとて、眞の芭蕉の特長を顯揚したところの論文である。これが當時何の位ゝ月並俳人を驚かしたかわからない。されば新俳壇の展開といふ點から見ても、彼自身の事業から云つても、恰度小

説界に於ける『小説神髓』の如く、此の一文は決して見遁がすべからざるものとされてゐる。

彼は又自ら盛んに句作すると共に、全國から群り集る俳句を選んで常に新聞に掲げてゐた。それから當時の矢筈しかつた政治問題や社會の現象を諷刺した俳句をよく作つて發表した。これは果して彼の眞意から出たものか、或は新聞記者としての彼に對する社の注文に依つたものか、其邊はよくわからない。けれども兎に角此の方面に於いても、中々活動した。例へば議會の紛擾を諷しては、

子をなぶり子になぶられて冬籠り

と罵り、政治論に依つて新聞の發行停止を喰ふと、

君が代も二百十日は荒れにけり

と皮肉つた。議會が解散せられやうとすると、

切り捨てゝ心しづめん糸柳

といひ、議會に於いて政府委員が、軍艦を佛國へ注文しないことを言明したに對しては、

此度は頬に縫はせじ角頭巾

と諷したりした。此の時事問題を諷刺した俳句は、一本調子の如く見せる彼の性格や創作力に對する見方を打破するものとして、中々深い意味を持つたものと言はなければならぬ。

又一方に於いては、古白、五州、鳴雪、飄亭、明庵、桃雨等諸氏と共に、盛んに俳句會を開いては俳句を研究したり、新しい句を作つたりした。推之友諸氏と『俳諧』を發行したのも此年であつた。

二十六年の暮から二十七年の初頭にかけて、政治問題が頻りに騒がしく、政府と議會との紛擾が盛んにゴタ附いてゐた。條約勵行とか自主的外交責任内閣とかいふ言葉は、議會や新聞に熱烈な力を帯びて叫ばれる。政府では死物狂ひになつて議會の解散

を續けたり、新聞の發行を停止して言論を壓迫したりするといふ有様であつた。當時は『日本新聞』も民黨として議會や諸新聞と共に、然うした旗幟を押し立て、政府に反抗したのである。従つて政府の睨むところとなり、一度ならず二度ならず、停止又停止といふ憂き目を見た。然うした非立憲的なやり口に依つて言論が壓迫されてしまふものではない。停止を喰へば喰ふ程益々反抗するのは自然の勢である。併し何といつても新聞は經濟的拘束を受けた事業である。さう幾度も停止されると自然讀者は減らし、經濟的基礎に危険を及ぼさないではゐない。それを何うかして救済する方法を講じなければならぬ。其れには平素から別に一新聞を起しておいて、甲の新聞が停止せられると同時に、その乙の新聞を讀者に配附すればよい。第一讀者に不便を感ぜしめない許りでなく、新聞維持の上に於ても方法が立つ——と斯う日本新聞社の社員等が考へて、別に新しく『小日本』といふ家庭的な上品な新聞を拵へようと決議したのである。

處がいざ發刊するとなると、社員中に適當な人物がないので、とう／＼そのお鉢が子規に廻つて來た。子規だつて必ずしも適材であるといふわけではないが、兎に角やらして見たら何うだらうといふことになつた。つまり編輯主任である。子規も快諾して、いよ／＼其の新聞が二月から發刊された。彼はもう單なる俳句欄の擔當記者でなくて、純粹の新聞記者になつたのである。材料の取捨から原稿の檢閲、扱ては繪畫の註文や募集俳句の選や、艷種の雜報まで自ら筆を把つて朝から夕まで孜々として倦まざる活動を續けた。古島一念氏は子規の編輯にかゝるその新聞を『誠に小ぢんまりとした、だれ氣味のない、さうして品のよいものであつた』といつてゐる。之れを以つて見ても、彼は新聞編輯の才に於いても相當の手腕を持つてゐたことが想像される。未だ下宿屋にゴロ／＼して世に出ないでゐた中村不折氏を拾ひ出して入社させたり、俳句仲間の飄亭や李坪、露月等の諸氏を俄か仕立ての新聞記者にしたりしたのも恰度此の當時の事である。併し彼は此處に忙しい軀になつてからも、『俳句一口話』（俳話）

を書いたり、小説『一日物語』を作つたりして新聞に發表した其の努力と勉強とは、實に驚くべきものがあるといつてよからう。

一方政府對議會の問題は益々火の手が盛んになつて、日本新聞の發行停止も度重なり、遂ひにその代用新聞たる『小日本』が『日本新聞』の代りになつて、盛んに政府反抗の氣勢を揚げた。ところが此の『小日本』も亦發行停止を喰ふに至つたのである。それが一度ならず二度ならず、三度迄もやられたのだから溜らない。遂ひに財政上の大打撃の爲めに同年の七月、即ち僅か六ヶ月の壽命をもつて廢刊せざるを得なくなつた。『小日本』が廢刊され、社が解散されると、子規も露月氏や飄亭氏など、共に日本新聞社に入社した。否復社した。『文界漫言』や『上野紀行』や『そごろあるき』や或は『宇餘り和歌俳句』『地圖的觀念と繪畫的觀念』『王子紀行』などを書いたのは、恰度『日本新聞』に復歸した早々の頃であつた。

恰度其頃から慘澹たる風雲は、鷄林八道の天地を蔽うて、遂ひに豊島沖の一海戦が

日清戦争の序幕となつてしまつた。初めての外國との戦争であるから、國民は悉く興奮し緊張し切つてゐる。新聞社でも戦争の報告で全紙面が一杯になり、社員はわれもわれも従軍記者となつて戦地に赴くといふ有様であつた。處が何うした心持ちからか彼も亦従軍記者になり度いと言ひ出した。戦争とは縁のない俳人が、而も肺病を持つた軀でありながら、従軍記者になるなどといふことは、鳥渡受取り難い。是れには流石の同僚達も聊か吃驚せざるを得なかつた。殊に其の病軀では野に臥し山に寝なければならぬ従軍記者となるのは思ひも寄らぬこと、まるで死に行くやうなものだ、などと仲間から頻りに中止の忠告や反對を受けた。けれども一度思ひ立つてしまふと彼は頭として志を翻さうとはしなかつた。それで仕方なしに社でも彼を特派員として従軍させることにした。併し後から考へて見ると、これが彼の壽命を縮めた最大誘因であつたのである。

斯くていろ／＼の準備を整へて、いよいよ東京から先づ大本營のある廣島に向つた

のは同年の三月三日であつた。それから鳥渡郷里松山に立寄り、廣島に歸つて第二軍に従ひ、宇品から出帆したのは四月十日であつた。下士兵卒神官僧侶など、ゴツタ交ぜに同じ部屋にすし詰めに打ち込まれて身動きもならず、其の食物といひ、寢具といひ、兼ねて覺悟をして來たとはいひ乍ら、一寸其の待遇のひどいのに驚かざるを得なかつた。殊に下士などの人を人とも思はぬ威張り方に少からず憤慨した。それでも辛抱し乍ら、兎に角柳樹屯に上陸したのは四月の十五日、十九日には旅順に到着したのである。それから都合上、再び近衛師團の向つた金州地方に引返した。

彼は従軍記者として此當時、『羽枝一枝』『陣中日記』等を書いた。けれども此の従軍は彼にとつて愉快なものではなかつた。最も不快を感じたのは前にも言つた通り、軍隊の新聞記者に對する待遇である。石牀に寝ね、土間に臥し、高粱に坐すことは、必ずしもいとふところではないけれども、曹長位の奴等に怒鳴り散らされて、小さくなつてゐなければならぬのは、彼の最も不満を感じる處であつた。少くとも新聞記者



は其の使命からいつて將校と同等の待遇を與へるべきが相當である。それを上官に訴へても一向取り合つて呉れない。上官は寧ろ新聞記者を一兵卒同様だと迄放言した。もう彼は溜らなくなつた。即日歸國しようと決心した。けれども乗船の都合や其他の事情で歸國が後れてぐづくしてゐた。

其内にやがて講和が成立したので、同僚七八人と共に大連灣に出で、佐渡國丸といふに乗つて歸國の途に就いた。それが五月の十四日である。十七日には兼て危ぶまれたことが現實した。それは何であるか、といふに彼が俄に咯血したことである。今迄は肺病を持つてゐるといふ丈で、さう大した軀の不自由を感ずることもなかつたのであるが、此の時を劃して彼はすつかり所謂病人になつてしまひ、再び起つ能はざる身とはなつたのである。

## 四、病床時代

佐渡國丸船上で咯血してからは、すっかり病人となつて三十五年九月遂ひに此世を辭する迄を、假りに病床時代と呼んで置く。此の時代は彼が一生涯の中、最も藝術的に活動した時代である。俳壇は勿論の事、歌壇、新體詩壇、寫生文壇等の多方面に於いて、彼の才能が發揮せられた。彼のほんとうの事業から云つても、彼の功績からいつても、此時代は最もその眞面目を發揮した時代である。

さて船中で咯血した彼は、五月二十三日船が和田岬に着くや、直ちに上陸して、神戸病院に入院した。此の報を聞いて、京都からは虚子氏が来る、東京からは碧梧桐氏が子規の母を伴れて来る、松山からは叔父がやつて來るといふ騒ぎであつた。兎角するうちに病氣も稍輕快になつたので、七月二十二日に其の病院を退いて、須磨保養院に入り、其處でゆつくり療養することになつた。漸く筆も執ることが出来るやうにな

つたので、其處で『養痾雜記』といふ隨筆を書いて、『日本』紙上に掲げた。

斯くて八月には郷里松山に歸省したのであるが、當時子規の家は東京に移轉してしまつたあとなので、夏目漱石氏の家に寄寓した。茲には約二ヶ月許り滞在してゐたが當時は別に責任を帯びた仕事といふものはないので、唯病氣を保養する丈けであつたから、其の傍ら、今迄放棄して置いた俳句の研究及び創作を又やり出した。當地の青年俳人を集めて松風會といふ俳句の團體を作り、共に俳句を作り、或は彼等に句論を講じた。柳原極堂氏は『君は常に六疊の間に蒲團の上に臥したり起きたりして居たが吾々同人は絶えず二三名又は五六名其の枕邊を取巻いて懇切なる君の指導を受け、ものゝ一ヶ月餘もこんな鹽梅につゞきて同人の俳境に著しく進歩したことを信ずる』といつてゐる。此同人の中には前記極堂氏の外に漱石、梅屋、叟柳、愛松、三鼠等の諸氏もあつた。彼は之等の同人を『學問をせよ讀書をせよ學問なしに到底よい俳句の出來やう筈のもので無い』『學問はなんの學問でもよし』などといつて、頻りに鞭撻する

ところがあつた。十月の『日本』紙上に載せた『俳諧大要』（これは後に一冊になつて出版せられた）は、實に當時の講話を編輯したものであつたのだ。

やがて彼は十月十九日に松山を出發し、奈良を経て歸京した。途中『脊椎結核性脊髓腐蝕症カリエス』といふむづかしい名の病氣が併發したが、これが後に全く病床の人たらしめた副因であつたといつてよからう。歸京して根岸の家に入つてからは、全く歩行の自由がきかなくなつてしまつたのである。それでも筆を執ることは止めない。十二月に入つて『棒三昧』と題する文藝上の多方面に亘る感想やら批評やらを書いた。

越えて二十九年には先づ一月に『俳句二十四體』を作り、三月には『三十棒』と題する文藝雜評を書いて文壇に當り散らしたのである。又從軍當時に於ける、軍隊の從軍記者を冷遇することの甚しきを憤つた『從軍記事』を一月の『日本』紙上に書いた。それから『戯曲と四季』『俳句問答』等を發表したのも此年の春頃の事である。『俳句問答』は初め『日本』紙上に連載されたものであるが、後に一冊になつて出版されたのである。

彼の俳句論としては、前の『俳諧大要』などと共に、見逃がすべからざるものである。それから彼の隨筆ものとして有名な『松蘿玉液』は、實に四月から十二月に亘つて『日本紙上』に連載されたものである。

東京へ歸つてから、彼の周圍には又新しき俳人が集つて來て、毎月の如く俳句會が子規庵に催されるやうになつた。社會を興奮せしめた戰爭も終りを告げ、子規も俳壇の爲めに活動をし出したので、漸く俳句が盛大となり、各地に俳句會の起るもの多く全國の諸新聞雜誌は争つて新しき俳句を載せるといふ有様にはなつたのである。それから彼が漸く和歌を研究し出したのも、此年の夏頃のことであつた。

此の年迄は、病の怠つてゐた場合には、辛うじて散歩も出來たので、赤羽とか、上野とか、目黒とかに遊んだのであるが、翌三十年に入つてからは、腰の患部が痛み出して、腐つた骨から膿は間斷なく流れ出るし、脊髓神經はひどく痛み出すといふ工合で、迎もく自由起居することが出來ないやうになつてしまつた。それが餘りひど

くなつたので、四月に手術して貰つたが、化膿益々はげしく、更に衰弱さへ加はる事夥しかつた爲めに、同月末頃には危篤の状態に迄なつた。けれどもいゝ工合に一命をとり止めて、漸く六月頃にそれが快復して來たのである。けれども脊髄の腐蝕は全く全快したのではない。腰部より臀部にかけて七箇の瘻口生じ、膿汁が出て、劇痛が甚しかつた。

此年は彼の有名な『俳人蕪村』が世に出た。蕪村は人も知る如く子規の最も崇拜した俳人であつて、蕪村を傳し、蕪村を祖述することは子規の事業に最も大なる意義を附與するものである。これは五月から十一月に亘つて『日本』紙上に連載されたのであるが、後一冊となつて出版された。従つて蕪村熱が俳壇に流行して、日本派以外の俳人に迄それが及んだ程である。大野洒竹氏が『與謝蕪村』を著し、雪人氏が『校註蕪村全集』を編刻したのも此頃のことである。子規は此の外『俳諧反古籠』『俳句と漢詩』『吉野拾遺の俳句』『試問』等の俳句に關するものを書いた。又『二十九年の俳句界』を書い

て當時の俳壇を忌憚なく批評し、兼ねて俳句に對する主張を述べたのは、當時の若き俳人を何の位益したかわからない。

それから此年の子規の活動の中で注目し價するものは、彼が新體詩や小説に迄指を染めた事である。自ら新體詩を作つたり、『新體詩押韻の事』といふ詩論を書いて表題の如く新體詩に押韻すべきことを論じたりした。或は又『新小説』に『花枕』といふ小説も書いて發表した。『月見草』といふ小説を書いたのも此頃の事であらう。十一月には子規庵に飄亭、碧梧桐、虛子等の諸氏と共に、小説會を開いたこともある。

又此年に注目すべきことは、伊豫の松山に『ほととぎす』といふ俳句雑誌が生れたことである。これは直接子規が關係したのではないけれども、後此雑誌が東京に移されて、専ら子規派の中央に於ける機關雑誌となつたのであることは、人の知る通りである。此の雑誌が子規の事業にとつて後年何の位ゝ重大な役目を受持つたか知れない。

翌三十一年には、『三十年の俳句』を書いて前年の俳壇の進歩せることを認めた。此

頃は俳句革新の事業はもう殆んど八九分通り出来たといつてよい。それでも松山の『ほととぎす』が、九月に新しく東京に移されてからは、それを機關として『古池の句の辨』『蕪村と几童』『俳諧かるた』等を書いた。彼の鳴雪、碧梧桐、虚子等の諸氏と共に寄り合つて、蕪村句集の論講を初めたのも、此年の一月の事であつた。これは數年に亘つて繼續せられ、後に『蕪村句集講義』として出版された。

右の外此年に注目すべきは、彼が和歌の開拓に切り込んで行つたことである。彼は當時の舊派和歌も新派和歌も共に飽足らずとして排斥し、自ら『百中十首』などと題して、和歌を作り、『日本』紙上に掲げたのである。一方に於いて『萬葉集』を推奨し、降つては實朝、田安宗武、井手曙寛等の隠れたる歌人を紹介して其の價値を世に示めた。彼の歌論は『歌よみに與ふる書』(これは十篇に分れて、「十たび歌よみに與ふる書」迄になつてゐる)『人々に答ふ』(これは其ノ十三迄になつてゐる)『五七、五七七』等の中に述べられてある。これらは竹の里人といふ名をもつて、『日本』紙上に主として掲載



せられたものである。

それから例の寫生文なるものが彼によつてポツ／＼書かれたことも此年の見逃がすべからざることである。『小園の記』が『ホトトギス』に發表されたのは此年の十一月の事である。

翌三十二年には彼の精力は益々發揮されて、俳壇の活動は從來の通りに、更に和歌や寫生文の方面の活動がいよ／＼盛になつた。三月十四日に開かれた子規庵の短歌會は、彼の根岸派の短歌の中心勢力であつた根岸短歌會の始りである。『萬葉集を讀む』『曙覽の歌』『歌話』等の歌論を見れば、彼が如何に歌壇の開拓に猛進したかゝわかるであらう。『日本新聞』では新しく和歌を募集して、自ら選し初めたのも此の年の末頃の事である。

又寫生文の方面では『燈』『蝶』『旅』『飯待つ間』『柚味噌會』『熊手と提灯』『病』等幾多の作を書いた。これらは何れも極めて短いものであるが、寫生文の初期のものとして、

重大な意義をもつたものである。

俳論の方面に於いても、新しき後進の爲めに『俳句新派の傾向』『俳句の初歩』『炭太祇』『隨問隨答』『俳句評釋を讀む』『俳諧三佳書序』等幾多の評論やら解説やら感想やらを書いたのである。まるで床の中の病人とは思はれぬ程の努力である。

三十三年に入つてから、一般の募集歌の選に益々努力した。而して同志を集めて病床に歌會を催したりして、新しき獨創的な短歌を擴むることを怠らなかつた。一月の『日本』紙上に發表した『短歌愚考』は一つ／＼歌の實例をとりて、添削的に批評したものである。

それから此年に忘れてはならないのは彼が一月に『叙事文論』を書いたことである。これは今迄俳句でやつて來た寫生といふことを文章に試みて、小品文めいたものをちよい／＼書いて來たのであるが、それを自覺的に一の文章論としたものである。即ち寫生文に組織的な基礎を與へんと試みたもので寫生文の歴史から考へて決して輕視す

ることの出来ないものである。一方創作の方では『新年雜記』『ラムプの影』などの寫生文を書いた。

彼が佐渡國丸船上に咯血してから以來六年其間に彼の病勢は決して怠つてゐたわけではない。いろ／＼な副病が併發して、危篤を傳へられた事二回に迄及んだほどである。けれども彼の意氣は決して挫けないで益々文壇に大なる活動を續けて來たのだ。

又彼の病狀から言つても、未だ彼の執筆を甚しくさまたげるほどではなかつた。實際はさまたげる程であつて、唯彼の意志は病氣を壓迫したのであつたかも知れない。併し三十四年頃になつてからは、彼の病勢はもう容易でないほど進行して來た。腰や横腹から膿が出たり痛み出したりすることは、依然として止まない許りでなく、耳をすましてきくと右の肺の内で、ブツ／＼／＼といふ音が絶えず聞える。これに就いて彼は自ら斯う記してゐる。『小生の病氣は單に病氣が不治の病なるのみならず、病氣の時期が既に末期に屬し最早如何なる名法も如何なる妙藥も施すの餘地無之神様の御力も

或は難及かと存居候。小生の今日の容態は非常に複雑にして小生自身すら往々誤解致居次第故、迎も傍人には説明難致候へども先づ病氣の種類が三種か四種か有之、發熱は毎日、立つ事も坐る事も出来ぬは勿論、此頃では頭を出し擡ぐる事も困難に相成、又疼痛のため寢返り自由ならず、蒲團の上に釘附にせられたる有様に有之候。疼痛烈しき時は右に向きても痛く左に向きても痛く仰向になりても痛く、丸で阿鼻叫喚の地獄も斯くやと思はるゝ許の事に候。』寢返りをする時には他人の手をかりてするけれども看病人が側に居ない時の爲めにとて、寢床の側の疊に、麻もて箆笥の環の如き者を二つ三つところ／＼にこしらへて貰つて、それにつかまつて寢返へりしてゐた。けれども次第にそれも不用になる程、身體の動作が不自由になつたのである。更に又彼はその苦みを訴へてゐる。『病床に寢て、身動きの出来る間は、敢て病氣を辛しとも思はず平氣で寢轉んで居つたが、此頃のやうに身動きが出来なくなつては、精神の煩悶を起して、殆んど毎日氣違のやうな苦しみをする。此苦しみを受けまいと思つて、色々に

工夫して、或は動かぬ體を無理に動かして見る。愈々煩悶する。頭がムシヤ／＼となる。もはやたまらるので、こらへにこらへた袋の緒は切れて、遂ひに破裂する。もうかうなると駄目である。絶叫、號泣、益々絶叫する、益々號泣する、その痛何とも形容することは出来ない。寧ろ眞の狂人となつて仕舞へば樂であらうけれども、それも出来ぬ……寝起程苦しい時はないのである。誰かこの苦を助けて呉れるものはあるまいか、誰か、誰か苦を助けて呉れるものはあるまいか』と。誰か之を讀んで、同情の涙を注がぬものがあらうか。

一、人間一匹

右返上申候、但時々幽靈となつて出られ得るやう以特別御取許可被下候也

明治三十四年 月 日

何 が し

地水火風御中

これが當時彼が戯れに書いた而も悲痛な文字である。

併し彼の意志は何處迄つよいかわからぬ、彼の努力は何處迄弾力に富んでゐるかわからぬ、それにも拘らず彼は三十四年から五年にかけて、『初夢』『死後』『くだもの』『九月十四日の朝』などといふ寫生文やら小品文やらを書いた。又『病牀俳話』『獺祭書屋俳句帖抄上巻』を出版するに就いて思ひ附きたる所を云ふ』等の俳句論や俳話やらを書き、或は『仰臥漫録』『墨汁一滴』『病牀六尺』などといふ日記めいた感想録を毎日筆の執れる限り書いたのである。前に述べたやうな病人が、よくも斯うした勢力が出たものと人皆が驚嘆するところである。

併し彼が如何に意志堅く、氣強く、生活力が旺盛であるとは云へ、斯麼に迄病氣がひどくなつては、永く堪へ得るものでない。寧ろこれ迄に生きて來たのが奇蹟といはなければならぬ。果然三十五年は九月の十八日といふに、彼の病狀が俄かに革まり翌十九日の午前一時といふに、母と妹と、それから二三の門人知己とにまもられて、眠るが如く此の世を去つた。十八日の午前十一時頃、彼ももう駄目だと思つたのか、

碧梧桐と妹に墨を搦らせて、

糸瓜咲いて痰のつまりし佛かな

痰一斗糸瓜の水も間にあはず

をととひのへちまの水のとらざりき

の三句を辭世として畫板に貼附けた唐紙に自ら書いた。

斯くて俳壇の革新者たる我が正岡子規は、三十六歳を一期として、永遠に此世を辭したのである。

## 第四章 子規と其の周圍

如何なる運動でも、廣い社會に何等かの影響を與へ、或は波瀾を捲起す場合には、それが唯一人の力で爲されるのではなくて、其處に幾人かの助成者か共動者が見出されるのが普通である。それが或時には主導者があつて其の周圍にその助成者が集つてゐる場合もあれば、別に特に目立つた主導者といふものがなくて、何れも相當の力と熱情とを持つて共助的に運動の促進に努める場合もある。けれども要するに唯一人でないことは確かである。子規の場合は何うであつたか、といふに前者の場合に屬する。即ち彼が主導者の地位に居り、其の周圍に彼の運動乃至事業を助成する多くの人が集つて、彼を援助したのである。されば彼の事業を知らんとすれば、彼と彼の周圍の助成者との關係をも知らなければならぬ。

彼の親友であつた大谷是空氏は彼に關して斯う書いてゐる。『書生時代の子規君の親



友といふものは餘り澤山はなかつた。常磐會の人々とベースボール仲間の人々は別として、毎日の如く必ず會合して文學の事などを話し合うたのは現に農商務省の鑛山監督署技師細井岩吉君と僕との三人であつた。『常盤會の人々とは、主に五百木飄亭氏とか竹村黄塔氏などを指すのであらう。兎に角彼は書生時代は勿論の事、新聞記者時代でも病床時代でも、眞の親友といふものは、餘り多く持つて居なかつたらしい事は想像される。けれども其の半面に於いて、一度親友となつた以上は、實に兄弟も啻ならざる程の友情を傾けたのである。これは勿論彼の門下に對しても同じことである。

それから彼がその周圍に對する離合も注意すべき價值がある。彼が次第に俳句に興味を持ち、更にその改革に志さすやうになつてからは、彼は驚く可き熱心と彈力ある意志とを以つて、其の周圍の爲に俳句を研究し、且つ創作せんことを勧告して怠らなかつた。而して其處に俳句の空氣を作らんと努めたのである。時には強請的態度に出でたりしたこともあつたらしく、『君が感冒で床に臥しでもすると直ぐ自分がお伽役

で、其の節は多く發句の話が出で、又自分にも是非一句やるやうに勧められるので、餘り進みはせぬが、附合にやつても見た。或る時は近處に下宿してゐた同郷の山内傳吾（現陸軍大尉山内正至氏——これは三十五年の事）を呼んで来てお伽役の分擔を命じたこともある、傳吾甚だ迷惑さうに雁金の題にて火事の夜を雁金が飛んで腹が紅いと云ふ十七字をうなり、僕には發句をこらへてお呉れと平に斷つたのも愛嬌であつた』と柳原極堂氏は明治十八九年の頃のことを書いてゐる。處が此の柳原氏は後にはすつかり新派俳人となつてしまつて、而も相當な手腕を示してゐる位である。

其後彼は常に俳句に依つて友を得、俳句に依つて友と離れた。即ち俳句に熱心なる友を友とし、俳句に熱心でない友に遠ざかつた。——勿論中村不折氏の如く二三の例外はあつたけれども——。これを見ても彼が如何に彼の趣味から來てゐるとは云へ、其の事業に對して熱心であつたかと思ひやられる。

是れから少し具體的に彼の周圍に如何なる人々が集つてゐたかを述べて見よう。彼

が俳句革新の事業に参加して、其の熱心の度に於いても創作的手腕に於いても最も彼の信頼を購ひ、彼の兩腕の如く活動したは、河東碧梧桐及び高濱虚子の二氏であることは何人も是認するところであらう。今日に於いては同じ日本派の系統に屬する俳人中に、二氏の外に更に新進の俳人が現れて相當に俳壇に勢力を持つてゐるであらうが子規在世當時から歿後七八年間といふものは、日本派の俳壇は全く二氏——子規を除いては——の支配に歸してゐたと云つても差支へないであらう。

碧梧桐氏は子規と同郷松山の人で、明治六年生れといふから子規よりは七歳許り若いわけである。氏は前にも言つた通り、俳人にして子規の親友たりし竹村黄塔氏の弟である。矢張り松山中學の出身で、京都及び仙臺等の高等中學校に學び、それ以後は學校生活を止めて専ら俳壇の人となつた。

氏が俳句を初めたのは明治二十四年頃のことであるといふから、十七八歳の頃であらう。氏は中學時代から二三度東京へ來て、子規に接し、その感化をうけた。又子規

が學校の休暇に歸省した時には、勿論のことである。此の少年俳人が、

もう出でよ出でよと思ふ小鴨かな

手負猪萩に息つく野分かな

などの句を作つて、子規をして『彼は少年を以て一躍して文學の海中に入りたしかに手中に一個の寶珠を握りたるが如し』と驚嘆せしめたほどである。それから益々子規の指導の下に進歩して、『思想に於いて奇抜なる、句法に於て老成』するやうになつて來た。されば初めは虛子氏よりも碧梧桐氏の方を、子規は囑目した位である。けれども二十七年頃から漸く彼の才が澁滞して、それが二十九年頃迄續いた。二十九年から更に新しく彼は活動し初め、極めて印象的な特色を擲んで起つた。子規は此の『印象明瞭』といふのを彼の特色として大いに推奨したのである。

彼は斯うした創作的才能を發揮すると共に、一方に於いては新聞雜誌に日本派の俳句の普及に努力し、子規が従軍した二十九年の留守には、子規に代つて『日本新聞』の

募集句を選んだりした。子規が病氣にかゝつてからは、虚子と共に最も看病に努め、臨終の時には、辭世の句の筆に墨をひたしてやつた程である。

碧梧桐氏と共に子規門の双璧と稱せられた高濱虚子氏は、同じく松山出身であるが碧梧桐氏より一年後れて明治七年に生れ、子規を知るにも、俳句を作るにも而して又創作的才能の發達に於ても彼よりは稍々後れたといはれてゐる。けれども其の學校教育にあつては殆んど兩氏は同じ道を歩んで同じ處で退いてゐる。而して仙臺の高等中學を止める動機も共に俳壇に起たうといふ同じ希望のもとに生れたのである。

虚子氏は碧梧桐氏が印象的、寫實的の句風を特色とするに反し、理想的、主觀的、乃至は神祕的の句風を其の特色としてゐた。又碧梧桐氏が初めは驚く可き才能を發揮して後に一時沈滞したに反し、虚子氏は初めは拙劣であつても、次第くゝに其の隠れたる才能を發揮して行つた傾向がある。『厚く志し深く思ひ致々として勉強遅々として進む者なり』とは當時子規が虚子の辿つた路を批評した言葉であつた。初め二十五年

頃は未だ、

酒も好き餅も好きなり今朝の春

傘さして行くや枯野の雨の音

などゝいふ氣の利きかない句を作つてゐたが、二十八九年頃には、

燒山の夕暮淋し知らぬ鳥

怒濤岩を嚙む我を神かと朧の夜

羽衣の陽炎となつてしまひけり

の如き奔放な句風を自由にやつてのけるやうになつたのである。子規は素と主觀的の句をひどく嫌つたのであるが、虚子氏の斯うした句には、感心してゐたやうである。

彼は碧梧桐氏と共に日本派の俳句を普及して此の革新運動の助成に努力したことは一通りの熱心ではなかつた。『日本人』紙上に俳話を發表したり、松山で發行してゐた俳句雑誌『ホトトギス』を東京に移して日本派の機關として自ら經營したりした。彼が

此の『ホトトギス』を經營したことが、何の位も子規の革新運動の達成に就いて貢献したか知れぬ。今日彼が出してゐる『ホトトギス』は實に當時のものゝ繼續である。

又篤く子規に師事し、一方に於いては子規の病床を慰めて臨終に至る迄かはらなかつたことは、碧梧桐氏と同じである。子規は兩氏の才能をよく認め且つ理解してゐたけれども、碧梧桐氏が初めに縦横の才を示めたゝりに、其の發達が思はしくないの  
で、何方かといへば一歩々々と確實に進歩して行く虚子氏の方を期待し、彼の事業も主として氏をその後繼者たらしめんと密かに考へてゐたやうに思はれる。

内藤鳴雪氏は弘化四年生れであるから、碧虚二氏よりも子規よりも更に遙かに年長者であるが、矢張り子規等と同じく、新しい路を歩んだ人である。出生地も子規と同じく松山で、東京へ出て來たのは明治十二年であつた。而して二十二年からは例の松山出身學生の寄宿舎たる常盤會寄宿舎の監督をつとめてゐた。彼はいつ頃から俳句を作り出したかは知らないが、此の寄宿舎にゐた頃には子規や黄塔氏などゝ共に句作を

してゐたことは事實である。彼は同じく日本派と歩調を共にして進んで來たとは云へ年輩の相違の爲めか、或は性格の相違の爲めか、其邊はよく詳かではないが、若い人達の如く奔放自由なところは少なく、句調に於いては寧ろ平淡な傾向を持ち、趣味に於いては當時の現實を材料とするよりも、平安時代とか鎌倉時代とか、兎に角遠き過去の生活を材料とすることを好む風があつた。だから彼は古典的な傾向を著しく愛してゐたのである。けれども蕪村其他の天明頃の句風を好んだ點に於いては子規や其門下等と同じである。

彼は句作に於いてのみでなく、俳論に於いても相當の見識を持つて、常に年少の俳友等と議論を上下したことは、甚だ壯とすべきである。彼が如き年輩で若き人々と新しき俳壇の開拓に努力したのは、殆んど異數である。

以上の如き人々が、子規を先頭として、其の周圍に集り、新しき革新運動を捲き起したのである。彼等は常に相會しては俳論を試み、古句を研究し、新しき句を作り合



つて、子規の事業を助成したのである。明治三十一年頃から、子規を中心に、鳴雪、碧梧桐、虚子の諸氏が數年に亘つて、蕪村句集の論講を爲したことが、俳壇の爲めに何の位も益するところがあつたか知れぬ。

右の外に子規の周圍にありて、子規の事業の助成に貢献のあつた人は、擧げればいくらも擧げることが出来る。例へば五百木飄亭、柳原極堂、新海非風、石井露月等の諸氏の如きはそれである。飄亭氏は後には餘り俳句を作らなくなつたけれども、初めは子規よりも前に、既に月並調を脱して新しき路を切り開いた人である。極堂氏は後松山に歸つて、雑誌『ホトトギス』を發刊した人である。此の雑誌は後に虚子の手によつて東京に移されたことは前に述べた。新海非風氏は非常に天才的で、子規が最も望みを囑した人であつたが、後には俳句に遠ざかつてしまひ、石井露月氏は漢語調の豪壯なる句を特色とした人である。

子規は斯うした人々を常に鞭撻し誘導しつゝ、自らの所信に向つて募進したのであ

る。而して一人々々の進境に就いて絶えず注目し批評した。彼の『明治二十九年の俳句界』『三十年の俳句界』『三十一年の俳句界』等を見ると、彼が周圍に對する親切なる批評をよく知ることが出来る。殊に友人の俳句を一人々々分類し、其人々の句集を拵へて置いたといふ逸話を聞いては、實に氏がその周圍の人々に對して如何なる態度をとつたかを知るに十分であらう。斯かる努力があればこそ、熱心があればこそ、氏の事業も達成したのである。

## 第五章 改革者としての子規の性格及その態度

朽敗し墮落し盡くした俳壇を破壊して、眞の藝術的基礎の上に、新しき俳壇を建設したあの事業を、彼は何うして爲し遂げることが出来たか、或は彼の活動が何を油とし何を石炭として爲されたか、是れを考へることは中々意義あることでなければならぬ。殊に是れを彼の性格乃至態度に結び附けて觀察するときには、彼の功業の必ずしも偶然でない事が分るであらう。

凡て社會的事業にありて、舊きものが力を失ひ、其處に何等かの新しき氣運が生れやうとする場合——其の氣運が如何に脈々として一膜の蔭に漲つて來たにしても、それを突破して曙光の如く革新の光りを振りかざす人格が現れなければならぬ。而して其人格はそれを爲し遂げ得る丈けの性格を、其中に持つてゐなければならぬ。斯う考へて來て、子規の性格を見る時には、其處に彼があれ丈けの事業を僅か十年足らず

で成し遂げることが出来た理由を、容易に見出すことが出来る。

然らば子規の性格には如何なる特長があつたか、而してそれが改革者としての彼の事業に如何なる關係を持つてゐるか。此問題に就いて少しこれから述べようと思ふ。先づ彼の事業、彼の生活、彼の態度等を觀察して直ちに氣の附くのは、彼が驚く可き程の強き意志の所有者であるといふことである。文學者の通弊とも云ふべきは、意志の薄弱なことゝ一般に認められてゐる。又意志が薄弱だから、多くの人々が、文學者になり易いとも言ひ得るかも知れぬ。さればこそ多くの藝術論者や美學者は、藝術乃至美の特性に、無意志性といふものを、重大なる一條件として數へたのであらう。けれども子規にあつては、全く之れと正反對である。彼の藝術は假りに別問題として生活を通じて見た彼の性格には、意志の強烈なる點が普通人以上にある。

第一に驚く可きは彼が常に意志の力を以つて病氣に打ち堪へたことである。普通の肺病だけであつたならば、五年十年と生きることは敢へて珍らしくないのであるが、彼

は肺病の外に一種の脊髓腐蝕症といふ恐るべき悪性の疾患に苛まれつゝ前後八年間といふものを、それと闘つたのである。『左の肺がブツ／＼と音する』程でも、『蒲團の上に釘附にせられ……右に向きても痛く、左に向きても痛く仰向になつても痛く、丸で阿鼻叫喚の地獄も斯くやと思はるゝ許り』になつても、腰から臀部にかけて七箇所の瘻口が出来て、其處から膿汁が盛んに外に流れ出しても、兎に角それに打ち堪へて生きたのは、實に彼の異常な精神力から生れた意志の勝利でなければならぬ。彼が晩年の病状を見た醫師は、其の生きてることの不思議なるに驚いたといふ。

それ許りではない。さうした苦痛のはげしい病氣を持ち乍らも、常に自己の事業を怠ることなく、且つ研究し、且つ論じ、且つ創作した。又更に加ふるに『墨汁一滴』とか『病牀六尺』とかいふ日常の生活及び諸方面に對する感想録を、殆んど毎日の如く書き續けたのである。彼の事業乃至それに對する努力は、寧ろ彼が病床に臥してから益益發揮されたといつてよい。斯うした彈力ある努力は彼の強き意志から來らないで、何

から來よう。

又彼が俳句及び和歌に對する自己の所信を發表するや、四方から手嚴しい攻撃を受けたに拘らず、決して自己の所信を柱げたり、閉熄したりしないで、益々勇氣を鼓してそれらを戰つたのは、彼が如何に強き意志を持つてゐたかを證明して餘りあるものではなからうか。彼が強き意志とそれから生ずる弾力ある努力——これこそは彼の性格中で、最も改革者としての彼の事業に力を與へたものである。彼が日蓮を讚美したのも偶然ではない。

次に彼の性格に就いて述べなければならぬのは、シンセリチイといふことである。彼は如何なる場合にあつても、虚飾であること、不眞面目であることを許さない、常に眞實と眞面目とを保つことを忘れない。時に依つては彼のシンセリチイはぎごちない俗に云ふ融通の利きかない、更に一步踏み越ゆれば固陋ともいはるゝほどのものに陥り易い弊はないではなかつた。彼が文字上では、戀を云々したけれども、實際生活にあ

つては、餘り、否殆んど情事といふものを知らなかつたらしい。大谷是空氏の記すところに依ると、『二十一年の夏、君は向島の長命寺内の櫻餅屋の二階に下宿せられた、處が誰がいひ出したか其家の娘と關係でもあるやうに浮名が立つた、君は正直だけに此事を非常に氣にして、「七草集」と題する五六十枚もある小説的のものを書いて雪冤を試みられた、僕は面白半分に之れを材料にして續編小説を作つて君に叱られたことがある』といふ逸話がある。又彼が『小日本』をやらうとした時藤井紫影氏を訪うて『清潔な家庭新聞にするつもりで、市井の瑣談や狭斜艷種を一切省くことにした云々』と談つたといふ。(勿論これには他の社員の意志も或は加つての事であるかも知れぬが、彼が兎に角主幹であつて見れば、主として彼の意志であると想像してもよいであらう) これらの事は、彼のシンセリチイの、寧ろ極端なところから生じたものであらう。

『墨汗一滴』の中で、秋竹氏が『明治俳句』を上梓せんとするのを批評した中で、彼は曰く、『自己の著作を賣りて原稿料を取るは少しも悪き事に非ず。されど其著作の目的

が原稿料を取るといふ事より外に何もなかりしとすれば、著者の心の賤しき事いふ迄もなし。……近頃俳句に疎遠なる秋竹が何故に俄に俳句編纂を思ひ立ちたるか、俳句集が如何なる手段によつて集められしかは問ふ處にあらず、此書物を出版するにつき秋竹が何故に苦しき序文を書きしかは予の問ふ處に非ず。若し余の邪推を明にいはゞ秋竹は金まうけの爲に此編纂を思ひつきたるならん。……余は秋竹の腐敗せざるかを疑ふなり。』と言つてゐる。又更に他の箇所にて、彼は謂うてゐる、『ある人いふ、勳位官名の肩書をふりまはして、何々養生法などいふ杜撰の説をふりまはし世人を毒するは醫界の罪人といはざるべからず……云々。先頃手紙して此の養生法を余に勧めたる人あり。其時引札やうのものを共に贈られたり。養生法の引札すら既に變てこなるに、其上に引札の末半分は三十一文字に並べられたる養生法の訓示を以て埋められたるを見て、いよ／＼山師流のやり方なる事を看破せり。世の中に道德の歌、教育の歌、或は養生法の歌の如き者多くあれど、斯る歌など作る者に、眞の道德家、眞の教



育家、眞の醫師ありし例なき事なり。』

これを見れば、彼が如何に虚偽と、不眞面目を惡み、眞實と眞面目とを愛したかといふ彼の性格を十分知ることが出来るであらう。若し言ひ得べくんば、彼の眞實は、聰明なる眞實でなくて、素朴なる眞實であるかも知れぬ。けれどもそれ丈け彼の性格の奥底に根ざした眞實であると言ひ得るであらう。

如何なる方面の、或は如何なる事物の改革でも、その根本の意義は、虚偽なものを一掃して眞實なものを發揚することにあらねばならぬ。これに關しては、私は今更くどくどくと例を擧げるまでもないことと思ふ。子規が極端なほどに、虚偽を嫌つて眞實を愛するといふ性格の所有者であることは、改革者としての彼の資格に、重大なる一條件を加へるものと言はなければならない。

又彼には複雑なものよりも、簡單なものを好むといふ性向があるのは、見逃がすことが出来ない。これは前に述べた彼のシンセリチイを愛するの性格から生れる一端で

あるかも知れない。けれども兎に角クドクしたものでや混み入つたものよりも、簡潔なもの、関係のはつきりしたものを好むといふ性癖の著しいことは事實である。彼が俳句及び和歌に於いて、『印象の明瞭』といふことを頻りに主張したのも、此の性向の然らしむるところであらう。

彼は『病牀六尺』に於いて斯ういうてゐる。『余は幼き時より畫を好みしかど、人物畫よりも寧ろ花鳥を好み、複雑なる畫よりも寧ろ簡單なる畫を好めり。今に至つて尙ほ其傾向を變ぜず、其故に畫帖を見てもお姫様一人書きたるよりは、椿一輪書きたるかた興味深く、張飛の蛇矛を携へたらんよりは柳に鶯のとまりたらんかた快く感ぜらる。……墨畫なども多き畫帖の中に彩色のはつきりしたる畫を見出したらんは萬綠叢中紅一點の趣あり。……或は余の性簡單を好み天然を好むに偏するに因るか。』

又彼は九段の靖國神社の庭園に對する感想を述べた中で、『若し靖國神社の庭園を造り變へるといふ事があつたら、いつそ西洋風に造り變へたら善からう、まん丸な木や、

圓錐形の木や、三角の芝生や、五角の花畑などが幾何學的に井然として居るのは、子供にも俗人にも西洋好きのハイカラ連にも必ず受けるであらう。固より造り様さへ旨くすれば、實際美學上から割り出した一種の趣味ある庭園ともなるのである。』と言つてゐるところにも、彼の『明瞭なる印象』癖が露はれてゐる。彼にあつては上野公園のやうなふしだらな公園は好ましくない。

もう一つその例をあげて見るならば、彼は名所の寫眞に就いて斯ういうてゐる。即ち、『まだ見たことのない場所を實際見た如くに其人に感ぜしめようといふには其地の寫眞を見せるのが第一であるが、それも複雑な場所はとて一枚の寫眞ではわからぬから、幾枚かの寫眞を順序立てゝ見せる様にするとわかるであらう。名所舊跡などいふ處には此様な寫眞帖が出来て居る處もあるが、其寫眞帖は只所々の光景を示した許りで、それぐの位置が明瞭しないので、甚だ効力が薄い。それで此種の寫眞には必ず一枚の地圖を附けて、其中にあるそれぐの寫眞の位置と方位とを知らしむる様に

したらば非常に有益であらうと思ふ。』彼の所謂寫生論なるものは、此處から生れたものであるけれども、兎に角、これらの例を見ても、彼が如何に簡単なこと、印象の明瞭なことを好んだかといふことが想像される。彼が落合直文氏の歌を一つ／＼批評したときに、主として其の印象の不明瞭なるを難じたのも、此の性癖の發現である。

斯うした性格は一方に於いて強い意志と結び附いて、更に彼が何事も徹底しなければ満足が出来ない、従つて一本調子であるといふ方面に發展してゐる。これに就いては彼が殆んど十年近くも、左右を顧ることもなく、一心不亂に俳壇の爲めに奮闘したことを見るだけで、澤山であると思ふ。

意志の強い事、シンセリチイの人であること、簡單と印象の明瞭なるを好むこと、何事も徹底的にやらなければ満足が出来ないこと、是れらの多くの性格は、改革者としての彼の資格を充たすに、十分である。彼は生れながらにして、改革者としての性格を持つてゐるといつてよい。

最後にもう一つ彼の性格の著しい點を擧げて置かなければならない。それは非常に理智的なことである。彼の實生活は勿論の事、彼の藝術的方面に於いても、口では感情を重んじたけれども、其實極めて理智的であつた。彼の告白に依れば、學校時代には數學が不得手であつたといふことである。『併し余の最も困つたのは英語の科でなくて數學の科であつた。此時の數學の先生は隈本(有尙)先生であつて、數學の時間は英語より外の語は使はれぬといふ制規であつた。……つまり數學と英語と二つの敵を一時に引き受けたからたまらない、とう／＼學年試験の結果、幾何學の點が足りないで落第した』といつてゐる。けれども數學が出来ない事が、必ずしも其人の理智的性格を否認するものでない。然うした例は吾々の知人の中に探つてもいくらかも見出すことが出来る。子規も學校時代には數學が出来なかつたけれども、其の性癖に於いては、却つて其反對に極めて理智的な分子が多かつたのである。嘗つて彼の親友たる五百木颯亭氏は、彼を評して、『どこを押しても駄目の無いやうな感じがする』とか『少くとも

我輩等の知れる限りの先輩同輩後輩を通じて、彼れの如く整へる常識、より大なる常識を持つて居るものは餘り嘗つて見受けなかつた」とか言つてゐるのは、要するに彼の理智的な聰明を形容したものに外ならない。

けれども斯うした性格は、彼の事業にとつて一面に於いては、益するところがあつても、他面に於いてはそれを妨碍してゐるやうに思はれる。即ち彼は他人の藝術を味ふに鑑賞し味得するといふ力を薄らげ、又自分自身の創作に於いて、感情を抑へるといふ結果を齎らしたのである。更に又、藝術の内容は比較的閑却して、形式の改革に主として専心するといふ有様であつたのは、彼の理智的なことから發したものである。

以上のやうな性格を持つた子規が、彼の事業に於いて改革者として如何なる態度を採つたか、又は然うした性格と態度とは如何なる關係にあるか、といふことを私は述べなければならぬ。凡て改革といふことは如何なる方面にあつても、舊きもの、價値の無くなつたものを破壊し、掃滅して、新しきもの、價値あるものを建設し、創造

することであるとすれば、其處に改革者としての態度にも、破壊的方面と建設的方面とあるのが、當然である。一は破邪門とも言ひ得るならば、一は顯正門と言つても差支へないであらう。子規にも、彼の事業には、此の二つの態度があつたのである。

子規の破壊的態度は何麼ものであつたか、といふにそれは實に手きびしい、嚴酷なところがあつた。舊い價值、廢れた價值に對しては實に一步も假借することが無かつたと言つてよい。彼は殆んど舊派の俳句及び俳人を、文學及び文學者として認めない。彼等に對しては有ゆる非難、嘲笑、罵倒の辭を惜まなかつた。試みに其の一例を——然りほんの一例に過ぎない——擧げるならば、彼は『文界八つあたり』に斯ういうてゐる。『千羊の皮は一狐の腋に如かず、百萬の月並連は一個の寒書生(新俳人を指す)に及ばず、……學識無き佳句無き廉恥無き節操無きの數語を形容詞として現はれ出づべき今の宗匠に對しては、余は殆んど改良進歩の望みを絶ちたり。宗匠といへば卑俗を意味し發句といへば陋醜を意味するが如き其の宗匠其發句は早く之を地底に葬り盡し

て、只其墳墓より生ずる新萌芽の成長を待たんと欲するなり。』彼は月並俳人又は舊派の宗匠に言及するごとに、常に斯うした悪罵を加ふるに吝ではなかつたのである。

されば彼は舊俳人等に多くの敵を作り、その怨府の的となつたのも、當然といはなければならぬ。けれども彼はそれが爲めに決して攻撃の手を緩めることなく、一步も假借することはなかつた。斷乎として自己の所信を貫くことに邁進した。ニイチエの言葉に、『古き葉は落ちざるべからず』といふやうな意味のことがあつたと記憶してゐるが、實に彼の斯うした態度に依つて、舊俳人等は古き葉の如く落ちなければならぬ。彼が強き意志と、虚偽を惡む心とは、彼の破壊的態度に何の位ゐる力を與へたか知れない。

次に彼の建設者としての態度を述べよう。彼は第一に、新しき畑から、新しき芽を見出さうと努めた。即ち救ふ可からざる迄に墮落し盡した舊俳人は、指導しようなどとは毛頭考へず、其塵ものは全滅させるといふ意氣込みで、唯それ以外の未だ汚され



ざる素人の書生に、新しき光りを與へ、其處から新しき芽を育てやうとしたのである。如何なる改革も、常に素人の中から生れる。素人は未だ舊きものに染まないで、新しき力を蓄へてゐるものだからである。子規が建設的手段として、素人たる青年を味方として、それを育てようとした態度は、必然でなければならぬ。従つて彼は其の青年を鞭撻することも一通りではなかつた。五百木飄亭氏は言うてゐる。『彼は……我輩共を牽ゐて自己の勢力下に引廻してやらうと思つて居たらしい、従つてそれ以後の彼れは我輩どもを鞭撻すること亦た一通りでなく、盛んに讀書をすゝめ、修養を説き、教へつ勵ましつ、自己が前途に猛進すると共に、一面常に後を顧みつゝ來れ〜と我輩どもに手招きをして居たのである』と。

それから建設者としての彼の態度をもう一つ述べなければならぬことがある。それは彼が一般の新しい俳人等を、指導誘掖に努むると共に、更に少數の、或は一二人の前途あるものを極力育て上げることを忘れなかつた事である。彼はその人に依つて自

己の事業の終繼者たらしめようと企てたのであるらしい。若し斯うした選ばれたる信賴者にして一度其の信賴すべからざるを暴露するや、彼は冷然として又顧みようとなし、それがよく解る。氏は曰く『終に世に現るゝに至らずして止んだ亡友非風は、當初我々と共に俳句に熱中した一人で、當初子規は彼が天品の奇才を欣び、大に之を培養せんと志したのであつたが、殆んど情熱的感情家たりし彼れ非風は、中途子規と同じく結核性の肋膜炎より直に肺病となつた爲め、此の激烈なりし感情家は忽ち自暴自棄の人と化し、自から嘲りつゝ敢て放縱の行ひをなしたので、子規はやがて之を棄てた。……併し非風を見棄てる際に於ける子規は、如何に彼の爲め悲むだか、亦如何に親しき同志を失うて自己の周圍の落莫たるを悲むだか。……其友も一度落ちて又救ふべからざるに至るや、彼れは涙を揮つて他の憫むべきを悲みつゝ而かも寧ろ無用の材として一抛し去つたかの風があつた。』

それから彼は虚子氏に眼を着けた。而して彼の歿後の事業を彼虚子氏に委ねん爲め、一日虚子氏を道灌山に誘ひ出して、自らの意のある處を告げ、専ら彼に修養やら讀書やらを説きて其れの準備をせんことを強ひた。けれども虚子氏は案外冷淡で、それはほどの野心がないのを知り、彼は非常に失望した。これに就いて彼は言ふ、『虚子は要するに文學者たらんと望まざるに非らざるも、うるさき學問迄して文學者たらんとは願はざるなり。虚子は功名の念なきに非らざるも勉強して迄そを得んことを願はざるなり。彼は野心なき最も清き人間なるべし、而かも終に我同志の人に非らず、……あゝ生の病は三十餘年を出でざるべし。生の事業は只短き此の一代の事業として中途に埋葬せらるゝものとなれり、此の鬱々の情誰れに向つて語らん。』此爲めに彼は何の位も落膽し悲哀を感じたか知れない。けれども後には碧梧桐氏と虚子氏とは、彼の事業の助成者として、相當の役目を遂げたのである。

兎に角彼は改革的事業を達成せんが爲めに、信賴すべき、且つ前途ある少數者を選

んで、それを極力培養し鞭撻して、彼の助成者たり、後繼者たらしめようとした其の態度は、實に聰明な態度であると思ふ。此の爲めに、選まれざる者の不平を買つたやうな傾きがあつたけれども、併しそれは全く止むを得ぬ次第である。

## 第六章 子規の俳論

子規の俳論は子規の事業にありて、重大な要素となり、大切な役目を務めて居るものである。眞に藝術的鑑賞に目覺めてゐない時代にあつては單にいゝ句を作り、新しい作を示す丈けでは、直ちに其の光りが世に認められるものではない、従つて俳壇に新しい運動の起るものではない。さうした藝術家は、唯先驅者として知己を後世に俟つより外に仕方がない。けれども若し眞に然うした眞藝術の運動を起して、一般俳壇を覺醒しようとならば、いゝ句を作り、新しい作を示すと共に、一方に於いては、眠れる一般の藝術的鑑賞力を振ひ起し、それを指導し、藝術上の自らの主張を明らかにするの態度に出でなければ、其の効果を擧ぐる事が出来ない。之をロマンチズムに於けるユーゴーの例に見るも、ナチュラリズムに於けるゾラの例に見るも、皆然らざるは無い。彼等は自ら作ると共に、自ら主張したのである。子規の事業にあつても、

彼の俳論を見逃がすことは出来ない。

彼は俳句の本質、地位、傾向等を論ずることに依つて、從來の如く遊戯的職業的に墮落した俳句に、藝術としての生命を吹き込み、それを純藝術に於ける哲學的基礎の上に安置しようとしたのである。此の努力は、彼の事業の生命である。よし彼の俳論は、純藝術的、乃至美學的見地から嚴密に檢覈する時には、不完全なところ、不妥當なところ、或は不徹底なところがちよい／＼見えるにしても、兎に角斯うした動機をもつて爲されたものとして見る時には、犯すべからざる權威があつて、吾々の尊敬に値するものがある。私は是れから其間に私の感想をも少し加へ乍ら、彼の俳論を徐ろに叙述しようと思ふ。

## 一、美と俳句

私は前に彼は俳句を藝術としての哲學的根柢の上に打ち立てようとしたといつた。

其意味は俳句を文藝の一種となし、以つて俳句に美學の基礎を與へようとしたといふ事に外ならない。當時の多くの俳句は、俳句が文藝上で如何なる地位を占むべきものを理解してゐるものが極めて少なかつた。のみならず俳句が果して文藝であるか何うかといふ事さへ、自覺してゐないものがあつた位である。又一方に於いて當時の新しい小説家、批評家、新體詩人等は、俳句などは凡俗の弄ぶべき遊戯的のもので、文學としては實に取るに足らぬもの、或は甚しきに至つては文藝の埒外にあるものとさへ考へてゐるものがあつた。何れにしても文學としての俳句の價值乃至地位が、餘り認められてゐなかつた。

斯く俳人自らも其の價值を知らず、社會一般からも卑下されてゐた俳句の價值を闡明し、その地位を向上せしめる爲めに、子規は俳句に美學的根柢を與へようとしたのは當然のことゝ言はねばならぬ。されば彼の俳論を知らんとすれば、その根據として求めたる彼の美に對する見解を先づ第一に調べて見なければならぬ。

彼に依れば、俳句は文學の一部である、文學は美術の一部である、だから美の標準は文學の標準である。従つて文學の標準と俳句の標準とは同一のものである。されば繪畫も彫刻も音樂も演劇も、而して詩歌も小説も凡て同一の標準から割出されなければならぬ。斯く見ることに依つて、彼は俳句を他の有ゆる藝術と同等の價値、同等の地位にあることを闡明してゐる。此の見解の上に立つて、彼は從來の無自覺な舊俳人の迷妄を覺まし俳句を卑下する他の新しき文藝家と鬪つたのである。

然らば美には絶對的標準といふものがあるか、此問題に對して彼は曰ふ『美は比較的なり、絶對的に非ず、故に一首の詩、一幅の畫を取て美不美を言ふべからず、若し之を言ふ時は胸裡に記憶したる幾多の詩畫を取て暗々に比較して言ふのみ』と。

美が絶對的のものでない事は確かであるけれども、美の所因が比較にあるとする説は、聊か無理である。これに就いては當時美學者などの注意があつたとかで、彼も此の説を後に撤回したやうである。併し美が絶對的のものでない説は、飽迄も主張した。



彼に依れば美の標準は、感情にあるが故に、各自の感情が異なるによつて異つてゐる。併し其標準は各自が標準と思つてゐるだけで、絶對的の標準でないことは言ふ迄もない。此の外に絶對的の標準があるか何うかは知ることが出来ない。縦し有ることを知つても、其れの性質は然らば何うだと言はれても答ふることが出来ないものである。若し美の標準が議會の決議の如く、多數決を以て定むべきものであつたならば、その標準は裏店の賤男賤女が喜ぶべき、極めて卑俗のものとなるであらう。多數決などでは美の標準の定まる道理などがない。だから美の標準は各自によつて異ふものと言つた方が確かな考へである。要するに美の絶對的標準は到底之を知ることが出来ない。然らば美に對する判断が各自に異つてゐても差支へはないか、異ふ方がほんとうであるか。これは中々重大な問題であり、且つ幾多の美學者の頭を悩まして來た問題である。カントといひ、シルレルといひ、近くはスペンサアやギョオテといひ、皆此問題を唯一の困難な問題としないものはない。今日にありても猶是れに對する明確なる解

決は着かないでゐる。恐らくは將來とても中々決着點を見出すに困難であらうと思はれる。

子規はこれに對して何ういふ見解を持つてゐるか、彼は謂へらく、各個人の美の標準を比較すれば、大同の中に小異なるあり、大異の中に小同なるありと雖も、種々の事實から歸納すれば、全體の上に於いて、永久の上に於て、ほと同一の方向に進んでゐるやうに思はれる。只此の歸納は非常に困難なことであるから、動もすれば空漠に流れるのを免るゝことが出来ない。けれども譬へば、『船舶の南半球から北半球に向ふ者一は北東に向ひ、一は北西に向ひ、時ありて正東正西に向ひ、時ありて南に向ふもあれど、其結果を概括して見れば、皆南より北に向ふが如し。』此の方向を稱して、所謂美の標準と名づけ得ることが出来よう。だから假りに之を概括的美の標準と名づけて置かなければならぬ。

子規の所論は、嚴密な科學的考察を経るときには、幾多の困難、幾多の破綻の存在

することは明らかである。これで美の判断の標準が解決し盡されるものなら、カントもスペンサーもとうの昔に、立派に片付けてしまつてゐる筈である。けれども私は茲で子規の美的標準論の根柢を批判し突き崩すのを目的とするものでもなければ、又それをやつてゐる餘裕もない。唯彼一個の所説一般を縮めて叙述すればよいのである。唯美學の美の字も知らぬ當時の多くの俳人の中にありて、彼は斯く迄美といふものを考へた事そのことを私は多とするものである。美學者でない子規に對して、美の原理に關する科學的批評を企てるのは、私の本意ではない。唯私は子規が俳句の革新を企てるに際して、藝術の本體たる美の原理に迄探り入つたことを尊敬するものである。俳句といふものは、斯かる美を具現するものである。美を具現しない俳句は、俳句でもなければ、藝術でもない。俳句を批評するに當つて、此の美に關する一般原理から批評すべきものである。従つて他の小説、繪畫、彫刻などと同じ標準に依つてなされなければならぬ。

次に美は感情である。美しいと見るのは吾々の感情の發露であつて見れば感情を描いて美は存在しない。其間に理智が入つては美も美でなくなる。——是れが彼れの、主觀に於ける美の心理學的所因の見方である。之は大體に於いて今日にありても是認することが出來よう。彼れが月並排斥論は此の根據に依つて爲されたものである。

彼は又陳腐といふことを非常に嫌つた。「昔は面白き繪畫なりと評せられし其意匠も、今日に在りて之を模倣せば人皆陳腐として之を斥けて、或は今日に在りて斬新なりともてはやさるゝ詩や小説も後世に至り、同様の意匠を爲す者多からば、終には陳腐とし厭嫌せられん」と。彼は此の陳腐には美がないといふ考へを抱いてゐる。何故かといふに、彼の説くところに依れば、美的價値は時代に依りて少しづゝ變遷するものであるといふ理由に依るのである。彼の陳腐の對象は、材料と感情とを兩つ乍ら意味するやうであるが、材料は陳腐であつても、感情が新しければ差支ないのである。唯感情の陳腐といふことは、藝術にとつては、何等の價値を生ずるものでない。子規

は少し此の間の區別に對して、考へが足りなかつたやうである。若し材料の陳腐なるところに必ず美がないといふならば、此の有限の世界にあつて、新しき材料が必ず盡きる場合のあることを想像し得るのであるが、其時藝術は滅びなければならぬ。

唯私は子規が材料の陳腐をも排斥したその心的動機に關して、同感し得る一點を見出すことが出来る。それは新しき感情を得んが爲めに、新しき材料を選むことを多くの俳人に説いたのであらうと想像する事である。人間の感情はそれが本來の性質として、材料が古い場合には、新しき感情をそれに依つて創造することは困難なものである。新しき材料に對する時には、保守的な人々も、少し努力すれば、新しい感情を起すことが出来る。此の心理的事情を洞察して、子規が材料の陳腐を排斥したとすれば、吾々はそれを暫し認めてやらなければならぬと思ふ。彼の事業にとつてもそれがいい結果を齎らすことが出来る。

## 二、俳句と他の文學

俳句と他の文學とは、同等の地位を占むるもの、其間に價値の輕重は無いならば、俳句と他の文學とは如何なる點に於いて區別すべきか、如何なる差があるか、而して其間に如何なる關係があるか。斯ういふ問題が茲に起つて來るであらう。

彼は之に答へて謂らく、俳句と他の文學との區別は、其音調の異るところにあると。彼の謂ふ音調とは、所謂音數律のことを指すやうである。彼は曰く、『他の文學には、一定せる音調有るもあり、無きもあり、而して俳句には一定せる音調あり。其音調は普通に五音七音五音の三句を以つて一音と爲すと雖も、或は六音七音五音なるあり、或は五音八音五音なるあり、或は六音八音五音なるあり、其他無數の小異あり、故に俳句と他の文學とは嚴密に區別すべからず』と。

是れを以つて見れば、彼は俳句と他の文學との區別を、その表現の形式に依つて爲

してゐるやうである。これは一種の常識論で、何人も直ちに考へ及ぼすところである。けれども唯最後の方に至つて、俳句と他の文學とは嚴密に區別すべからずと——斷つて居るのは、當時に於ける彼の一見識である。今日『自分は所謂俳句を作つてゐるのではない、唯藝術を創造してゐる』といふやうな意味のことを標榜してゐる俳人の多くなつたことを考へれば、彼れ子規が、當時にあつて既に俳句と他の文學とは嚴密に區別すべからずと喝破せる如きは、明らかに子規の考方の、單に一片の常識論でないことを證明してゐるものといつてよい。

彼れは俳句と他の文學との區別を、唯形式の特徴に依つてのみ爲したか、といふに決してさうではない。其の内容に依つて、俳句の特色及び他の文學の特色を區別してゐる。彼は謂ふ、『俳句と他の文學との音調を比較して優劣あるなし、唯諷詠する事物に因つて音調の適否あるのみ、例へば複雑せる事物は小説又は長篇の韻文に適し、單純なる事物は俳句和歌又は短篇の韻文に適す。簡樸なるは漢土の詩の長所なり、精緻

なるは歐米の詩の長所なり、優柔なるは和歌の長所なり、輕妙なるは俳句の長所なり。然れども俳句全く簡樸精緻優柔を缺くに非ず、他の文學も亦然り。』

内容に依つて俳句と他の文學と區別することは、表現上の形式に依つてするよりも、更に／＼困難である。何故なれば假りに優柔といひ、輕妙といふも、それは必ずしも表現上の音數律の性質如何から來るものではなくて、全く作者の内部精神そのものから來る一種のスタイルだからである。子規の爲せる此の區別は聊か妥當を缺くものといつてよい。

子規は又俳句と他の文學との優劣に關する世間一般の俗見解を打破しようとして斯ういつてゐる。曰く、美の標準は美の感情に在る。故に美の感情以外の事物は美の標準に影響するものではない。多數の人が賞美する者必ずしも美ではない。上流社會に行はるゝ者必ずしも美ではない。上世に作爲せしもの必ずしも美ではない。故に俳句は一般に弄ばるゝが故に美ではなく、下等社會に行はるゝが故に不美にはならない。



要するに一般の俳句と他の文學とを比較して優劣があるものではない。漢詩を作る者は漢詩を以つて最上の文學となし、和歌を作る者は和歌を以て最上の文學となし、戯曲小説を好む者は戯曲小説を以つて最上の文學とする。けれども是れは誤れるの甚しきもの、俳句を以つて最上の文學と爲す者も亦、同じく誤つてゐる。是れ等凡てのは文學の標準から言へば、同等のものであると。

此の見解は、前にも一寸述べて置いたのであるが、如何にも其通りである。今日にありては此麼ことを教へられなければ知らないでゐるやうな者は、恐らくは一人もあ  
るまい。けれども當時にありては、斯うした常識的なことをも聲を大にして叫ばなければならぬ程に、俳人なり、其他の一般文學者なりが幼稚であつたことを思へば、  
まるで隔世の感がある。而して今日、俳句を藝術の一種として他の藝術と同じ地位に  
あるものである事を、少しも不思議とも何とも感じない程に迄なつたのは、子規の當  
時の努力があづかつて力あつたことを思へば、子規が今日から見て常識的な言葉に過

ぎないやうなことを叫んだのに對して、尊敬を拂はずには居られない。若し子規の努力が無かつたならば、而して第二第三の子規が其後出なかつたならば、俳句なるものは、今日も猶藝術上の地位が得られないでゐたかも知れなかつた。

### 三、俳句の種類と季題

彼は俳句の種類といふ表題を掲げて、その著『俳諧大要』の中に論じてゐる。けれども彼の種類といふ意味の中には、俳句の要素といふことをも含めてゐるやうである。これは聊か妥當でないやうな感もあるが、併し兎に角該表題の中で言つてゐることを述べようと思ふ。

彼は曰く『俳句を分ちて意匠及び言語(古人の所謂心及び姿)とす。意匠に巧拙あり、言語に巧拙あり、一に巧にして他に拙なる者あり、兩者共に巧なる者あり、兩者共に拙なる者あり、意匠と言語とを比較して優劣先後あるなし、只意匠の美を以つて勝る者

あり、言語の美を以つて勝る者あり。』と。これは俳句の種類でなくて、俳句の要素に關する議論である。つまり内容と外形、若しくは内容と表現を指すのである。

子規は又謂らく、意匠には勁健なるもあり、優柔なるもあり、壯大なるもあり、繊細なるもあり、雅樸なるもあり、婉麗なるもあり、其他、幽遠、平易、莊重、輕快、奇警、淡泊、複雑、單純、眞面目、滑稽等區別しやうとすれば幾多のものがある。又言語にもそれらの區別がある。勁健なる意匠には勁健な言語を用ひなければならぬ、優柔なる意匠には優柔なる言語を用ひなければならぬ。其他、雅樸、平易、滑稽等皆それに應じて、言語もそれに適ふやうなものを選まなければならぬ。

斯うした區別は、彼がその理性的理智的性格の好みから來たもので、聊か區別せんが爲めに區別した感が無いでもない。物好きな一種のリトリシアンの爲すことであるやうにも思はれる。従つて無理な分類をしたところがある。例へば意匠と言語とを全く別物のやうに區別したところなどは、明らかにさうである。如何なる言語でも、それ

が何等かの意味を持つ限り意匠の無いものがない、と共に如何なる意匠でも、それが吾々の心理に明瞭する爲めには、言語（文學にありては）を持たないものはない。今日にありては、意匠と表現とは全く同一のものだと主張する哲學者さへ現はれてゐる位である。例へば伊太利のクロオチエ氏の如きはそれである。だから意匠と言語とを、子規の如く餘りに明確に區別することは聊か考へものである。けれども當時にありては、美學も言語學もさう進歩してゐないし、文壇一般の知識もさう進んでゐなかつたのであるから、今日の進歩した立場から許り、さう責むるわけにも行かない。けれども兎に角、聊か區別せんが爲めに區別したかの如き觀のあることは争はれない。だから此の區別は子規の事業の中心に對しては、さう深く役立つてゐない。

彼は更に又曰く、意匠にも主觀的なるもあり、客觀的なるものもあり。主觀的とは心中の狀況を詠じ、客觀的とは心象に映り來りし客觀的の事物を其儘に詠するものである。又意匠に天然的なるもあり、人事的なるもある。人事的とは人間萬般の事物を

詠じ、天然的とは天文地理生物礦物等總て人事以外の事物を詠ずるものである。以上各種の區別皆優劣あるものではない、一人にして各種の變化を爲す者あり、一人にして一種に長ずる者もある。

次に子規が俳句の季題といふものを、何ういふ風に見てゐるか、何ういふ意味に於いて其の存在の理由と意義とを認めてゐるか。これを述べて置かなければならない。抑々季題なるものは、西洋にも無いものであり、日本にあつても、他の文藝には無く、獨り俳句にのみ古から傳へられて今日迄取扱はれてゐる。和歌には嘗つてあつた事もあるが、併し俳句の如く決して束縛的のものではなかつたやうである。今日にあつては、俳句にさへ季題の無意義なるを論じて排斥する人々が出るやうになつた。けれども全然捨てられたのではない。子規の當時にあつては、勿論季題を排斥する俳人は未だなかつたやうである。

子規は俳句に於ける印象明瞭といふことを主張し、其れに關聯して聯想といふこと

を非常に重大視した。——此の事に關しては次項に於いて委しく述べることにする——。彼の季題論は即ち此處から生れるものである。

俳句に於いて何故季題が必要であるか、これに對する子規の考へは斯うである。俳句は聯想を必要とするならば、其の聯想を起すには、季題があることが、何の位も便利だか、何の位も明瞭性を助けるかわからない。季題があることに依つて、吾々は俳句に於ける季節の聯想を最もよく爲すことが出来る。若し季節が無かつたならば、春の時候か夏の時候か、或は秋冬の時候かよくわからない。例へば一個の山水の景色を詠ずるとする。此の中に若し梅とか菜の花とかを詠み込むならばそれに依つて其の山水が春の場景であることを知る。若し其中に青葉とか卯の花とかを詠み込むならば、それが夏の景色であることを直ちに想像することが出来る。

要するに季題の價値は、其の俳句に於ける時間的聯想を明瞭ならしむるところにある。これ丈で季題の意義と價値とが十分知得さるゝのである。されば季題の無い雜

の句は、よし俳句として作らるゝことありとするも、『四季の聯想なきを以て、其の意味淺薄にして、吟誦に堪へざるもの多し』といふわけになる。

然らば時間的にのみ題を作らないで、空間的にも題を設けるのが至當ではないか、と問ふ人があるかも知れない。けれどもこれは少し無理な註文である。『時間は年々同一の變化を同一の順序に従ひて反復するが故に、之を制限して以つて命名すべし。然れども空間の變化は毫も順序なる者あらずして、不規則なるものなり。例へば嶽河海郊原田野一も順序ある者なし。故に之に命名せんと欲せば人間の見聞し得る所の一々に命名せざるべからず。地名是なり。地名は時間の區別に比して更に明瞭なる區別なれば、俳句に地名を用うるは、最簡單なる語を以て、最錯雜なる形象を現すの一良法なりと雖も、奈何せん一人にして地球上の地名と其光景とを盡く知るを得ず、且つ其區別明瞭なるが故に、之を用うるの區域甚だ狹隘を感ずるなり。……其地を知らざる者には何等の感情をも起さしむる事難し。即ち四季の變化は何人も能く之を知ると雖

も、東京の名所は西京の人之を知らざる者多く、西京の名所は東京の人之を知らざる者多きが如きなり。』

従つて子規の考へに依れば、季題は題の如くして、眞の題ではない。例へば内容をそれに束縛されて、其題をのみ中心とするやうな俳句を作る必要なく、只其の題が、内容に對して時間的即ち季節の聯想を與へさへすれば十分である。『俳句の題は只だ其題を詠み込みてだにあらば可とす。また其の主たると客たるを問はず。その原因は種種あれども主として題詠の區域を廣くし自由に思想をはたらかしめんとするにあり。』と言つてゐる。

#### 四、俳句と聯想、印象、其他

彼の性格は非常に理性的であることを私は前に述べた。理性的であることは、知識的であることを豫想する。此の知識的性向は、唯單に論文のメソードの上のみ止ら



ないで、更に俳句其ものゝ性質に對する見解の上にも現はれて來てゐる。

彼は美を以つて感情の所産である、従つて俳句も亦感情を基としなければならぬことを、力を込めて唱道してゐる。けれども彼の謂ふ所の感情は、少し徹底しないやうなところがある。これは此の一項で追ひ／＼述べる。彼は美そのものゝ解釋を感情の所産と説き乍ら、下つて俳句そのものゝ議論となると、何うも知識的、非感情的のものを力説してゐるやうに思はれる。

俳句は素と短き形式を持つて生るゝものであるから、小説や戯曲の如く複雑なる内容を完全に現はすことが出来ない、と彼は説いてゐる。彼の考へを次に概略して述べて見る。此の簡單なる形式を以て、複雑なる内容を詠じようとすれば、多くは失敗に終るのが常である。さればなるべく簡單なる思想や材料を取扱はなければならぬ。複雑なる美と簡單なる美と優劣があるのでないから、簡單なる美を取扱つたからとて、俳句の價値は少しも減じない。俳句には聯想といふものがある。それが俳句に於

ける簡單美をして一層價值あるものたらしめてゐる。此の聯想こそは俳句の特色である。彼は謂らく、『蝶といへば翩々たる小羽蟲の飛び來る一個の小景を現はすのみならず、春暖漸く催し草木僅かに萌芽を放ち、菜黃麥綠の間に三々五々士女の嬉遊するが如き光景をも聯想せしむるなり。此聯想ありて始めて十七字の天地に無限の趣味を生ず。故に……聯想を解せざる者は終に俳句を解せざるものなり。此の聯想なき者、俳句を見て淺薄なりと言ふ亦宜なり。』と。

即ち聯想は俳句の唯一の補助意識である。これなくして、俳句には何等の生命がない。何等の藝術的價值がない。けれども子規は更らにそれに印象の明瞭といふことを附け加へて居る。聯想は印象の明瞭に到達する一手段であるかの如く彼は考へたのである。又印象の價值に就いて、彼は言つてゐる。『印象の明瞭を尙ぶ者は形體を尙ぶなり、餘韻を尙ぶ者は精神を尙ぶなり。形體の美は直ちに五官が感得する美なり。精神の美は（初は形體より出で來りし者あるにもせよ）知識によつて抽象せられたる無形の

美なり、五官の美は（程度の多少はあれど）爺婆に至る迄之を感じずれども、無形の美は知識ある者聯想多き者に限りて之を感じずべし。此故に世人往々餘韻を以つて最上の美となす。知識を交へたる美が果して最上の美なるか否か之を知らず。假りに之を最上の美と定めんに、猶ほ形體の美を度外に置くこと能はざるは論を俟たず。餘韻を主とするものも全く形體の外に立つべき者に非れば、普通の場合に於て出來得る限りは印象を明瞭にするの必要はあるなり。尙ほ一步を譲りて論ぜんに、少くとも餘韻無き句を評するに當りて、印象明瞭を標準として其美を判定するは最も必要なる事なるべし。』

彼が明瞭なる印象を、重大視することは、彼の性格にひそむ寫生的傾向、乃至は重自然的性癖を度外に置いては考へられない。彼の性向に溯つて見るに、彼は生れながらにして人事的現象よりも、天然的事象を好むやうに出來てゐる。此の事に就いては彼自らも告白してゐる。而も彼が天然的事象を好むのは、それから受ける人間的感情の發動をよろこぶのではなくて、天然的事象そのものゝ形體を如實に觀照することを

好むのである。此の事に關しては、後に彼の寫生文を論する時に委しく述べるが、兎に角彼の寫生的傾向が彼の性格に根ざしてゐることを一言して置かなければならぬ。

斯く彼が客觀の形體そのものを觀照することを好むとすれば、その形體の印象の明瞭ならんことを望むのも、決して偶然ではない、彼の印象主義と寫生論とは、同一の源泉から發したものと云つてよい。

私は前に彼が感情を尊重し乍ら、其實極めて知識的であるといつたのは此點である。理窟許りが知識ではない。形體そのものを有りのまゝに受け入れること、即ち觀照することも知識的作用である。これを理解するには、少し面倒で、哲學乃至心理學の領域に迄手を觸れなければならない。さうなると此の一小節では迎も出来るものでないから茲にはそれを中止して置くが、唯一言だけ云はして貰へるならば、形體をその有るがまゝに受け入れること、即ち觀照することは心理學的には知覺的作用である、認識論的には直觀的作用であること、従つてそれは吾々の主觀に於ける感情の殆んど加は

らざるものであること丈けを述べて置く。彼は『人々に答ふ』(其ノ十)に於いて、『自然の美を感じるも感情なり。感情を捨て、自然の美を求むべきやうなし』と言つて、自然の形體をその有るがまゝに詠ずるも、感情の作用の如く言うてゐる。けれどもそれは感情の作用ではなくて、知識的作用、之を心理學的に言へば知覺の作用である。藝術上に於ける自然主義は、感情を抑へて、唯現實を如實に見詰むるものであるといふ明治四十年前後の我國の自然主義者の主張は、科學的には誤つてゐない。子規が客觀を如實に表はすのも感情の作用であるといふ主張は、科學的に誤つてゐるものである。従つて彼の所謂印象の明瞭といふことも、若し客觀を有るがまゝに受け入れる爲めのものであるならば、知識的作用に過ぎないのである。

それから彼は俳句に於ける配合論といふものを説いた。これは纏つた議論としてではなかつたけれども、晩年に至つて機會ある毎に、美的配合を力説したやうである。彼は題以外に餘り目ぼしい配合物のない句、例へば

仰向けに落ちて流るゝ椿かな

勝鶏の物狂はしききほひかな

の如きを斥けた、而して題に新しき他の事物、而もその題とよく調和するものを持つて來ることを主張した。例へば

春風や祇園清水孔雀茶屋 四 明

春水や橋の下ゆく川蒸汽 把 栗

の如く、題以外に配合物のあるもの、而も其の配合物がよく題と調和したものを採つたのである。これは純藝術論の立場から見たら何ういふ價值があるか、一寸疑問であるが、兎に角客觀的藝術、自然主義的藝術——殊に題といふものに束縛されてゐる——の行詰つた時には止むを得ざる、或は赴き易い到着點であるかも知れぬ。

彼は又俳句に於ける——和歌、文章等を批評するときにもこれが出て來るが——調子のたるみを排斥して、成る可く引締ることを力説した。即ち表現の緊張である。こ

れも纏つた議論としてではないけれども、彼が具體的に俳句を批評する時には、よく此のタルミを排斥するの説が現れて来る。時に依つては此の調子のタルミ如何に依つてのみ、其句の價值を否定してしまふやうな場合さへある位である。けれども此のタルミ排斥の藝術論的説明は彼は餘り與へてゐないやうである。

## 五、芭蕉論と蕪村論

芭蕉の藝術の特色は現實生活を超越して、佛教的思想を加味した幽玄、閑寂といったやうな一種神秘的乃至象徴的色彩を持つてゐるところにある、とは多くの芭蕉を論ずる者の一致する觀察であつた。その代表的俳句として、

古池や蛙飛び込む水の音

枯枝に鳥のとまりけり秋の暮

等が第一に擧げられるのを常としてゐた。又それが芭蕉の藝術の一特色を爲してゐる

ことは、子規が何う云はうとも事實である。

けれどもそれが芭蕉の全部であるか何うか、他にそれ以上の特色がないか——といふ疑問に對して、子規の答へたところも亦、全く否定する事が出来ない。然らば子規は芭蕉の如何なる點を特色と見たか、といふにそれは豪壯の句、雄健の作にあるとしたのである。

五月雨を集めて早し最上川

夏草やつはもの共の夢の跡

猪も共に吹かるゝ野分哉

塚も動け我泣く聲は秋の風

荒海や佐渡に横ふ天の川

是等の句を見るに、僅か十七字の中に、如何に壯大な意匠が表はされてゐるか、如何に雄健な内容が含まれてゐるか、是れ芭蕉ならではの詠じ得ぬところである。芭蕉



の藝術の眞の特色は茲にある、と子規は喝破してゐる。此の芭蕉論は子規の一見識から生れたものであつて、多くの芭蕉論の中に、嶄然頭角を現はしてゐるものといつてよゝ。

子規の芭蕉論が、單に異色あるものといふ許りではない、彼の事業にとつても、決して閑却することの出来ないほど、重大な意義を持つてゐる。それは何かといへば、彼は芭蕉を論ずることに依つて、當時全盛の舊派俳人等に一大痛棒を加へ、俳句を鑑賞するには如何なる態度を採らなければならぬか、如何に鑑賞すべきものか、といふことを教へるの機會を與へたからである。

當時の舊派の俳人、殊に宗匠とか何とか言はるゝ俳人等は、芭蕉といへば、唯其名をきいた丈けで如何なる句も、立派なものである、否神聖にして近づくべからざるもの如く崇め奉つてゐた。其間に決して批評がましい言葉を許さない。さうかといつて彼等は眞に芭蕉の句そのものゝ味ひを鑑賞する力もないので、彼等は其の句に何等

かの理窟を附加して自分の都合のよいやうに極めて勿體ぶつて解釋して世人に示してゐるといふ有様であつた。例へば、

物言へば唇寒し秋の風

の句にしても、其の中に世間的な一種の道德的意味を強ひて寓せしめて、意味深長なるかの如く解釋してゐるのである。

子規の甚しく嫌つたのは、排斥したのは此の解釋法である。俳句は其麼こぢつけの解釋をすべきものではない、飽迄も表現上に露はれた其まゝの意匠を、其まゝに味ふべきものである。決して理知的、寓意的解釋をして、牽強附會の説を立つべきものではない。斯く解釋することは、芭蕉其人の眞の價値を知る所以ではない。唯ありのままを解釋し、有りのまゝを味へ、これが子規の考へである。

子規は其の性格として、決して盲目的に事物の絶對的權威を認めることは無かつた。これは如何なる方面でもさうであつた。必ず彼は一定の見解乃至主張を持つて、それ

に依つて事物の價値を判斷するといふ風があつた。従つて動もすれば事物それ自身を持つ特色とか味ひとかを公平に、客觀的に捕捉することが出来ない場合もある位である。けれども一定の見識を持つて價値判斷をすることは、決して悪いことではない。寧ろ彼の特色であるといつてよい。

斯うした性格からして、彼は舊俳人の如く、同じく芭蕉の價値を認めるにしても、決して盲目的ではなく、彼一個の見解に従つて、その價値を認めただのである。だから舊俳人の芭蕉に對する價値感の内容と、子規が芭蕉に對する價値感の内容とは、其間に雲泥の差があるのも當然である。

斯くて彼は自己獨特の見解からして、芭蕉の句には、惡句駄句が極めて多い。殆んどその『過半は惡句駄句を以つて埋められ、上乘と稱すべきものは、其の何十分の一たる少數に過ぎず、否僅に可なるものを求むるも寥々晨星の如し』といつてゐる。是れに依つて彼は、舊俳人等の芭蕉に對する盲目的崇拜を打破し、一掃したのである。

此の一見惡罵の如き彼の芭蕉論は、喧しく世論を喚起し、殊に彼の舊派俳人の宗匠の如きは、書生論畢竟何するものぞといつたやうな冷笑をそれに浴せかけた位である。けれども自信の強き彼れ子規は、決してそれ位のことには腰打ち挫いてしまふやうなこととはなく、それより益々自己の所信に向つて邁進した。彼が明治二十六年十一月『日本新聞』にこの芭蕉を論じたる『芭蕉雜談』を掲げてからは、一意専心、舊俳人等の迷妄を打破することに努力したのである。

芭蕉の次ぎに彼れが見出したる俳人に蕪村がある。彼れは芭蕉の眞の價値を疑ふものではないけれども、一度蕪村を見出したる彼れは、蕪村を以つて、芭蕉以上の俳人であることを認識するに至つた。彼は『芭蕉といふ名は徹頭徹尾尊敬の意味を表したる中に、咳唾珠を成し、句々吟誦するに堪へながら、世人は之を知らず、宗匠は之を尊ばず、百年間空しく瓦礫と共に埋められて光彩を放つを得ざりし者を蕪村とす』と云つてゐる。

彼の見方によれば、芭蕉にありては其の過半が駄句惡句のみで、眞に採るに足るべきは其の幾十幾百の中の一句に過ぎないのであるが、蕪村に至りては、百中百迄悉く立派な名句である。完全な藝術である。何麼俳人でも名句がある代りに屑もあるものだが、殆んど蕪村にあつては屑がない。而して芭蕉にありては僅かに芽が吹いた許りのいゝ方面が、蕪村に至りて十分に花も開き、實も結んでゐる。

以下少しく子規の蕪村に對する具體的批評を述べて見る。美に積極的美と消極的美とがある。積極的美とは其意匠の壯大、雄渾、勁健、艷麗、活潑、奇警なるものをいひ、消極的美とは其意匠の古雅、幽玄、悲慘、沈靜、平易なるものをいふ。概して言へば、前者は西洋の美術文學に多く、後者は東洋の美術文學に多い。芭蕉の俳句は主として消極的美の意匠を用ひてゐる。而して積極的美は僅かに其の一端を現はしてゐるに過ぎない。例へば『猪も共に吹かるゝ野分かな』の如きはそれである。けれども蕪村に至つては、其の積極美が十分俳句の上に發揮されてゐる。其の例をいふならば、

『一年四季の中春夏は積極にして秋冬は消極』であるが、蕪村は最も夏を好み又夏の句は最も多いのを以つて見てもわかるであらう。其の佳句も亦春夏の二季に多い。試に消極的なる芭蕉と積極的なる蕪村との句を擧げて見る。

尾張より東武に下る時

牡丹蕊深くわけ出る蜂の名残哉  
芭蕉

桃隣新宅自畫自贊

寒からぬ露や牡丹の花の蜜  
同

牡丹剪つて氣の衰へし夕かな  
蕪村

地車のとどろとひびく牡丹かな  
同

方百里雨雲よせぬ牡丹かな  
同

金屏のかくやくとして牡丹かな  
同

波翻舌本吐紅蓮

閻王の口や牡丹を吐かんとす

蕪村

以上の句に見るも、芭蕉の意匠が弱々しいに反し、蕪村の意匠が力強いものを持つてゐることがわかる。

又美には客觀的美と主觀的美とがある。文學史を調べて見るに上世に溯る程主觀的美を發揮した文學が多く、後世に來るに従つて、客觀美を現はした文學が多い。此の中で、芭蕉が主觀美を俳句に現はしたのは、芭蕉が未だ上世の傳習を脱しないからである。けれども蕪村に入りて、客觀的意匠がはつきりと俳句の上に取扱はるゝやうになつたのである。子規の此の客觀的美とは今日の言葉で言へば、一種の素朴なる自然主義を意味するものと見て差支へない。

蕪村の句には、主觀を取り入れない、全くの客觀的美の發現に於いて成功したものが隨分ある。而して其の結果として繪畫的になるものが多い。

木瓜の陰に顔たぐひすむ雉子かな 燕村

釣鐘にとまつて眠る胡蝶かな 同

小原女の五人揃うて袷かな 同

てらくと石に日の照る枯野哉 同

水鳥や舟に菜を洗ふ女あり 同

以上の例に見るも『一事一物を畫き添へざるも繪となるべき點に於て、燕村の句は、燕村以前の句よりも更に客觀的』である。

それから燕村の俳句の特色として、人間を巧みに取扱つたところをも挙げなければならぬ。天然は簡單であるが、人事は複雑である。天然は沈黙し人事は活動する。簡單なるもの、沈黙せるものに就いて美を求むるは易く、複雑なるもの、活動せるものは難い。俳句に於いて殊に然りである。俳句に人事的美を詠じたる者少き所以である。芭蕉は寧ろ天然に重きを置いた。其角嵐雪は人事を寫さんとして端無く拮屈贅牙



に陥り、或は人をして之を解するに苦ましむるに至るのであるが、獨り蕪村は何の苦もなく進んで、思ふまゝに人事美の中に『濶歩横行』した。而してこれは蕪村以後にあつても、餘り此の方面に手を着けた者が少ない。

行く春や選者を恨む歌の主 蕪村

味噌汁をくはぬ娘の夏書かな 同

鮓つけてやがて去にたる魚屋かな 同

青梅に眉あつめたる美人かな 同

沙彌律師ころりくと衾かな 同

旅芝居穂麥がもとの鏡立て 同

之等の句を見るに、人間といふものが、易々と十七字の中に丸め込まれてある。人事とか人間とかの嫌ひな子規が、何故蕪村の斯うした方面を、價值ある蕪村の特色として感服してゐるか——といふ疑問に突當らざるを得ない。甚だ矛盾してゐるやうに

思はれる。けれども子規が例に挙げた是等の句を見ると、同じく人間を取扱つてゐるとは言ひながら、自然物の如く、純客觀的に爲されてゐるのが眼に着くであらう。彼が稱するところの人事美に向つて、『何の苦もなく進み思ふまゝに濶歩横行』することは、人事を純客觀的に取扱ふことであるやうに思はれる。

美には又實驗的と理想的との二種がある。實驗的とは人間の經驗し得るものに於ける類であり、理想的とは、人間の『到底經驗すべからざること、或は實際有り得べからざること』を詠みたるものである。『今人にして古代の事物を詠み、未だ行かざる地の景色、風俗を寫し、曾て見ざる或る社會の情狀を描き出す者』である。文學は須らく兩者を兼ね具へてゐなければならぬ。謹嚴なる芭蕉は『苟にも嘘をつかじ』とて文學に理想を排したのであるが、蕪村にあつては、自覺的にそれを應用したのである。

子規が茲に謂ふ所の、實驗的、理想的といふ美の分類は、嚴密にいふ時には、甚だ不徹底なものであることは、私は今更ら喋々するまでも無い。先づ彼の理想的といふ

意味は、想像的といふ言葉をそれと置き代へるならば、稍妥當に近いかも知れない。それは別問題として兎に角子規の所謂理想的であるといふ蕪村の句を少し舉げて置く。

河童の戀する宿や夏の月  
蕪村

名月や兎のわたる諏訪の湖  
同

指南車を胡地に引き去る霞かな  
同

朝比奈が曾我を訪ふ日や初鯉  
同

鬼貫や新酒の中の貧に處す  
同

子子の水や長沙の裏長屋  
同

又芭蕉は俳句はなるべく簡單に作るべきこと、所謂『頭よりすらくと云下し來る』べきもの、或は『物二三収集る物にあらず、黄金を打のべたる如くある』べきものとしたに反し、蕪村は複雑なる意匠を縦横に用ひて、毫も失敗してゐない。此の複雑美に於いては蕪村は『美は簡單なりといふ古來の標準も棄て、顧み』ない。其の功や没すべ

からざるものである。

草霞み水に聲なき日暮かな  
燕村

梨の花月に書讀む女あり  
同

五月雨や水に錢踏む渡し舟  
同

秋風や酒肆に詩うたふ漁者樵者  
同

水かれく蓼かあらぬか蕎麥か否か  
同

等の句に見るも、一句の中にいろく景物を取り入れて、複雑なる美を構成してゐることがわかる。芭蕉の

ひらくとあぐる扇や雲の峰  
芭蕉

しばらくは花の上なる月夜哉  
同

の如き比ではない。

『外に廣き者之を複雑と謂ひ、内に詳なる者之を精細と謂ふ。精細の妙は印象を明瞭

ならしむるにあり。『蕪村の俳句には此の精細美を發揮したものが多し。

あぢきなや椿落ち埋む庭たつみ 蕪村

夏川を越す嬉しさよ手に草履 同

鮎くれて寄らで過ぎゆく夜の門 同

夕風や水青鷺の脛を打つ 同

點滴に打たれてこもる蝸牛 同

蚊の聲す忍冬の花散るたびに 同

庭たつみに椿の落ちたのは誰も考へ附くであらう。けれども埋むとは言ひ得ないのである。若し埋むに力を入れたならば、俗句と成つてしまつたであらう。『落ち埋むと字餘りにして埋むを軽く用ゐたるは、蕪村の力量』である。『善き句にはあらねど、埋むと迄形容して俗ならしめざる處、精細美を解したるに囚る。』『手に草履といふことも、若し拙く言ひのばすならば、殺風景となる。短くも言ひ得るのを、『嬉しさよ』と

長く言つて、長くも言ひ得るのを『手に草履』と短く言ひしところ、『良工苦心の處ならんか』と子規は賞めてゐる。

以上は蕪村の俳句の、内容即ち意匠に關する特色である。子規が蕪村の價値を、以上の諸點に置いた丈けでも、既に賞め過ぎる程賞めたものであるが、更に表現に於ける手腕に就いても、蕪村の卓越してゐることを看破したのである。例へば、

指南車を胡地に引き去る霞かな  
蕪村

閣に坐して遠き蛙をきく夜かな  
同

鉢桶をこれへと樹下の床几かな  
同

の如く、何のいやみも俗氣もなく、漢語を自由自在に驅使したるが如きがそれである。  
又、

更衣母なん藤原氏なりけり  
蕪村

夜を寒み小冠者臥したり北枕  
同

の如く、古語を適切に用ひたる、或は又、

出る杭を打たうとしたりや柳かな  
蕪村

酒を糞る家の女房ちよとほれた  
同

の如く、俗語を巧みに用ひたる、然も皆、いやみに陥らないのを見れば、蕪村の手腕の凡ならざるを證するものである。

此の外、これ迄、何々や、何かなといふ平凡一點張りの句調の外に、

春風や堤長うして家遠し  
蕪村

鮓を壓す石上に詩を題すべく  
同

出べくとして出ずなりぬ梅の宿  
同

等の如く新しき表現法を開拓してゐる。又句調にあつても、従來は、五七五の句切りにて意味も切れたその外には、餘り手出しをするものがなかつた、けれども蕪村は、

宮城野の萩更科の蕎麥にいづれ  
蕪村

柳散り清水涸れ石ところぐ 同

春風や人住みて煙壁を漏る 同

等の如く、意味が必ずしも句切に依つて切れないやうなものを縦横に用ひたのは、彼獨特の表現法である。

此の外に蕪村の特色として子規の擧げたものは、まだ二三あるけれども、それは省くとして、兎に角、内容上にありても、表現法にありても、此上の諸點だけでも、蕪村の眞價は古今獨歩といふほどのものである。子規の見方に依れば蕪村には缺點といふべきものは、殆んど見當らない。

子規が此の蕪村の研究は、俳句に於ける彼の辿るべき路或は方向を何の位も支配してゐるかわからぬ。彼の事業は殆んど蕪村の指示したところを只開展してゆく丈けでも、十分効を奏することが出来たであらう。



## 六、月並俳句と新俳句

今日にあつては、獨り俳諧にたづさはる人許りでなく、少し新しき趣味意識の發達した人は、月並といへば、陳腐なこと、乃至は平凡なことを意味するものと説明する迄もなく直ぐ合點するやうになつた。それ丈け月並といふ語が悪い意味で普及してゐる。

抑々月並といふ語の本來の意義は何ういふことを表はしてゐるかといふに、毎月決まつて催すことである。月並俳句會といへば例の通り毎月決まつて催すところの俳句會といふ事である。當時の舊派の俳人等は、毎月月並俳句會を開いてゐたと見えて、子規は彼等宗匠を中心とする舊俳人等の連中を月並社會とは呼んでゐたのである。従つて更に彼等の俳句の傾向——例へば陳腐とか俗調とか——を一括して、月並流と言つた。されば子規の運動が漸く俳壇に勢力を得るに至るや、多くの新しい俳人等は、

月並と批評さるゝことを何處に恐れたかわからなかつた。又月並といふ言葉を浴びせらるゝ丈けで、もう最後のとゞめを刺されたと同じであつた。子規の事業は、此の月並を倒すことが、唯一の目的であつたとも言へる。

然らば子規の所謂月並流とは結局何を意味するか、それと月並でないところの新しい俳句とは何ういふ風に異ふか、といふ問題に逢着するであらう。此の問題は、言ひ換へれば舊俳人等の俳句の特徴と、新俳人等の俳句の特徴との區別を明らかにすることになるので、中々の大問題である。けれども子規は『俳句問答』の中で、此の區別を、比較的簡單に述べてゐるから、それを茲に引き出して見ようと思ふ。

『第一、我は直接に感情に訴へんと欲し、彼(とは月並の事を指す)は往々知識に訴へんと欲す。例へば

藏、建つる隣へは來ず、初乙鳥、  
鶯、笠

といふ句は、藏建つる隣の富家には燕來らずして藏も無きわが草の戸には燕來れ

りとの意なるべし。されば此句の主眼は燕は富を喜ばず貧を嫌はず寧ろ我家に来るは貧を樂むなりと歸納的に斷定する所にあるものにして、即ち知識に訴へたるなり。是れ我の取らざる所なり。しかも此種の相違は根柢よりの相違なり。』

此の判斷は純藝術論から見て、全く正當のものである。知識に訴へるのは、純藝術ではない。今日の我が小説界にあつても、知識に訴へる作物が多いので、此の非難があるが、恰度彼れと是れとは同一の論據から來るものである。併し子規は『我は感情に訴へる』と言つてゐるけれども、彼の純客觀句は、感情に訴へるものでなくて、矢張り知識に訴へるものであることに彼が氣附かない。唯月並流と子規の客觀句とは智的の意義が多少異なるだけである。これに就いては前に述べたから、茲に説明を略すことにする。又子規はいふ、

『第二、我は意匠の陳腐なるを嫌へども、彼は意匠の陳腐を嫌ふこと我よりも少し、寧ろ彼は陳腐を好み、新奇を嫌ふ傾向あり。例へば

黄鳥の初音や老の耳果報蓬宇

の如き誰が聞きても陳腐なるべきを、此の老俳諸師は今更のやうに作れり。此の句の如き必ずしも類句を擧げて而して後始めて其陳腐を知る者にあらざれども、念のために古人の類句を示さんに、

鶯の耳に順ふ今年かな紹巴

鶯や耳にこれを得て今朝の春昌察

鶯や耳の果報を數ふ年梅室

鶯に耳面白き今年かな乙由

の如きあり。殊に梅室の句は最とも相類似せるを見る。』

陳腐といふこと、言ひ換へれば古今の歩み盡した路をのみ往來して、新しい思想感情の創造の無いことが、藝術にとりては一文の價値の無いことは、今更言ふ迄もない。陳腐は藝術の停滯である。これは今日の新しい文學家乃至讀者には、殆んど常識とな

つてゐる。

『第三、我は言語の懈弛を嫌ひ、彼は言語の懈弛を嫌ふこと我よりも少し、寧ろ彼は懈弛を好み緊密を嫌ふ傾向あり。例へば

日、々、に、來、て、蝶、の、無、事、を、も、知、ら、れ、け、り、

幹 雄

の如き『をも』の語は懈弛の甚しきものなり。』

これも子規の批評は正當である。詩の表現に於いて、緊張を要することは、言ふ迄も無いことである。何故なれば詩に於けるリズムが懈弛する時には、美が失はるゝからである。

『第四、我は音調の調和する限りに於て雅語俗語漢語洋語を嫌はず、彼れは洋語を排斥し漢語は自己が用ゐなれたる狭き範圍を出づべからずとし、雅語も多くは用ゐず。』

若しボケアブライの豊富なことが、思想感情の自由乃至豊富を證明するものである

ならば、子規の方を探らざるを得ない。舊俳人等が陳腐に陥るのも、半面に於いて此のボケアブラリイの貧弱から來るものと言つても差支ない。

『第五、我に俳諧の系統と流派とを有し、且つ之あるが爲に特種の光榮ありと自信せるが如し。従つて其派の開祖及び其傳統を受けたる人には特別の尊敬を表し、且つ其人等の著作を無比の價值あるものとなす。我はある俳人を尊敬すれどもそは其の著作の佳なるが爲なり。……正當に言へば我は其人を尊敬せずして其著作を尊敬するなり。故に我は多くの反對せる流派に於て佳句を認め又惡句を認む。』

これは俳句の性質に關する傾向の區別ではなくて、俳人の態度に關する區別である。此の子規の態度が眞の正しき藝術的態度であることは、今更説明を加へる迄もあるまい。子規は、以上五ヶ條の區別は、大體を盡せりと信ずると言つてゐる。これに依つて子規の月並觀、及び新俳句論の概要を知ることが出来るであらう。知識に訴へること、陳腐なること、表現の懈弛すること、ボケアブラリイの貧弱なこと、流派的感情

に支配さるゝこと、それらが所謂月並派の特徴であつて、同時に藝術上で排斥しなければならぬ事柄であるのを、子規が喝破したのは、藝術とは何ぞや、藝術家は如何なる態度を採らなければならぬものであるか、といふやうなことを餘り、否殆んど解せざる當時の幼稚な俳壇に於いては、實に空谷の跫音と言つてもよかつたのである。

## 第七章 俳人としての子規

前に述べて来たところを見ると、子規の俳論は今日から顧れば、多少獨斷的な、又は不徹底な箇所を持つにしても、兎に角當時にあつては極めて組織的であり且つ綜合的であることを知ることが出来る。俳句の研究者としては此の點に於いて少くとも俳人の中の何人も及ばないであらう。然らば俳人として言ひ換へれば俳句の作者としての彼は何うであらう。あれ程理智的な子規は、想像と感情とを中心要素とする藝術品の創造者として何麼手腕を持つてゐるであらう。私は是れから其の方面に就いて、聊か所見を述べようと思ふ。

### 一

未だ芭蕉も知らず、蕪村も知らず、唯無自覺に句をひねくつてゐた時代はいざ知ら



す、少くとも二十五六年頃から、殊に蕪村に接した二十七年からは彼の俳句は常に客觀的寫實的傾向を追うて、それが殆んど死ぬ迄續いてゐる。此の間に如何に彼の所論や俳句が變遷しても、此の傾向だけは決して消滅してゐない。始終一貫してゐると言つてよ。

麥蒔きやたばねあげたる桑の杖 (二十五年作)

菜の花や野中の寺の縁の下 (二十六年作)

夜櫻や大雪洞の空うつり (二十七年作)

きら／＼と若葉に光る午時の風 (二十八年作)

欄干には二十五菩薩春の風 (二十九年作)

森の上に江戸の火事見ゆ夜の曇り (三十年作)

水草や蜻蛉とまる秋の花 (三十一年作)

古池の芥に春の小魚かな (三十二年作)

春風や扇流しの裾模様

(三十三年作)

夕顔の柵に糸瓜も下りけり

(三十四年作)

草花を壓する木々の茂りかな

(三十五年作)

是等に依つて見ても、彼は常に客観的、乃至は寫實的傾向に一貫してゐることが分るであらう。なるべく自己の主観——理窟は勿論の事感情さへも、ぢいつとして抑へてゐる。彼は主として自然描寫をやつたから、客観的であると考へる人があるかも知れないが、それは誤りである。同じ自然描寫でも、芭蕉などには、主観的なものが可也多い。例へば、

あらたふと青葉若葉の日の光

芭蕉

の如きはそれである。然らば子規が人間生活を取り扱つたものが主観的であつたかといふにさうではない、矢張り客観的に取扱はれてゐる。

昔知る水夫に逢ひぬ春の町

庭に出て物種まくや病み上り

知らぬ野を通る旅路や雉の聲

の如く、其中には何等主觀的な感情が表はされて居ない。唯行爲を客觀的にすらくと叙述してゐるに過ぎない。要するに自然物であらうと人事であらうと、子規の態度そのものが客觀的傾向に一貫してゐるのである。唯彼が其の趣味からして、人事よりも自然物をより多く好んだ爲めに、自然物を詠じた句が多いといふ丈けだ。又彼の客觀的態度は、半ば彼の俳句に於ける主義から來てゐるにしても、半ばは彼自身の性格の然らしむるところであるのは、争はれない。彼は生れ乍らにして、寫實主義的であつたところから來てゐる。

## 二

彼の藝術は右の如く、客觀的乃至寫實主義的であるにしても、純粹の藝術として、

果して纏つた乃至は完成したものであらうか。ユニツクな而して卓越した藝術であらうか。又彼は芭蕉の如く乃至は蕪村の如く、單に句作者として立派なものであらうか。若し斯ういふ端的な疑問を發する人があるならば、私は直ちに『然り』と大膽なる肯定を與へうる程の確信は持たない。勿論同じ新俳人等の中では、何といつても一頭地を抜いてゐることは、言ふ迄もない。

けれども彼の藝術には何處か深さが無い、鋭さが無い。客觀的乃至は寫實主義的藝術は獨り俳句に限らず、凡てさういふ弊に陥り易い傾向を持つてゐるものであるから、子規の藝術も其邊の原因から來てゐるのであらう。今日、或る俳人の如きは、子規の俳句は全然拵へ物である、技巧の産物である、などと批評してゐるが、そののみであると斷するのは、當らないにしても、實際は多少其の傾きもないではなからう。

然らば子規の俳句は、如何なる點から見れば意義があるか、價值があるか、或は全然價值がないか、——私は若し見方を換へるならば、甚だ意義もあり、價值もあると

思ふ。其の見方とは純藝術品としてよりも、『試みの俳句』としてそれに對する事である。子規は理論に於いても句作に於いても、常に新しきフイルドの開拓乃至は改革といふことを念頭に於いて、それを忘れることはなかつた。宗匠等舊俳人は、唯廢類し切つた狭い傳統——而も墮落した——を墨守するのみで、新しき發見も創造も企てようとしなかつた。寧ろそれらを邪道の如く忌み嫌つたのである。子規は唯其の繫縛を斷ち切つて、新しい方面の開拓に只管心を砕いた。云はゞ廢類し切つた傳統よりの解放を企て、而して眞の埋れたる傳統を探り出して、自己の辿るべき新しき道の方角を把握し、それに依つて自由なる飛躍を試みたのである。だから彼の句作の態度にあつても、常に試みの心が支配し、又作られた俳句其ものも、新しき道への試みの跡が歴然としてゐる。従つて彼の句は十七字といふ短詩形で果して何處迄内容の範圍を擴げられるものか——勿論客觀的といふことは其の基因になつてゐるが——如何なるものは表現し得て如何なるものは表現し得ないか、といふ疑問に對する試みとして見ると

きに初めて意義があるのである。彼の言ふ意味でなく、別の意味での實驗的俳句である。

彼が試みの最も具體的な例は、明治二十九年一月、『日本新聞』に掲げた『俳句二十四體』である。彼は俳句を、眞率體、卽興體、音調體等二十四體に分類して、各々其體に従つて自ら試作して見たのである。茲にそれを示して見よう。

### 眞率體

ひらくと蝶々黄なり水の上

三月や小松の枝に雀二羽

### 卽興體

『卽興體は眞率體に似て人事に關するもの也、はた天然にても、際どく變動するものは卽興體なるべし。而も眞率體に比すれば多少の複雑と巧者とを許す。』

一錢の釣鐘撞くや晝霞

出代の傘をさしたる女かな

卽景體

『眞率體に似て天然を主とするもの也。人事にても天然的客觀的に見る時には猶卽景體なるべし。眞率體に比すれば多少の工夫を増し、而かも卽興體に比すれば靜止の方に傾けり。』

春の夜や奈良の町家の掛行燈  
夕焼や鰯の網に人だかり

音調體

『俳句にして音調無きはあらず。されど茲に音調體といふは趣向はさしたる事なく  
て只音調のみめづらかなる句をいふ也。』

うれしさの過ぎぬ正月四日なり  
あれよく鳴子に鳥の飛ぶ事よ

擬人體

『人間以外の萬有を人間に擬へて詠む也。動物の舉動はこれを人間の如く形容し、植物天象川器物等はこれを意識あるものの如く形容するをいふ。』

鶯や顔見られたる道のはた

凧や大佛どのは聾なり

廣大體

『空間の廣き句也。千里萬里といふも廣大なれども千里萬里といひし許りにて、なか／＼に廣大の感なくば下手の句なるべし。一町二町の處も言ひ様によりて廣大に感ぜぬことかは。』

ぐるりから春風吹くや鴉の湖

其中に富士ぼつかりと霞かな

雄壯體



『雄壯體は勢力の強きものをいふ。勢力の強きものは空間も廣く、従つて廣大體に似たる所あり。されど廣大體の空間は靜かにして、雄壯體の空間は動きたり。』

大風に近よる鳶もなかりけり

雉啼いて盤梯山の崩れけり

### 勁拔體

『勁拔體は雄壯體の小なる者也。靜止せる空間にても高く聳えたる者は雄壯勁拔の感を起すことあり。是れ物理學に所謂潜伏力のあるが爲也。』

春風や鋸山を碎く音

大砲や城跡荒れて梅の花

### 雅樸體

『雅樸體は陰に屬する句、即ち消極的なる句をいふ。淋しきもの古きもの寂びたるもの衰ふるもの貧しきもの皆雅樸體也。雅樸體普通に古雅といふ。』

佗びぬれば田螺鳴く也夜もすがら  
古店や買人もなくて涅槃像

艶麗體

『艶麗體は見た所の美しきものを詠める也。四季にては春最も艶に、人物にては上流社會及び花柳社會最も艶也。』

春風に尾をひろげたる孔雀かな  
金殿のともし火細し夜の雪

繊細體

『繊細體は空間の小さき者勢力の弱き者をいふ。故に廣大の消極も繊細也。雄壯の消極も繊細也。』

鶯の足跡ほそし鍋の尻  
蓼の葉や泥鰌隠るゝ薄濁り

## 滑稽體

『滑稽體は一讀して笑を催さしむる句をいふ。さりとして川柳のひたすらに噴飯せしむる者とは異り、俳句は滑稽のうち品格あり、趣味あるを要す。』

どう見ても案山子に耳はなかりけり

鼠狩れば鼠の笑ふ夜寒かな

## 奇警體

『奇警體はめづらかに人の目をさますやうな意にして、あらぬことをあるが如く詠み、あるはさまでなき事を仰山に形容するたぐひ也。』

臺灣や陽炎毒を吹くさうな

永き日を蟻上るらん塔のさき

## 妖怪體

『妖怪體は妖怪の現在する處、或は將に現れんとする凄凉の光景を詠む也。妖怪な

らぬものを妖怪の如く思ひなすも猶妖怪體なるべし。』

血の跡の井戸に盡きたり春の草

寒燈明滅小僧すよく寝入りたり

祝賀體

『祝賀體は人を祝ふ句也。千代萬代の長壽を祈り常磐堅磐に榮えん事を期す。固より祝賀の本意也。』

大君のあれましゝ日や菊の花

(天長節)

何も彼も水仙の水も新しき

(賀新築)

悲傷體

『人のまかりたるを悼める、不幸を慰めたる、古今の變遷を悲みたる、身の上を歎きたる皆悲傷體なるべし。』

いたはしや梅見て人の泣き給ふ

(悼)

戦に行きて足を切られたる人に

わびしさや炬燵にのばす足のたけ

### 流麗體

『句調の安らかに語呂の滑らかなる句をいふ。大方其意味にかゝはらねど區域極めて廣し。』

一桶の藍流しけり春の川

群れ上る人や日永の二月堂

### 拮屈體

『流麗體の反對にして、句調のぎくぐくと語呂のむづかしきさま也。又調子にさせる窮屈の處なくとも意匠の錯雜したる者は拮屈體なるべし。』

不忍に蓮の芽見えす春や水

鳴子なくて鳥飛びぬ敵隠れたり

天然體

『天然物を詠ずるの意にて人事と分つなり。』

岩角やつゝじ花咲く齒朶隠れ

墨吐いて烏賊の死に居る潮干かな

人事體

『天然體に對して言へる也。多少天然を交へたりとも人事の主たる者は猶人事體なるべし。』

爐塞ぎて草鞋はき居る首途かな

錢湯で上野の花のうはさかな

主觀體

『天然と人事とに關らず作者の意思感情を現はしたるを言ふ。作者の知識によつてある物の關係を定め、是非を判じたるが如きも主觀體也。他の心中を推し測りた

るも亦然り。』

福壽草 貧乏草もあらまほし  
京人のいつはり多き柳かな

客観體

『天然と人事とに關らず客観に見たるをいふ。即ち作者の意見判斷等を交へざるもの也。』

水底に魚の影さす春日かな  
春の山重なり合うて皆丸し

繪畫體

『明瞭なる印象を生ぜしむる句をいふ。即ち多くの物を並列したる、位置の判然したる、形容の精細なる、色彩の分明なる等皆是れ也。』

茶店あり白馬繫ぐ桃の花

すうと出た櫻の枝に目白かな

神韻體

『卽かず離れず實ならず虚ならず主觀ならず客觀ならず之を神韻體といふ。故に此體には主客兩觀を區別し難き者、二事二物の關係明かならぬもの多し。主とする所只精神韻致のみ。』

永き日や蝦夷の草原田ともならず

禪寺の門を出づれば星月夜

右の如きを見る人は、彼が如何に多方面な試みをしてゐるかがわかるであらう。これ許りではない、同一の題に於いても、いろ／＼と詠み換へてみるといふ風があつた。例へば『墨汁一滴』の中で、或日伊藤左千夫氏から鯉を貰つた時に盥へ入れて病牀の傍に置きそれを俳句に詠んだことを談つてゐる。『とやかくと作り直し思ひ更へてやう／＼十句に至りぬ。さはれ數は十句にして十句にあらず。一意を十様に言ひ試みた



るのみ』とて、

春水の盥に鯉の唵啁かな  
盥浅く鯉の背見ゆる春の水  
鯉の尾の動く盥や春の水  
頭並ぶ盥の鯉や春の水  
春水の盥に満ちて鯉の肩  
春水の鯉の活きたる盥かな  
鯉多く狭き盥や春の水  
鯉の吐く泡や盥の春の水  
鯉の脊に春水そゞ盥かな  
鯉はねて浅き盥や春の水

の十句を作つてゐる。又『病牀六尺』では、柳に翡翠といふ題で、十句を矢張り同じ。

動機から作つてみたことを書いてゐる。此の時には彼は斯う云うてゐる。『春水の鯉（即ち前に擧げた春水の句のこと）は身動きもならぬ程言葉がたまつてゐたが、柳に翡翠の方は稍ゆとりがある。従つて幾らか趣向の變化を許すのである。而して其の結果はといふと翡翠の方が厭味の多いものが出來た様である。併しこんな句の作り様は一時の戯れに過ぎないやうであるが、實際にやつて見ると句法の研究などには最も善き手段であるといふことが分つた。つまり俳句を作る時に配合の材料を得ても句法の如何によつて善い句にも悪い句にもなるといふ事が、此のやり方でやつて見ると十分にわかる様に思つて面白い。』

此の外、彼は一題十句とか一題百句とかいふものを頻りに作つたのであるが、それが皆彼の試みの心から爲されたものである。斯かる試みに依つて、彼はその持論を實際にして見ようとした。彼はいゝ句を作らうとしたことは勿論であらうが、他の一面に於いてはいゝ句を作る方法、乃至その可能性を研究したのである。従つて彼の俳句

は一種の研究所とでも言ふべきものである。彼の門下及び後輩は、此の研究所からいろ／＼な知識を得て、それに依つて比較的苦勞することなく、新しい俳句を作るこゝとが出来たとやつてもよい。彼の俳句が、斯ういふ意味に於いて、何の位も彼の革新事業に便利を與へたか知れない。云はゞ彼は後より來るものゝ爲めに、手ほどきをして與へたものである。而して縁の下の力持ちとなつたのである。彼の俳句の意義乃至價値は純藝術品としてのそれよりも、寧ろ斯うした意味に於いて、十分に認められなければならない。此點を無視して彼の俳句を輕々しく斷じてはならない。

又彼の俳句は非常に多岐多葉な表現と内容とを持つてゐるので、藝術としての純一性の無いことを非難する人があるかも知れないが、彼の如く、常に試みの心を持つて句作した者にとつては、止むを得ないと言はなければならない。彼はわざと意識して、なるべく狭い自分の性癖にのみ囚へられないで、廣く何れの方面にも手を着けてみようと心掛けて、修養したのである。此の意味に於いて彼は全く新しき句作者の凡てに

道を開いてやつた人でなければならぬ。彼は時代に冷淡なる先驅者ではなくて、後に來る者に親切な先驅者であつたのだ。

## 三

彼は主義に於いてもさうであつたが、實際の句作に於いても材料に重きを置いたのである。陳腐なる材料は、いかに新し味を出さうとしても、當底出るものではない。

彼の配合論は其處から生れて來る。同じ題でも新しいものゝ配合には、新し味が自然出て來るといふのである。——勿論彼の配合論の中には、陳腐な材料でも詠み方で多少新し味が出ないわけでもないし、新しい材料でも詠方によつて陳腐にはならない迄も悪い句となることのあるは、認めてゐる。けれども概して新しい材料には新しい味が出やすいといふ考へは變らない——。彼は『松蘿玉液』の中で、夏帽十句を試みた中の七句を掲げてゐる。

夏帽の白きをかぶり八字髭

夏帽の人見送るや蟹が子等

潮あびる裸の上の藁帽子

夏帽の對なるをかぶり二三人

夏帽子人歸省すべきでたちかな

夏の古きをもつて漢法醫

夏帽も取りあへぬ辭誼の車上かな

之れに對して彼は斯う自讚してゐる。『もとよりつまらぬが多かれど、これこそは古來誰一人讀まざりし新題なれば一句々々陳腐を脱せしこと自ら保證しても可なるべし。呵々。夏帽十句を聞きて先づ題ばかりにてはや面白しと喜びたるは碧桐桐なり云云。』彼は夏帽といふ新しい題のみで、その内容も新しいことを自讚してゐるのである。これは彼が客觀的藝術を主張して、感情を現はさないやうに企てた當然の結果でなけ

ればならない。感情を現はすときには、その感情によつて俳句の新しい古いが決定されるのであるが、感情の無い俳句は、自然とその材料によつて新しい古いをきめるより外に仕方がないであらう。

彼は此の見地から、なるべく新しい材料を配合しようと企てた。其の手段としては、旅行に散策に、其の見聞を擴げることゝ絶えずつとめたのである。従つて新しい材料さへ得れば、必ず俳句が出来た。彼が病床に就く前は旅行したり散歩したりすることが出来たから、此の爲めに新しい材料をよく配合することも出来た。

若竹 や 豆腐 一丁米 二合

麥刈りて疫のはやる小村かな

薔薇深くピアノ聞ゆる薄月夜

目さませば我裾に春の月出でたり

史家村の入口見ゆる柳かな

パノラマを見て玉乗を見て日の永き  
商人やしばらく涼む橋の上  
三尺の木蔭に涼む主従かな  
秋海棠に齒磨こぼす端居かな  
八つ時の太鼓打ち出す芙蓉かな  
栗飯や不動参りの・大工連  
牧師一人信者四五人の夜寒かな  
小刀や鉛筆を削り梨を剥く  
冬ざれや稻荷の茶屋の油揚  
凧や大佛どのは聾なり  
乾鮭は魚の枯木と申すべく  
風吹いて今年も暮れぬ土佐日記

寄宿舎の窓にきたなき蒲團かな

乞食の鏹錢拾ふ枯野かな

貝塚に石器を拾ふ冬野かな

冬帽の十年にして猶屬吏なり

強弓を引きしほりたる袷かな

是等はいづれもそれらの題に引き合せて見て、新しい材料を配合したものといつてよい。若竹に豆腐と米、麥刈りと疫、薔薇とピアノ、裾と春の月、史家村と柳、パノラマや玉乗りと日永、商人と涼み、主従と涼み、秋海棠と齒磨、八つ時の太鼓と芙蓉、栗飯と大工、牧師と夜寒、梨と鉛筆、冬ざれと油揚等、皆それ／＼新しい取り合せである。

處が彼が病氣漸く進んで、専ら床に横つて又好める旅行も散歩も出来ないやうになつてからは、會遊の景を追想するのみで、自然其の見聞も狭くなつてしまつたのであ



る。従つて彼が主張するところの、新しい材料の配合も次第に少くなつた。これは當然のことゝ言はなければならぬ。その例を少し次に擧げて見る。

あたゝかな窓に風邪の名残かな

のどかさや障子あくれば野が見ゆる

三尺の庭を眺むる春日かな

鶯の來ぬ春の日となりにけり

春の夜を尺八吹いて通りけり

貝のつきし岩あらはるゝ汐干かな

我行けば畑打やめて我を見る

ぬれ乍ら接木してゐる小雨かな

つみためし手のひらの茶のこぼれけり

霞む日の湖見渡すや橋半

初雷の二つばかりでやみにけり  
春の山越えて日高き疲れかな  
岩の間にうづまく春の潮かな  
出て見れば南の山を焼きにけり  
兩方でにらみあひけり猫の戀  
庭に來る胡蝶うれしき病後かな  
紅梅のしだれ枝や鳥も來ず  
一つ落ちて二つ落ちたる椿かな

彼は斯くて、材料に於いて行きつまつた傾きがある。庭と春日、鶯と春日、接木と雨、岩間と春潮、紅梅と鳥等、何人が見ても殆んど何等取材の上の新しさを見出すことが出来ない。殊に初雷の句、猫の戀、椿の句となつては、他に何等の配合材料を持つて來ないといふ有様である。

然らば材料即ち客觀物そのものに新しさを求めないで、感情を現はし、その方面に新しさを求めたか、といふに勿論それは彼の從來の主義が許さなかつた爲めであらう、決してそれを試みなかつたのである。吾々の想像を以つてすれば、彼があれ程の病氣を持つ身となつたならば、屹度感情的方面が勢力を得て來て、それが端的に藝術の上に現はれて來るのが自然であらうと思はれる。けれども彼は決して今迄の態度を棄てるやうなことはなかつた。これ即ち彼が自分の主義に反くまいとする強い／＼意志の力によつて、それが壓迫せられたものであらう。これを以つて見ても彼が如何に自分の信念を持つることの堅く、それに對する努力の彈力あるものであつたかどわかる。

唯よく／＼注意して見れば、臥床前には、殆んど主觀的乃至は感情的の句が無く、あつても極く僅かであるか、又はそれも強ひて客觀化して終つたもの許りであつたのが、床上の人となつてからは、それが表面に直接現はされる場合が、稍眠に着くやうになつたといふ丈けである。例へば、

長閑さを獨りゆき獨り面白き  
袴着てゆかしや人の冬籠

の如き主觀句が辛うじて前期の句中に見出されるだけである。主觀を取扱つても又、古雛の古きを愛す男かな

の如く、男かなといつてすぐその感情を客觀化してしまふ。けれども後期の句たる『春夏秋冬』には、

雪解けて雪踏の音の嬉しさよ  
庭に来る胡蝶うれしき病後かな  
家主の無残に伐りし柳かな  
我庭にげんく咲ける嬉しさよ

などといふ感情を表現した句が、稍多くなつたやうに見える。けれども句數の上から言つたら、斯うした主觀的な俳句は全體の何十分の一だか何百分の一だかわからな

い。是等の句は唯、彼の病氣及びそれによる境遇から生じた感情の力が彼の理性と意志との隙間を窺つて、無意識に彼の藝術の上に現はれて來たものと言へよう。

最後にもう一度繰返していふならば、彼の俳句は、純藝術として見る時には、彼の名聲に價するほどの價値あるものか何うかは一寸疑問だが、新しき俳句の原野に、廣く實際上の句作の試みをなし、而して後より來る者に句作上の踏み出すべき第一歩を多方面に亘つて示し與へたところに、その意義と價値とを認める。彼の試みを出發點として相當の俳人が、彼の周圍に、或は彼の後に可也多く出てゐるのは當然である。だから彼の藝術は味ふ藝術といふよりも、研究すべき藝術、學ぶべき藝術といふ方が適切であるかも知れぬ。彼の俳句は技巧の俳句であると、今日批評さるゝのも、此の點に對する批評であらう。

## 第八章 歌人としての子規

一

私は俳人としての子規を談り、且つ論ずることに紙數を費し過ぎた爲めに、歌人としての子規を論ずべき紙數の少くなつたことを遺憾に思ふ。けれども此の方面に於ける子規を閑却することが出来ないから、簡單であるにせよ兎に角、多少論じて置かなければならない。

彼の文藝的活動は中々多方面で、俳壇の外に、和歌、新體詩、寫生文、小説等に至る迄手を着けてゐる。それ許りではない、假すにもう五年の餘命を與へたならば、繪畫、戲曲の方面に迄進んで行つたかも知れない。然し彼が實際に於いて俳壇以外のものゝ中で、最も力を注いだものは和歌と寫生文とであらう。

彼が和歌に手を着けた抑々の初めは、三十一年二月『日本新聞』に『歌人に與ふる書』

を竹の里人の名を以つて書いたのがそれであつた。それが『再び歌よみに與ふる書』となり、『三たび歌よみに與ふる書』となり、遂ひに『十たび——』に及ぶ。それから同年四月からは、『人々に答ふ』と題して、『其の十三』に及ぶ迄歌論を續けた。三十二年の夏には『歌話』を書いた。歌論として此の外に、『曙覽の歌』『短歌愚考』等があり、尙彼の病床隨筆たる『墨汁一滴』『棒三昧』『文界八ツあたり』等の中にも短歌論がちよいちよい混つてゐる。此の間に彼は自らその主張するところに立脚して、和歌の作をも續けてゐた。『百中十首』『葦狩十首』『繪を見て作る歌のうち』『病牀喜晴』等がその中の主なるものである。

## 二

私は彼の歌及び歌論を説く前に、先づ當時の歌壇に就いて鳥渡述べて置き度い。當時の歌壇は俳壇よりは稍進歩してゐたのである。即ち舊來の腐敗した歌人の外に、兎

に角それに飽足らないで、新しき境地を開拓せんと努力するものが、可也輩出してゐたのである。先づ當時に於ける舊派の歌人及び歌風は何うであつたか、といふに、香川景樹の系統を引いた桂園派が舊派の中心で、高崎正風、黒田清綱、税所敦子、下田歌子等の諸氏が其中にゐた。それから宮内省派といはれる小出察、坂正臣、大口鯛二、千葉胤明等の諸氏や、其れに屬しないまでも小杉楳邨、黒川眞頼等なども、同じ五十歩百歩の舊派歌人である。之等の人々は多く景樹派の、生命のない古典的形式的三十一文字を作つて、自ら高しとしてゐたのである。其處には行詰つた腐敗した傳統の外には何物もない。

之等に飽足らずして先づ短歌革新の聲を擧げたのは、落合直文氏で、彼は俳句に於ける子規と同じく、新しき青年歌人を養成することにひたすら努力を盡した。斯くて其門下に與謝野鐵幹、金子薫園、尾上柴舟、大町桂月、服部躬治、鹽井雨江等諸氏の新進氣鋭の歌人が出たのである。殊に與謝野鐵幹氏は當時(三十二年?)新しく新詩社



といふを結び、機關雜誌『明星』を發行して、頻りに自派の運動に努力し出した。明星派の特色とするところは、極端にロマンチックな、而して自由奔放な思想感情を端的に表現する點にある。恰度舊派のそれとは、全く正反對な兩極端に立つてゐると言つてよい。つまり彼等は急進派の先鋒である。

此外に同じ直文門下であり乍ら、稍落着いた作風を示してゐたのは、薰園、柴舟、躬治等の諸氏である。

それから當時の歌壇に於いて、直文とは全く別派に屬して起つてゐる人に、佐々木信綱氏がある。彼も矢張り舊派に飽足ちずして二十二年に竹柏園を開いて、自ら新しい路を切り開かうと努力してゐた。直文派の如く、急進的、情熱的ところが少ないけれども、徐々として新しき方面に進まうとしてゐた。だから世人からは折衷派だなどゝ言はれてゐる。『心の華』がその機關雜誌として發行されてゐた。

斯うした趨勢の下に進みつゝある歌壇に飛び込んで、兎に角それらの何れにも盲從

することなく、自己の見識に依つて新しく運動を起さんとしたのは彼れ正岡子規である。子規の運動は果して俳壇に於けるが如く歌壇に於いても中心勢力を得る迄の効を奏しなかつたのは、歌壇彼よりも進んでゐたのか、彼れ歌壇よりも後れてゐたのか、それはわからぬけれども、併し乍ら、全く足跡を止むることなくして止んだのでない事丈は確かである。根岸派といふ名が、彼の歿後も尙命脈を保ち、殊に最近に到つて、アララギ派——これは根岸派の系統と見るべきである——が歌壇の中心勢力となりつゝあるの事實を顧るならば、歌壇に於ける子規の名も、決して忘るべからざるものとなつたのである。

## 三

彼は俳句に於けるが如く、和歌にあつても、先づ古歌の研究から初めて、其の中から眞の傳統を求めた。斯くてその最も純眞なるものを萬葉集に見出したのである。萬

葉集は日本に於ける、歌集中の歌集であるとは彼の見解である。『當時の人は質朴にして特別に優美なる歌を詠み出でんと工夫するにはあらず、只思ふ所感ずる所を直ちに歌となしたる者と思しく、何の歌も眞摯質朴一點の俗氣を帯びず。固より平々凡々の歌多かれども時には雄壯勁健なる者あり。語淡にして旨遠き者あり。今日に至りて猶絶調と言はるゝ者少からず。其平凡の者と雖も後世の巧を弄して却て失する者に比すれば、尙かに數等上に在り』とは彼が萬葉集に對する見解の要點を示した言葉である。

又彼が萬葉以後に於いて、眞に歌人らしい歌人は四人しか無いと言つてゐる。それは源實朝、田安宗武、井手曙覽及び平賀元義である。然も彼が之等の歌人を推獎する所以のものは、彼等が何れも萬葉の系統を引き、萬葉から學んだところにあるのも、彼が如何に萬葉といふものを尙んだかといふことを證明してゐる。彼は實朝に對しては、『源實朝——専ら萬葉を學び、古今獨歩の秀歌をさへ多く詠み出でたりと雖も、唯實朝一人が特に卓出せしに過ぎずして、天下曾てこれに倣ふ者無かりしは、實に眞成

の歌人の世に絶えたる證にして、一方より見れば實朝が大見識を觀るに足る』といひ、田安宗武に對しては、『宗武は萬葉を學びて其骨髓を得たる者、其歌多くは萬集調なり。されど萬葉を固守して其範圍を脱する能はざりしが如き無能者にはあらず、云々』といつてゐる。又井手曙覽に就いては『曙覽が新言語を用ゐ新趣味を詠じ、毫も古格舊例に拘泥せざりしはなかくに萬葉の精神を得たるものにして、古今集以下の自ら畫して、小區域に局促たりしと同時に語る可きにあらず』といひ、平賀元義に就いては『元義の歌は醇乎たる萬葉調なり。故に古今以後の歌の如き理窟と修飾との厭ふべき者を見ず。……故に其眞摯にして古雅毫も後世纖巧嫵媚の弊に染まらず云々』といつてゐる。即ち何れも萬葉を學んだところは皆共通してゐる。

斯く極端に萬葉を好んだ彼が、其れの反對の傾向を持つてゐる古今集、及びその系統に屬する短歌を排斥したのは、當然のことではなければならぬ。古今時代の歌風を批評して彼は斯ういうてゐる。『平安朝に至りて和歌は全く奈良朝時代の臭氣を脱し一

種の新體を爲せり。其和歌たるや言語を前にして趣味を後にし、理窟を主として感情を従となす。……萬葉の如くむくつけき言葉無き代りには壯大の者もなく、幽玄の者も無し。試に古今集を繙きて見よ。開卷第一の歌『年の内に春は來にけり一年を去年とやいはんことしとやいはん』と言へるは單に言葉の上の洒落にして、何等の趣味をも含まざるにあらずや。斯くて古今及び古今調に屬する一切の歌を斷乎として排斥した。下つては當時の景樹派に屬する所謂御歌所派又は宮内省派などといふ舊派も亦、古今集の亞流として極力攻撃したのである。

#### 四

彼は短歌に於いても、俳句に於けるが如く、なるべく寫生即ち客觀的方面を重んじ、且つ又、例の明瞭なる印象といふことを主張した。唯だ俳句に於けるが如く感情的即ち主觀的方面をさう嚴しく排斥はしてゐないだけである。けれども俳句の態度を和歌

に於いても採用しようとしたことは、事實である。彼が曾て『明星』に出た落合直文氏の

わづらへる鶴の鳥屋みてわれ立てば小雨ふり來ぬ梅かをる朝

といふ和歌を批評して、斯ういうてゐる。『煩へる鶴の鳥屋』とあるは、「煩へる鶴鳥屋の鶴」とせざるべからず、原作のまゝにては鶴を見ずして鳥屋ばかり見るかの嫌ひあり。……此の歌は如何なる場合の飼鶴を詠みしか……即ち動物園かはた個人の庭か……若し個人の庭とすれば「見てわれ立てば」といふ句似あはしからず、「見てわれ立てば」といふは何うしても動物園の見物らしく思はる。若し動物園とすれば「梅かをる朝」といふ句似あはしからず。「梅かをる朝」といふは個人の庭の靜かなる景色らしくして動物園などの騒がしき趣に受け取られず。若し又動物園とか個人の庭とかに係なく只漠然とこれだけの景色を摘み出して詠みたるものとすれば、それでも善ければ併しそれならば「見てわれ立てば」といふが如き作者の位置を明瞭に現はす句はなる

べく之を避け、只漠然と其景色のみを叙せざるべからず。若し此の趣向の中に作者を入れんとならば、動物園か個人の庭かをも明瞭ならしむべし。云々』

これを見ても、彼は短歌に於いて、如何に例の寫生的態度、乃至は印象の明瞭を欲してゐるかを知ることが出来る。此の批評はまるで彼の俳句の批評を見るやうな感がある。併し斯うした批評は、極めて理知的なものであるから、ロマンチックな當時の新進歌人の同感を招致することが出来なかつたのである。

## 五

然らば彼自身の歌は何うであらう。彼は主義によつて俳句を作つたごとく、和歌も亦主義によつて作つてゐる。即ち俳句に於いては創作も議論も共に客觀主義を採つた如く、和歌に於いても亦、創作、議論共に客觀主義を採つてゐる。彼はなるべく感情を外に輕々しく現はすまいとしてゐる跡がよく分る。

丁と打てば丁と打つ槌音呖えて鍛冶屋の梅の眞白に散る

野分して墜倒れたる裏の家に若き女の朝餉する見ゆ

日にうとき庭の垣根の霜柱水仙に添ひて炭俵敷く

菜の花に日は傾きて夕雲雀しきりに落つる市川の里

是等の歌を見ても、その客觀主義に立脚してゐることがわかるであらう。併し乍らよく之を味はんとすれば、何處かにうるほひがない感じがして、心にしつくりと來ない。是れは果して何に原因するかと考へるに、彼は唯客觀的材料を叙述したゞだけで、其の材料の奥に作者自身の體驗が加はつてゐないからであらうと思ふ。即ち彼は和歌に於いても、試みといふことを忘れなかつたのである。彼は萬葉の價值を高唱しながら、その感化をうけたる彼の和歌が斯くも萬葉と相去ることの遠いものは、萬葉にあつては作者の體驗が一直線に端的に表はされてゐることに氣附かなかつたところにあるのではなからうか。



然らば、主觀的方面の例へば感情を明らかに表現の上に露はした和歌は何うであるか。斯うした和歌は客觀的な和歌よりも遙かに少ない、けれども俳句に於ける主觀句よりはいくらか多い。其の中から二三首抜いて見よう。

何事もつれなかりける世の中に死なばか人のあはれとも見ん

望の夜はこひしき人の住むといふ月の面を眺めつゝ泣く

草分けてしめちを取るとうれしくも大松蕈を見出でつるかな

これらも試みの和歌である。何うしても彼の感情の必然性といふものを持つてゐないやうに見える。けれども『墨汁一滴』などにある彼が興にまかせて作れる歌などに、よいがある。

夕顔の棚つくらんと思へども秋待ちがてぬ我いのちかも

いたつきの癒ゆる日知らにさ庭べに秋草花の種を蒔かしむ

裏口の木戸のかたへの竹垣にたばねられたる山吹の花

これらの歌は前のに比べると、餘程吾々に親しみがあるやうに感ぜられる。これは何に因るかといへば、例の試みの態度から生れたものでなくて、彼の體驗の内から湧いたものだからである。

又彼の歌の特長は、なるべく言葉の範圍を廣くしようとしてゐることである。即ち萬葉頃の言葉も用ひれば、俗語めいた言葉も用ひ、或は漢語も用ふといつたやうな工合である。例へば、

藤なみの花をし見れば奈良のみかど京のみかどの昔こひしも

別れゆく春のかたみと藤波の花の長ふさ繪にかけるかも

と詠むかと思へば、或は

薩摩下駄足にとりはき杖つきて萩の芽摘みし昔おもほゆ

○床先にぶらさげたるものを

武藏野の冬枯芒婆々に化けず梟に化けて人に賣られたり

などいふ歌も作るのである。又

○金州戦後

官人の驢馬に鞭うつ影もなく金州城外柳青々

城中の千戸の杏花咲きて關帝廟下人市をなす

の如き漢文句調のものもある。彼はくろうとの歌人、即ち所謂歌よみの歌といふものを頻りに排斥してゐるが、彼の歌を見ると、是れは又餘りに素人過ぎるの感がある。餘りにくろうと過ぎるのもマンネリズムの臭はげしく、さりとして又餘りに素人過ぎるのも吾々の感情がそれを迎へようとしないのである。此の外に、着想が何を主眼としてゐるのか、或は何を示さうとしてゐるか一向分らないやうなものがよくある。

この藤は早く咲きたり龜井戸の藤咲かまくは十日まり後

龍岡に家居る人はほとゝぎす聞きつといふに我は聞かぬに

等の如きはそれである。殊に前者には何等の思想も感情も、又はまとまつた客觀的

觀照そのものも無い。所謂『たゞごとうた』とは此事をいふものであらう。

要するに歌人としての彼は、さう大した功績を我が歌壇に残してゐない。唯ほんの小さな足跡を残してゐるに過ぎない。彼は俳句に於ける態度を直ちに和歌に移して成功するものと思つたのが、抑々の誤解である。唯萬葉の批評、實朝、宗武、曙覽、元義等の眞價の紹介等は、相當に價値あるものといふべきである。

## 第九章 子規の寫生文論

子規は人事よりも天然を好み、主觀よりも容觀を好むのは、彼が生れ乍らの性格から來てゐるものであることを前に言つた。さればこそ俳句に於いて寫生は最も適當したものであるから、それを採用するとは稱し乍らも、和歌に於いても、繪畫に於いても、矢張り寫生主義を採用してゐるのである。けれどもそのみではなく、更に文章に迄、それを及ぼしてゐるのである。三十三年一月の『日本新聞』に發表した『叙事文論』は、その主張を、具體的に書いたものである。此論文は言ふ迄もなく彼の寫生論を根據に据ゑたもので、云はゞ文章上の寫生論である。私は此の叙事文論を紹介する前に、先づ彼の寫生一般に關する考へを、順序として述べて置かなければならない。

彼が隨筆『病牀六尺』を見ると、一般寫生論として稍纏つた考へを書いてゐるから、それを紹介する。『寫生といふことは、畫を書くにも、記事文を書く上にも極めて必要

なもので、此の手段によらなくては、畫も記事文も、全く出来ないというてもよい位である。これは早くから西洋では用ひられて居つた手段であるが、併し昔の寫生は不完全な寫生であつた爲めに、此頃は更らに進歩して一層精密な手段を取るやうになつて居る。然るに日本では昔から寫生といふ事を、甚だおろそかに見て居つた爲めに、畫の發達を妨げ、又文章も歌も總ての事が皆な進歩しなかつたのである。』それが習慣となつて今日でも未だ寫生の味を知らない人が、十中八九もある。畫の上にも詩歌の上にも、理想といふ事を稱へる人が、中々少くないが、夫らは寫生の味を知らない人であつて、寫生といふことを非常に淺薄な事として排斥するのであるが、其の實、理想の方が餘程淺薄であつて、とても寫生の趣味の變化多きには、遙かに及ばないのである。

理想の作が必ずしも悪いといふわけではないが、普通に理想として顯れる作には、悪いのが多いといふのが事實である。理想とは人間の考へを表すのであるから、其の

人間が非常な奇才でない以上は、到底類似と陳腐とを免れぬやうになるのは必然である。固より子供に見せる時、無學なる人に見せる時、初心なる人に見せる時などは理想といふことが其人を感じしめる事がないではないが、略々學問があり、見識ある人に見せる時には、非常な偉人の變つた理想でない限りは、到底其の人を満足させる事は出来ないであらう。是れは今日以後の如く、教育の普及した時代には免れない事である。

之に反して、寫生といふ事は、天然を寫すのであるから、天然の趣味が變化してゐるだけそれだけ、寫生文、寫生畫の趣味も變化し得るのである。寫生の作を見ると、一寸淺薄のやうに見えても、深く味へば味はう程變化が多く趣味が深いものである。寫生の弊害を言へば、勿論いろ／＼の弊害もあるであらうが、今日實際に當てはめて見ても、理想の弊害ほど甚しくないやうに思ふ。『理想といふやつは、一呼吸に屋根の上に飛び上がらうとして、却つて池の中に落ち込むやうな事が多い。寫生は平淡であ

る代りに、さうした仕損ひは無いのである。』さうして平淡の中に至味を寓するものに至つては、其妙實に云ふべからざるものがある。

右の寫生論に於いて、彼の寫生に關する考へ、乃至は彼が理想を嫌ふわけを、大體知ることが出来る。又彼の『叙事文論』即ち寫生文論なるものは、斯うしたところから生れたものである。私はこれから、その『叙事文論』一篇の中に彼が述べてゐるところを、紹介しよう思ふ。

彼は言うてゐる、『こゝに言はんと欲する所は世の中に現れ來りたる事物（自然界にても人間界にても）を寫して面白き文章を作る法なり。或る景色又は人事を見て面白しと思ひし時に、それを文章に直して讀者をして己と同様に面白く感ぜしめんとするには、言葉を飾るべからず、誇張を加ふべからず、只ありのまゝ見たまゝに其事物を模寫するを可とす』と。

同じく叙事にも、子規の言葉を借りて言へば、『概叙的と個人的（叙述）』とがある。



概叙的とは、例へば左義長の事を記するに、

我地方にては一月某日の日左義長といふことあり。其方法は其前日に町中の子供等を打ちつれて家々を廻り、其家の飾りを貰ひ集め云々……翌朝郊外に三間乃至五間ばかりの見あぐる程の飾りの塔を築き云々……之に火を點すれば見る／＼火焔は天を焦して遂に塔は崩れ云々……此時皆持ち來りし餅を竹の尖に挟み其火の中にに入れて焼き之を喰ふなり云々……

の如く、その一般的やり方を述べることである。これでは左義長のやり方の大體は知る(是れは知識の上)ことが出來ても、左義長の趣味を感じる(是れは感情の上)ことは出來ない。けれども若し又、之を書き方を換へて、

……此日の朝は一面の曇りで空は猶雪を催してゐる。野はづれに出ると北の方に見ゆる山脈は一面に雪をかぶつて其中で一番高いのは○○である。あたりの麥畑には隈々にまだ雪が残つてゐる云々……

火は次第に擴がつて竹のはじく音は實にすさまじい、忽ち〇〇おろしが吹いて來たと思ふと焔は頂迄吹き抜いて、見る／＼眼前に一箇の火の柱は現れた、云々……の如き體裁に書いて、初めて、其の有様が彷彿として讀者の眼前に現れて來る。個人的(叙述)といふのは此の事を指すのである。もつとも此の如く作者自身の『實驗を寫すときには、其の記事は或る一部に限られて、全體の風俗儀式を盡さぬといふ缺點がある。』けれども美文即ち面白みの一點から見れば、全體を盡さないのは、毫しも缺點として見る事が出來ない、許りでなく却て或る一部分のみが眼の前に活動して來るために、益々空想に遠ざかつて、實際の感に近づかむるものである。風俗儀式其物が非常に他と異つて、面白き時は、只其風俗儀式を概叙するも、猶幾分の面白味を生ずるけれども、それとても猶乾燥無味に陥るのを免れることが出來ない。唯讀者に欠伸を催さしむるに過ぎない。さればそれを趣味あるやうに讀者に傳へるには、何うしても『個人的』の叙述に依るより外に仕方がない。

漸くて子規は斯う言つてゐる。『以上述べし如く、實際の有のまゝを寫すを寫實といふ。又寫生ともいふ。寫生は畫家の語を借りたるなり、又は虚叙（前に概叙といへるに同じ）といふに對して實叙ともいふべきか。更に詳にいはず虚叙は抽象的叙述といふべく、實叙は具象的叙述といひて可ならん。要するに虚叙（抽象的）は人の理性に訴ふる事多く、實叙（具象的）は殆んど全く人の感情に訴ふるものなり。虚叙は地圖の如く實叙は繪畫の如し。地圖は大體の地勢を見るに利あれども、或る一個所の景色を詳細に見せ、且つ愉快を感じしむるは、繪畫に如く者なし。文章は繪畫の如く空間的に精密なる能はざれども、多くの粗畫（或は場合には多少の密畫をなす）を幾枚となく時間的に連続せしむるは其長所なり。然れども普通の實叙的叙事文は餘り長き時間を連続せしむるよりも、短き時間を一秒一分の小部分に切つて細く寫し、秒々分々に變化する有様を連続せしむるが利なるべし。』

右に於ける彼の所謂虚叙は人間の理性に訴ふるものであることは、全く事實である。

けれども彼の實叙が感情に訴ふるものであるか何うかは、聊か疑問である。殊に彼の實叙は客觀を叙述するだけで、主觀をなるべく混へないやうにするといふ例の俳句上の彼の客觀主義を含んでゐるならば、矢張りそは知識的であつて、感情的でないと言はなければならぬ。此の事に就いては彼の俳句論を述べたところに批評して置いたから、委しいことは茲に省く。

それから彼は寫生といひ、有りのまゝに叙すといふけれども、唯無やみに何等の焦點なく叙述するのではなく、其の間に『多少の取舍選擇』を要することを説いてゐる。此の取舍選擇とは、『面白い處をとりて、つまらぬ處を捨つる事にして、必ずしも大を取りて小を捨て、長を取りて短を捨つる事』ではない。或る景色又は或る人事を叙するに、最も美なる處又は極めて感じたる處を中心にして描けば、其景其事自ら活動するであらう。而も其『最美極感』のところは必ずしも常に大なる處、著き處、必要なる處にあらずして、往々物蔭に半面を現すが如き、隱微の間にあるものである。例へば

薄暗い恐しい森の中に一本の赤椿を見つければ、非常にうつくしく且つ愉快な感じを起すものであるが、此時には椿を中心として書くに宜しけれど、椿を中心とするとは必ずしも椿を詳叙するの謂ではない。森の薄暗い恐しい様を稍々詳に叙して後に、赤き椿を點出せば、一言にして著しき感動を讀者に與へるであらう。

次に寫生については何麼文體がよいか、といふに、それは言文一致か又はそれに近い文體が一番適當してゐる。言文一致でもなるべく『平易にして、耳だゝぬを主と』しなければならぬ。言文一致の内に不調和なむづかしい漢語を用ゐるは極めて悪い。言葉の美を弄するは、寫生文以外にすべきである。寫實に言葉の美を弄すれば、寫實の趣味を失ふものである。

以上に於いて、子規の寫生論乃至寫生文論の一般を述べたつもりである。彼は斯うした主張を一方に振りかざすと共に、他方に於いては自ら寫生文を作つて續々世に發表した。『熊手と提灯』『根岸草廬記事』『病』『ラムプの影』『初夢』『くだもの』『九月

十四日の朝』『飯待つ間』等の幾多の小品文は、彼の所謂寫生文に外ならない。

此の寫生論は文藝史上には、彼の俳句と共に中々重大な意義を持つてゐるものである。これは明らかに寫實主義であると共に、素朴なる一種の自然主義、或は自然主義の發芽であると見ることが出来る。而して主觀主義といふ根深い日本藝術の傳統の中にあつて、自覺的に客觀主義を標榜したのは、明治文藝史上に萬丈の氣焰を吐くものである。

けれども當時の一般文壇、殊に小説界や新體詩界や又は短歌界にあつては、新しき主觀主義即ちロマンチズムが將に全盛ならんとしてゐる有様であつたので、彼の客觀主義の主張も唯俳句界及び俳人の手に於ける文章の範圍内に迎へらるゝだけで、それ以外の文壇は深く動かすことが出来なかつたのである。

日露戦争が過ぎて我が文壇は初めて客觀の重大なる事、閑却すべからざることを知た。たつ歐洲大陸殊に佛露の自然主義は潮の如く我が文壇を席捲し風靡した。日本人は

此新しい風潮に依つて初めて客觀主義に目覺めたのである。

けれども客觀主義はそれ迄日本に存在しなかつたのではない。十年近くも前に、既に子規に依つて唱へられてゐたのである。勿論子規の寫生主義と當時の自然主義とは、全然別箇の運動であり、其の主張も全く別種のものである。けれどもその客觀的なる點に於いては子規のそれは明らかに自然主義と一脈の相通するものゝあることは事實である。されば子規から初まつて僅かに叙事文としてのみ特色を保つて來た寫生文が、自然主義の運動が起ると共に、漸く文壇一般の中に乗り出して來て、小説家としての虛子、寺田寅彦、鈴木三重吉、野上白川等の諸氏を生むに至つたのも、必ずしも不思議ではない。

# 子規年譜

慶應三年（一歲）

九月十七日伊豫國松山市新玉町に生る。幼名を常規といひ松山藩士正岡常尙氏の息たり。

明治四年（五歲）

通稱處之助を升と改む。

同 六年（七歲）

法隆寺内の寺子屋に通學す。

同 七年（八歲）

松山市勝山小學校に通學す。

同 十二年（十三歲）

勝山小學校を卒業して松山中學に入學す。

同 十六年（十七歲）

松山中學を退き東京に出て、赤坂漢學塾或は共立學校に學ぶ。

叔父加藤拓川氏の紹介にて初めて陸羯南氏を知る。

同 十八年（十九歲）

一ツ橋の大學豫備門に入學す。夏松山に歸省。

同 二十年（廿一歲）

夏松山に歸省。十二月藩主創立にかゝる本郷眞砂町の常磐會寄

宿舎に入る。

同 二十一年（廿二歲）

夏季休暇中、向島長命寺境内の櫻餅屋に臨時寄寓す。



同 二十二年 (廿三歳)

三月末腦病に冒されて房總地方を旅行す。五月初めて咯血。此頃より子規と號す。夏休中松山に歸省。十一月大磯に遊ぶ。此冬頃より内藤鳴雪、竹村黃塔等と漢詩及び俳句等を作り合ふ。又非風、飄亭等と共に紅葉會を組織して、俳句の外、戲文、漢詩、都々逸等を作る。十二月歸省。

同 二十三年 (廿四歳)

六月高等中學校を卒業。夏松山に歸省。九月東京帝國大學國文科に入學す。野球を盛んに試む。

同 二十四年 (廿五歳)

五月『かけはしの記』を作る。夏歸省。九月大宮公園に宿を求めて追試験の準備をする傍ら俳句分類を思ひ立つ。駒込に轉居して小説『月の都』を作る。

同 二十五年 (廿六歳)

三月末に下谷區上根岸八十八番地に轉居す。六月『獺祭書屋俳話』を『日本新聞』に掲げ初む。大學二年の試験に落第す。夏松山に歸省。九月大學を退く。十一月日本新聞社に入る。十一月家族を東京に呼び出すべく、神戸に出張す。此年に『日本新聞』

## 同 二十六年（廿七歳）

に『かけはしの記』『旅の旅』『大磯の月見』『日光の紅葉』『舊都の秋光』『歳晚閑話』『高尾紀行』等を掲載す。

一月、自宅に俳句大會を開く、古白、鳴雪、松宇、飄亭、桃雨、得中、五州等集る。三月より『日本新聞』に俳句を載す。七月より八月にかけて奥羽を行脚す。十一月『日本新聞』に『芭蕉雜談』を載す。此年に『日本新聞』に右の外、『歳旦閑話』『俳人の奇行』『古人調十二體』『文界八ツあたり』『はてしらずの記』『春光秋色』『菊の園生』『貧居八詠』等を載す。吉川弘文館より俳話集『獺祭書屋俳話』を出版す。

## 同 二十七年（廿八歳）

二月一日上根岸八十二番地に轉居す。二月『小日本』の編輯主任となる。初めて此時中村不折氏と知る。七月『小日本』廢刊再び元の『日本新聞』に入社す。此年『小日本』に『俳諧一口話』『一日物語』（小説）を、『日本新聞』に『文界漫言』『字餘り和歌俳句』『閑遊半日』『當世媛鏡』（小説）等を表す。

同 二十八年（廿九歳）

身體の虚弱を顧みず、日清戦争の従軍記者となり、四月十日第二軍に従ひて宇品出帆、四月十九日旅順に着す。五月十日病のため金州を出發、十四日大連より乗船して歸途に就く。船中咯血し、病益々重し、廿三日神戸病院に入る。七月須磨に轉地療養す。八月松山に歸り、漱石氏宅に寓す。此時極堂、霽月等に俳を講ず。十月歸京。此年『日本新聞』に『羽枝一枝』、『陣中日記』、『養病雜記』、『俳諧大要』、『椿三昧』等を發表す。

同 二十九年（三十歳）

此年より全く病牀の人となりて殆んど歩行の自由を得ず。僅かに板橋赤羽目黒及び船橋に遊びたるのみなりき。此年に『俳人蕪村』を稿し初む。尙其外『日本新聞』に『俳句廿四體』、『從軍記事』、『三十棒』、『戯曲と四季』、『俳句問答』、『松蘿玉液』等を、『日本人』に『文學』、『新體詩』等を發表す。

同 三十年（三十一歳）

十一月瀧亭、碧梧桐、虚子等を集めて小説會を開く。此年より腰部の痛み漸くはげしく、膿汁盛んに出づ。松山にて柳原極堂氏

俳諧雜誌『ホト、ギス』を發刊す。『日本人』に『新體詩』『新體詩押韻の事』を、『日本新聞』に『明治廿九年の俳句界』『俳句と漢詩』『賤の涙』『俳人蕪村』を、『ホトトギス』に『俳諧反古籠』『十八字句』『石廿句』『試問』『俳句分類』を、雜誌『新小説』に『花枕』(小説)、『月見草』(小説)等を發表す。

同 三十一年(卅二歲)

一月より鳴雪、虛子、碧梧桐等と共に蕪村句集の輪講を初む。二月竹の里人と號して和歌改革に志す。三月『日本新聞』に作歌を發表す。句集『新俳句』を選す。九月『ホトトギス』東京にて發行することとなる。此年『ホトトギス』に『試問』『蕪村忌』『或問』『拜啓』『雜感』『古池の句の辨』『小園の記』『土達磨を毀つ辭』『花賣子歌、豐年の歌』(新體詩)、『車上所見』『文學美術漫評』『蕪村と兒童』『吾幼時の美感』『村の光』(新體詩)等を、『日本新聞』に『三十年の俳句』『閑人閑語』歌人に與ふる書』『百中十首』(和歌)『人々に答ふ』(歌論)等を發表す。

同 三十二年 (卅三歲)

三月十四日子規庵に歌會を開く、これ即ち根岸短歌會の始まり也。五月病危篤に陥れど又稍快復す。此年『ホトトギス』に俳句新派の傾向』『雲の日記』『明治三十一年の俳句界』『俳句の初歩』『和歌』『燈』『冬の東京』『炭太祇』『幻住庵の事』『俳句と聲』『隨問隨答』『戀』『蝶』『赤』『俳句評釋を讀む』『橋の雫』『旅』『みざり車』『墓』『飯待つ間』『星』『柚味噲』『闇汁圖解』『俳諧三佳書序』『根岸草廬記事』『熊手と提灯』『病』等を、尙又『日本新聞』に『萬葉集を讀む』『曙覽の歌』『病牀謔語』『歌話』『道灌山』等を發表す。

同 三十三年 (卅四歲)

此年寫生文の創始を企つ。四月廿九日、人力車にて龜井戸の藤の花を見にゆく。『ホトトギス』に『新年』『犬』『ランプの影』『明治卅二年の俳句界』『糞の句』『奇想變調錄』『畫』『召波榊良句集序』『車上の春光』『水滸傳と八犬傳』等を、又『日本新聞』に『鶴物語』『短歌愚考』『龜戸まで』『人の紅葉狩』等を發表す。

同 三十四年 (卅五歲)

此年に入りてより病漸く篤く、されど尙其の強き意志と元氣と

を以つてそれを打ち抑へ居れり。此年『ホトトギス』に『初夢』『死後』『病牀俳話』『くだもの』等を發表す。尙『日本新聞』に隨筆『墨汁一滴』を一月二十日より七月二日迄執筆して載せたり。

同 三十五年（廿六歳）  
前年の『墨汁一滴』の續きとも見るべき隨筆『病牀六尺』を五月五日より『日本新聞』に載せ初めて、臨終に近き九月十七日に至りてやむ。此間病牀にありて繪筆を手にして寫生を樂しむ。此年『ホトトギス』に『天王寺昨の蝸牛廬』『病牀苦語』『徒歩旅行を讀む』『九月十四日の朝』等を發表す。九月十九日午前一時遂に逝く。辭世の句として「糸瓜咲いて痰のつまりし佛かな」「痰一斗糸瓜の水も間にあはず」をととひの糸瓜の水もとらざりき」を遺す。田端大龍寺に葬らる。

大正七年六月一日印刷  
大正七年六月六日發行

(定價金六十錢)

◀規子岡正▶

著作者

西宮藤朝

發行者

佐藤義亮

東京市牛込區矢來町三番地中の丸

發行所

新潮社

東京市牛込區矢來町三番地

電話番町(八)八九九番

印刷所

東京市神田區宮本町五  
電訂下谷四〇六七番

新潮社印刷部

印刷者 高橋治一

番二四七一(京東)替振

子規  
選集  
花  
枕

正岡子規作

第十版  
定價三十八錢  
郵送料六錢

明治新文藝の先驅者とし、革命家として、最も華々しき功績を我が文壇に残せる正岡子規がその全集中より小説・紀行・小品・寫生文・和歌・俳句の各方面に於ける代表的傑作を蒐録せるもの。眞に明治文藝史上の一大紀念塔たらずんばあらず。半生を病に伏し、血を吐きながら書ける其作には、悲涼の韻あり、凄愴の情あり、一字一句恻々として人を動かす。人格の底深く根ざせる眞個生きたる文學は是れ也。

小説  
俳諧師

高濱虚子著

第八版  
定價三十八錢  
郵送料六錢

夏目漱石氏が「女郎上りの細君の性格をかいて斯様に活躍せるもの明治に在つて正に空前……」と激稱せるもの也。俳諧師十風夫婦の悲惨なる生涯を描くに彼の子規以來の寫生文の筆を以てし、謂ゆるホト、ギス派文藝の最頂點に位置する作物にして、其の中には著者自身の青年時代點綴せられ、正岡子規、内藤鳴雪翁を始め子規左右の人々活躍し、作品としての價值以外、更に事實上の興味極めて豊かなる作品也。



# 道

(創作集)

高濱虚子氏著

▽木綿表紙絹張り▽定價八十五錢  
▽著者題字極美本▽送料八錢

寫生文派の別旗幟を樹て、文壇の一角に雄飛せる高濱虚子氏が、久振りにて短篇集を公にせらる。作者齡こゝに四十、人間味の圓熟はこの渾然たる藝術品を成せる也。載する所すべて七篇、いづれも最近に於いて噴々の世評を得たる傑作にして、作者會心の作のみとす。作者自ら曰く、「これ等は皆作らうと思つて作つたのではない。書かねばならぬやうな心持がして書いたものである。」と。眞に光あり力ある藝術はこれ也。

## 近松秋江氏著 青葉若葉

特製美本=新刊  
定價五十五錢=送料六錢

作家としての秋江氏は既に定評の存するあり。而も、詩味に富み世間味に豊かなる一種の小品文の作者としては、何人も追隨すべからざる独自の地位を文壇に占めつゝあり。自然を賞し、女を品し、羈旅の懐ひを描き、都會の夜にあこがれ、狹斜の情を寫して**自然詩人**としての一面と**好色のたはれ男**めける一面と相混じて、そこに氏獨特の面白味あり。本書はこれらの小品を集めたるものにして、氏の小説集以上に盛んに愛讀せられつゝあるもの、眞に偶然にあらず。以て机上の伴侶となす可く、以て枕頭に親しむべき也。

岡本綺堂氏著（第八版）

# 近松情話

竹久夢二氏裝、定價九拾錢、送料八錢

長田幹彦氏著（第五版）

# 西鶴情話

竹久夢二氏裝、定價九拾錢、送料八錢

吉井 勇氏著（第五版）

# 源氏情話

竹久夢二氏裝、定價九拾錢、送料八錢

近松の戯曲に現はれたる美しき戀のさまを、短篇小説風に書き改めしもの。若き男女が、うつゝな戀の夢と戀のなげきとは、色彩の豊かな作者獨特の筆を以て名優、臺ながらに描き出されたり。稀有の才筆として、世評益々高し。

西鶴の書、當局の嚴禁する所となりたやすく讀み難きを憾み、好色本中の双壁たる『一代女』『一代男』の二大作を現代文に書き改めしもの也。艶冶麗の彩筆、たはれ男、たはれ女の情事を描き盡くせる好個の情話として、今の人の讀むに最も適す。

戀愛文學として古今に冠絶する源氏物語を現代文に縮寫し、その情趣豊かなる部分を悉くして此一巻を得たり。事實は光る源氏一生の情史、筆者は現代華胄の伊達男たる吉井氏。作と人と相待ち相得て『源氏』以後更に新たなる『源氏』あるの思あらん。

島崎藤村氏作

縮刷  
**破戒**

第五版

▼價七拾錢、送料八錢

縮刷  
**家**

全一冊

第七版

▼價八拾五錢、送料八錢

夏目漱石著(七版)

漱石  
選集  
**色鳥**

定價壹圓參拾錢、送料八錢

田山花袋氏著  
三部作縮刷完成

(1)  
**生**  
三版

(2)  
**妻**  
三版

(3)  
**縁**  
四版

定價各六錢 \* 送料各六錢

『生』は若き文學者の生活を中心として新しく伸びゆく命と古く朽ちゆく命との對照に生の悲劇を描き『妻』は一文學者の壯年時代を描き主として兩性關係の祕義をおぼく。『縁』は蒲團の後日譚とも稱すべきもの。何れも、花袋氏の自傳小説也。

曾て如何なる集にも收められざる『倫敦消息』に始まり、『我が輩は猫』『二百十日』以下、漱石先生が十數年間に亘れる全著作中より最も代表的なるものを選び、その短きはすべてを採り、長きは最も要所切所を含める部分をとりに其の前後を解説し、而して是れを歴史的に排列して以て一冊となす。堂々五百五十頁まさに、漱石先生全傑作選集と呼ぶ可き也。

■ 最新  
日本文豪評傳叢書

特價六錢  
送料六錢  
美本六錢

明治及び大正の文壇に文豪の名を謳はれた人々の全面目を傳ふるものである。海外崇拜の時代漸く去つて國民自ら其の独自の文學を生まんとする時に當り本叢書を刊す。必ずや一般の歡び迎へらるゝことを信ずる。

第一編

■ 人及び藝術家としての

國木田獨步

(再版)

江馬 修著

第二編

■ 人及び思想家としての

高山樗牛

(再版)

赤木桁平著

第三編

■ 人及び藝術家としての

尾崎紅葉

(新刊)

本間久雄著

第四編

■ 人及び藝術家としての

正岡子規

(近刊)

西宮藤朝著



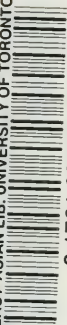


KITAZAWA BOOKSTORE

北澤書店

東京・神保町2-3 TEL(261)1271

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03063 1816

PL

811

A83

Z828